
ぬらりひょんの孫～魑魅魍魎の主の影

鎌蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひょんの孫／魑魅魍魎の主の影

【Zコード】

N6760S

【作者名】

鎌蛇

【あらすじ】

魑魅魍魎の主、ぬらりひょん。その孫一奴良リクオ、彼にはとも信頼していた妖怪がいた。その者は、リクオの僕であり、義兄弟であり、彼の影もある者だった。その名は――
原作に沿つていますが、たまにオリジナル話が入りますので、ご注意してください。

第一話 田覚め（前書き）

思いついたで書きました。超初心者ですが、ぜひよろしくお願ひします。

第一話 田覚め

「暗い、ここはどこだ？」

闇の空間で俺は田をさました。

そこは何もなく、

誰もいなく、

景色もわからなく、

音すら聞こえない。

「どうしてここにいるんだ？」

体を動かし、辺りを歩き回った。

だが、どこを歩いても暗く疲れもでてきて、ついに俺は倒れてしまつた。

なんとか体を動かそうとしたがダメであった。そのうえ、だんだんと眠気が襲ってきた。

「ダメだ、意識が、」

その後、俺は疲労によりまた気を失った。

その時、誰かが俺を運んでいったことには、気がつかなかつた。

第一話 出会い（前書き）

早くも一話目です。ちょっとした感動話です。

第一話 出会い

「うへへへへ」

再び俺が田を覚ますと、そこはなつかままでとは違う所だった。
景色があり、朝の日差しも鳥たちの鳴き声も聞こえる。

「あつ、田が覚めたよおじいちゃん」

「おお～～！ そつかそつか」

5・6歳くらいの子どもと老人がやつてきた。

「ワシはぬらりひょん。でこっちが孫のリクオジヤ。お前さんを見つけたのもリクオジヤ」

「へへ、よろしくね」

ぬらりひょん・・・ぬらりひょん！？ あの妖怪総大将の…！ 本物か。

・・・っと驚く前に俺は他の質問をした。

「あなたが俺を助けてくれたんですか？」

「わうじゅよ。あの山の奥で倒れていたんじゅよ。」

話を聞くとどうやら俺は山の中をさまよっていたらしい。俺は丁寧に自己紹介をした。

「俺の、いや、僕の名はリュウガと言います。あと、うへへへ、ダメだ、頭が痛い。何かを思い出そうとするとき急に頭が痛みだす。

「どうしたの？ 大丈夫？」

リクオが心配してきてくれた。

「あついいえ、大丈夫です」
「これ以上迷惑かけるわけにはいかない、すぐに出て行けりと想つて
いたが。

「どうじや？お前せん見たど！」妖怪でもあるし、ワシの養子にな
らんか？」

俺が養子に…ぬううひょんの…？」

「しかし、何者かもわからない僕なんかを。」

「構わんよ。ワシが言えばみんな従うよ。今日からワシが親じや。
別にいいじゃろコクオ？」

「うん。これからもよろしくね…」

なんだか、このあたたかい温もりは？

こづして俺はリクオと義兄弟になつた。

第一話 出会い（後書き）

最後牛鬼と同じようございました。

第三話 妖怪覚醒（前書き）

やっと原作に入りました。遅くなつてすいません。
では、どうぞ――！

第三話 妖怪覚醒

俺がリクオと義兄弟になつて、二年経つた。

「兄さんー。早くしないとうバス乗り遅れるよ

「うん。今、行くよー」

義兄弟になつた日からリクオが兄、俺が弟になつた。

「お待たせー」

「さあ、早く行こう」

なんとか間に合つた。バス停には幼馴染の家長力ナが待つていた。

「おっそりょ。一人とも！」

「じめんね。兄さんが遅れてー」

「だつてさあ～みんなが～」

「ちょ、兄さんそれは言つてはダメだよー」

このように日常で学校で授業を受ける。

だが最後の授業で問題が起きた。クラスメイトの清継君の発表にリクオが文句を言つたのだ。

妖怪を悪者扱いにされたからだ。

帰り道では、リクオは悲しい顔をしていた。妖怪が悪者だと言われたからだろう・・・

さらに今日は寄合あり、叔父上がリクオとも呼んで幹部の妖怪たちに。

「三代目の件……ワシの孫リクオに据えよつと思つてな。」

(よかつた。見たところ幹部のガゴゼが三代目を狙つてゐるからな)

「い、嫌だ！」、「んな奴ら一緒になんか居たら、人間にもつと嫌われちやうよ……」

・・・まったく期待はずれにもほどがある、俺はリクオを守ると決心したのに。

次の日の帰り、リクオがバスに乗らなかつたので、一人で帰ることになつた。

「あつ、リュウガ」

カナが俺の隣の席にやつてきた。

「兄さんはどうしたの？」

「昨日のことまだ拗ねてるみたい。ねえリクオ君とは双子なのにリュウガはなんとも思わないの？」

「えついや、俺はその、兄さんとは違つから」

「違うつてどういうこと？・・・・・キヤアアア！……」

突然トンネルが崩れた。その様子を謎の集団が見ていた。

・・・イツタ～～岩がおもいつきり頭に当たつたようだ。痛みをおさえ、俺は辺りを見回した。そこにいたのはガゴゼ率いる屍妖怪たちだつた。

「ガガガ、まだ生きてましたか。なかなかしぶとい、とにかく……ここにいる全員……皆殺しじゃ……若もろともな」

まづい！・・・・ん？何だ、血があつくなつて力がわいてくる感じは。頭の中でいろいろな記憶がうつりだした。

「そうか、俺は……」

「けつ、よそみしてるんじや・・・・ぐつは……」

俺に向かつてきた妖怪は一瞬で真つ一いつになつた。

「思い出した。俺は・・・妖怪だつたな」

そのまま俺は、手に持つた大鎌で屍妖怪たちを切り殺していくつた。残るはガゴゼだけになつた。

「こ、こんなバカな・・・私の組が・・・」

ドゴオオオオン

「ガゴゼ、貴様・・・なぜそこにいる？」

瓦礫を避けて入つて来たのは長い髪を持ち百鬼を従えた少年だった。

「遅いぜ〜リ・ク・オ」

今俺にはすぐにリクオの匂いに氣づいた。

「お前は・・・もしかしてリュウガなのか？」

どうやらものすごく変わつてゐるみたいだな。まあ、口調も変わつてゐるし。

「若だというのか・・・しかし・・・」いつら殺すぞ！！若の友人を殺されなければ…」

やべ、すこし目を放した間に！ガゴゼがカナたちを盾にしようとした時。

「七八九」

リクオがガゴゼの顔を切り裂いた。

「ガゴゼ、お前なんかに奴良組は継がせねえ。俺が三代目をついでやらあ！人あだなすような

やーは俺かゆるさねえ！世の妖怪ともに告げろ！俺が魑魅魍魎の主になる！！すべての妖怪は俺の後ろで百鬼夜行の群れとなれ！！！」これだ、俺が従うべき主は、リクオ・・・お前だけだ。空には朝日が昇っていた。ガゴゼを真つ二つにした直後にリクオは倒れた。

「大丈夫ですか、若！？」

雪女や青田坊などが駆けつける。

「あ～～もしかして妖怪の血を4分の1しか引いてないから一日の4分の1だけ。夜しか妖怪になれなかつたりして・・・・・」

「「「「「え――そ、それってどーなるのぉ――!?若アアア

それから数年後、俺とリクオは中学生になつた。どちらともそれ以來妖怪になつてないがな。

「リュウガ、学校行こ――」

「分かつた。いつてきま———つす！」

第三話 妖怪覺醒（後書き）

感想ください。

番外 設定

奴良 リュウガ

妖怪 影犬とカマイタチの子

両親は若い頃からぬらりひょんの百鬼に加わっていて、父親である影犬は奴良組幹部の中で最強の妖怪だった。400年前の京の出入りでカマイタチと出会い長い末結婚をしてリュウガを生んだが陰陽師との戦いで両親ともに滅せられた。その時の記憶を失ったが、ガゴゼとの一件で初めて妖怪になり記憶も甦った。ぬらりひょんの配慮で養子になつた。リクオとは同じ年だが弟として暮らしている。学校ではリクオのことを、兄さん、と呼び妖怪の時は・主・と呼ぶ。

身長168? 体重50キロ

髪は人間の時は黒色、妖怪の時はリクオ同様長くなり紫色で目は青色になる。

服もリクオと同じものになる。

獣化

口調が悪く自分が楽しいならそれでいいような事をしか考えない。そのため人型の時と対立してしまつときもある。だが、仲間のことになると優しい。

畏（人型）大鎌を使った技で戦う。影があるところならどこでも移動できる。

（獣化）おもに父親と同じ技を使って戦う。

番外 設定（後書き）

おかしかつたら、教えてください。
お願いします。

第四話 旧校舎で再覚醒（前書き）

またも長く書こちやいました。
がんばりました。

第四話 旧校舎で再覚醒

登校中にリクオが「もう絶対に学校で妖怪の話はしない！立派な・・・人間になるんだ」

「そんなこと言わずに・・・兄さんは三代目になるって言つたじゃないか。」

「知らないよ。だつたらリュウガが継げばいいじゃん。」「ダメだ・・・リクオは総大将の孫なのになあ〜〜

「ねえ、三代目ってなんのこと？」

「えつ！？い、いや。なんでもないよ。ね、兄さん？」

「あ、うん。そうだよ。なんでもないよ。」

いきなりカナに後ろから声をかけられてびっくりした。
教室に行くとなんだか騒がしい。友達に聞くと清継が妖怪は実在すると言つているらしい。

「ねえ、清継君。昔、妖怪は実在しないって言つてなかつたつけ？」

「そう。昔はそう言つていたが僕は出会つてしまつたんだ。」

「だ、誰に？」リクオが聞いた。

「闇の世界の住民にして、若き支配者。そして共にいた大鎌の妖怪に。」

(ね、ねえリュウガ。清継君が言つてるのって……)

(う、うん。僕たちのことだね。)

「ほれたんだよ！彼の悪の魅力に取りつかれたのさ……もづ一度会いたい・・・だから
彼がいつそな場所を探しているのさ……」
どうしよう・・・目の前にいるからな・・・一生お目にかかれないので。

「そこでだー！今夜、うわさの旧校舎に行きたいと思つてing。」

「旧校舎？」

「兄さん、東央自動車道はさんで向こう側にある所みたいだよ。黒
が言つにはそこに
ザコ妖怪や若い妖怪などが住み着いているらしんだ。」
ちなみに黒とは、奴良組本家の黒田坊のことだ。

・・・なぜ来たんだろ？まあ、本当にいて清継たちが襲われたら
まずいし。

けど、なぜ俺とリクオが名譽隊員になつてているだろ？

「よし、そろつたね。メンバーは7人か・・・」

7人か？。清継と俺にリクオ、島と・・つてあれ？なんでカナも
！？

それと・・・あの二人は・・・

「及川氷麗です！」——いうの大好きです。」

「俺は倉田だ！俺も好きなんだ！」

氷麗に倉田？見たことがないなあ・・・・・・けどこの匂い・・・・・
・・・ん！？」

「すいません！ちょ、一人来て！！」

氷麗と倉田という名の一人を連れてきた。

「雪女と青田坊。なぜここに！？」

雪女と青田坊は奴良組本家の妖怪で俺とリクオの側近だ。今は人間に化けてるが・・・

「もちろん御供です、リュウガ様。」

「そうですよ。四年前からずっと学校も通つてたんですよ。」

そうだったのか・・・全然気がつかなかつた。

「ど、とにかく。妖怪だってことはばれないように頼むよ。」

「分かっていますよ、リュウガ様。」

そして旧校舎に侵入して各部屋を回ることになつた。

カナはやはり怖いようでリクオの後ろにつきつぱなしである。しようがないけどね。

「とにかく、こと細かく調査だ。ここに妖怪がいるならばあるのにお一方につながるかもしない。」

それはない。・・・目の前にいるから。

最初に入ったのは美術室だったところだ。兄さんの横を歩いて隅っこまで歩いていくと・・・

「あ、今私のこと・・・」

いたよ・・・・あれが黒の言つてたザ「妖怪だな・・・・兄さんも
カナに見せない様に戻る。

ちなみに近づいてしまったのでドアを勢いよく閉めとおもった。

その後兄さんの活躍でみんなに見せないようにしていった。
俺は雪女と青田坊に他の人に聞こえないように話した。

「な、なあ雪女。」じこつて確實にいるよな。

「はい。人間の血肉に餓えたやつらがいましたよ・・・って、それよりここで雪女で言つてはダメです。氷麗つてよんでもください。」

「及川さん……じゃ、ダメなの?」

「・・・つ、氷麗がいいです・・・」

「青も倉田つて呼べばいいの？」

「はい！お友達の前では倉田でお願いします」

「分かつた。これからもよろしく。」

「はい。リエウガ様！！」

いわなりの奇声に続いて

「『わやああー！』でたあー！」

ついに妖怪に見つかってしまったようだ。

しかも・・・・・兄さんたちが・・・・・襲・・・・・われ・・・て・・・

・・・・・

「「若ーー！」

雪女と青がリクオを守るために飛び出そうとする

「待て、雪女。青田坊」

ああ～～久しぶりのこの感覚。体中を血がかけまわるこの感じ。すばやく兄さんのそばまで翔る！

「奥義 殺戮風の舞」

鎌を振った直後に鋭い刃物化した風が妖怪たちをバラバラにした。風が吹き終わると、そこには粉々になつた妖怪の残骸しかなかつた。ようやく妖怪になれて今とても気分がいい。

「大丈夫カリクオ？」

「え・・・えっと、リュウガなの？」

俺が妖怪になつてるのを見て驚いているようだ。
まあ仕方ない。リクオはあのときの記憶がないけど、俺にはあった。

「リュウガ様ー、妖怪化できるなら最初から言つてくださいよ。」

「いや、さつき突然できるようになつたんだ。けど、これからはなれるよ。」

雪女と青がこひらに駆けつけてくる。もちろん今は妖怪の姿だ。

「えー? 何ー? ビジビシビビー? だって君ら……学生で……」「護衛ですよ。」「

「四年前のあの日からお供してたんです!」

「さ、聞いてないぞおーー? リュウガは知つてたの?..」

人間に戻つてみるとやつぱり背が短くなるし、口調も変わる。

「えーっと、僕もさつき知つたんだ。まあ、とにかく兄さんは妖怪の主になるんだから。」

「ボクは三代目なんかにならないよ……ボクは平和に暮らしてたいんだあ~」

まだ言つてるよ。まったく。

「ねえ、まだ目あけちゃダメ? 怖い?」

あ、そいえばカナがいたんだ。この様子だと話は聞かれなかつたな。よかつた。

第四話 旧校舎で再覚醒（後書き）

次もまた長文になるかも・・・。
感想お願いします。

第五話 義兄弟の契り（前書き）

遅れました。
少しずつやっているので・・・

第五話 義兄弟の契り

「やつと帰ったかお前達！まーた学校なんぞに行つとんたんか！…」

「あたり前でしょ？中学生なんだから。ね、リュウガ！」

「うん。やうだよ、叔父上・・・ん？」

俺はリクオの答えに賛同した。

「あのなあ・・・ね前はワシの孫、妖怪一家を縛る魔の限りを以へ
す男にならんかあーーー！」

「断る・・・といひで如何したのリュウガ？」

「うん。なんか血の匂いがするんだ・・・」

疑問に思いながら玄関に入ると下僕妖怪たちが何かを食べながら挨拶をしてきた。

「何その高級菓子・・・・・・」

「じーちゃん！？まさかまたどつかから盗んだの！？悪行はほどほど
どに付て言つてるじゃないか！！」

リクオが叔父上と口論するのを呆れながら妖怪たちに混ざった。

「この菓子は鳩殿が持つてきたの？」

「はい、そうです。よくわかりましたね？」

「ハハ、こんなにも血の匂いがしたら分かるぞ。」

鳩には合つ度に吐血をされたことがあるので、匂いですぐにわかつた。

「ん？ ちよひ、兄さん！ それ以上絞めたら叔父上逝つひやうよ……」

「え？ ……うわー？ ジ、爺ちゃん？ 大丈夫！？」

その後、真っ青な叔父上を必死に前後に揺らして意識を取り戻させた。

俺は菓子を2つ持つて、リクオとともに鳩のいる部屋に向かった。

「若ーーお久しゆいぞこますーー！ リュウガも元気そうだな」

「はー、本当に久しぶりですね鳩殿」

「ぜ、鳩さんお久しぶり！」

昔に比べてリクオは苦手になっていた。

「はつはつはー！ 鳩さんなど……鳩で良いのに！」

鳩一派の頭領になる前はよく薬草の知識などを教えてくれたり、よく三人で遊んだこともあった。

「私が持つていいくわー！」

「いーえー！ 私が給仕するのです！」

なにをやっているのか・・・お茶」ときに争っている。

「若ーーーお茶ですわーーー」

危なつかしい足元で雪女がやつてきた。

「…………」

一瞬の出来事で、ゆっくりと熱いお茶が降りかかった。お盆にあつたのは三杯。なぜか一杯が俺に一杯がリクオに向つている。リクオは腕、俺は頭にお茶がかかつた。

「あつちいい～！」

「熱い～！」

「わあ、若。リュウガ様。ご、御免なさい！？フウ～～！」

「え！？ちょ、ちょっと待つーー」

雪女がすぐに冷やすためにかかつた部分を凍らせた。リクオは腕、俺は頭という事でみるとうちに体中が凍つた。

「――――――――――

「りゅ、リュウガ！？大丈夫！？」

「ひいい～！？」

「クルルウアアアー！雪女！？何しとるんじやい。リクオ様とリュウガによ、どうしてくれるんじやい」

「す、すみませんでした～！」

(誰かお願い。この状況に気づい・・・て・・・)

その後俺は、風呂に投げ込まれて助かつた。

リクオは鳩と三代目についての会話で仲違いをしてしまつて、カラス天狗から夜の勉強をしたそうだ。内容は奴良組の役割が何なのか、それに関するものだつたらしい。

「あつ、リュウガもう大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。あれ？兄さんどこか行くの？酒なんか持つて
これから鳩君に謝りに行くんだ、結果的に無理強いさせちゃった
のは悪いんだし！だけどちょっと言いにくいんだよ。カラス天狗も
一緒にけど、リュウガも付いてくれる？」

「うーん、いいよ。どうせ暇だし。」

「ありがとう。さっそく行こう！」

おばかくるま車に乗って5分は経つた。そろそろ着くころだ。

「！？・・・？羽根・・・？」

リクオが宙を舞ってきた羽根を捕まえて呟いた。

「若！－！鳩様の屋敷が・・・わつ、か・・・火事ですよーーー！わ
ー・・ど・・どうしますーーー？」

朧車が悲鳴を上げたことで俺も気付いた。そこら中火だらけであつ
た。

「な・・・」

鶴天狗は驚いている。

「そ・・・そのままーーー！」

「えーー？」

「何でーー？」

「兄さん！？」

「そのまま・・・つっこんでええ！！！」
リクオが大きな声で叫だことで俺は心の中で覚悟した。

ドゴオオオオオン

「鳩くん！？」

「ゼ、鳩殿！？」

飛び降りた二人の目の前には剣を手に座り込んでいる鳩の姿だった。

「『ふつ・・・・り、リクオにリュウガ・・・?ビーしてお前達が?
』こく・・・お供はビーした・・・オレじゃ・・・お前は守れねえ
つてのに・・・」

「カラス天狗、こいつらは・・・？」

「わかりませんが、ゼン一派の幹部だった思います・・・」

「くつ、蛇太夫のやつ・・裏切ったんだ」

「くく・・・丁度いい・・このウツケ者の反対派は幹部にも多いと
きく・・ぬうりひよんの孫・・殺してオレのハクがつくつてもんだ
！」

そして蛇太夫は真っ直ぐ俺とリクオと鳩の方へ――

「兄さん危ない！」

ダメだ。今から変化しても間に合わない。

「許せねえ・・・」

「ど、どけー？リクオー！お前に何が出来るー？」

「下がつてろ」

リクオの雰囲気が変わり、リクオはその牙の間に護身刀を滑り込ませ、蛇太夫を真つ二つにした。

「・・・・・あんた誰だよ・・・？」

「リクオ様、また覚醒されたのですか」

「リクオ？リクオだつてー？」

「よう鳩、この姿で会うのは始めてだな・・・」

リクオは刀を仕舞いながら言った。

「まったく。驚かせてくれるよ」

俺は呆れながらリクオを見た。その後火を消してなぜ変化したのかの説明になつた。

「なるほど、四分の一は妖怪だつてーのか・・・」

俺は近くの瓦礫に腰をおろして、その姿のリクオに二代目を継いで欲しいという鳩を見ていた。

「・・・・・飲むかい？」

リクオはその答えを言う事無く、手に持つてきた酒を掲げた。それ

に鳩は快く受けながらリクオの杯を求めた。

「・・・俺は正式にあんたの僕になりてえ・・・親の代じやねえ直接あんたから」

「いいぜ。鳩は弱ええ妖怪だかんな・・・オレが守つてやるよ。」
そして二人は・・・盃をかわした。

「おしいですねえ。朝になるとまた戻つてしまつ。この姿・・・最高幹部に見せれば認められるものを」

「そうだね。僕みたいに記憶が残つてくれればいいんだけど・・・」

「・・・カラスよ、あとどれほどの杯を交わせば・・・妖怪じもこ認められたことになる?」

「えー?」

帰りの驥車でリクオがそう言い出した。俺は驥車の上で酒を口こしながらその会話を聞いた。

「俺は三代目を継ぐぜ」

はあ〜〜その言葉人間の時でも覚えてくれればいいのに・・・まあ、それもおもしろいつか!

第六話 錦織屋との出合（前編）

更新です。
では、どうぞ。

第六話 錦陽館との出合い

「おはよー」「やあこます、若おーーー」
朝からひるむわいにけじょひがない。4年ぶりにリクオが妖怪の姿になつたからだ。

「こ、これは・・・？」
朝から大広間には豪華な料理が並んでいてカラス天狗がぶつぶつと昨日の事を言つていた。

「若が再び三代田を田指す宣言をなされたとかーー！」
「そそーーでは宴を始めましょつかのーー」

そりて僕妖怪たちも騒ぎ出した。

「良かつたね兄さん。皆から祝つてもうえてうれしいね」

「良くないよーーボクは昨日の記憶なんてないんだからーー」と逃げながら学校に向かうリクオを俺は追いかけた。

「カナちゃんーおはよう

「おはよー」「やあこますー。」

「リクオ君、リュウガ君。おはよー」

なんかリクオいきなり明るくなつたなあ。もしかして・・・カナに恋!?

・・・いや、リクオは恋愛!とに対する想いがないか。廊下を歩いていると清継たちに絡まれる。

そういう旧校舎に行つたとき以来だなあ。

「君たち・・・見たよねー見たよねー！」

「な、何が？」

リクオが恐る恐る聞く。

「だからーあのときだよ。確かにいたんだよ・・・あの旧校舎にて・・・・僕たちが求めた妖怪が！！」

そのことか・・・氣絶していたのによく覚えていたな？

「いや、氣のせいじゃない、清継？」

リクオが誤魔化そうに話した。

「フフフ、不良と見まちえたんじやないかしら？たむろしてた不良が驚かしてきてたじやない！？」

「おお、君は確か・・・そつそつだったかなあ・・・

よくやつた氷麗！俺はウインクをして合図を送った。

「やあ、氷麗。おはよひ。もしかして氣絶でもしてたんじやないかな？きつとやうだよ」

ほんとに氣絶していたことだけど・・・

「そ、そんな・・・してなこせーーー氣絶なんてーーー覚えてるよーーー不良ね、不良」

「そーよー！そく簡単に学校に妖怪なんて出ないわよー！」

いや、いるんだけどね。俺たちが・・・その後清継は自分の教室へと走つていった。

「あ、若！リュウガ様！はい、母様のお手製弁当！！」

氷麗が俺とリクオに弁当を渡すと同時にリクオが俺たちを隅の壁の陰に連れていった。

「なにするんですか？」

「な、なんで学校ににきてんだよ！？ボクは学校では平和に暮らしたいんだよ！バレたら大変なの」

「普通にしてたらばれないから大丈夫だよ、兄さん」

「むう～～。じゃあせめて『若』はやめてくれ～！！」

「京都からきました。花開院ゅうと言こます。じゅうよしなこ・・・

「京都のしゃべり方で自己紹介してきたのは清継たちのクラスに来た転校生だった。

・・・なんだ？・・・花開院つてどこかで聞いたことあるよつな・・・
・今は花開院、リクオ、力ナ、俺 氷麗、島の5人で清継の家の資料室に来ている。

理由は、俺たちに『呪いの人形と口記』を見せて妖怪は実在するという自論を証明するからだ。

「この・・・日本人形なんだけどね・・一緒に持ち主の日記も残つているから信憑性は高いと思つ

「日記？」

「読んでみよう。2月22日・・引っ越しまであと7日。昨日、これを機に祖母からもらった日本人形を捨てることにした。と言つても機会をうかがっていたが本当は怖くてなかなか捨てられなかつただけで、雨が降つていたが思いきつて捨てた・・・」
と、ここで俺とリクオが人形のほうを見てみる。

・・・たら・・・

人形の目から血のような黒いものがリクオがいきなり人形に飛び込んでそれを拭いてバレなかつた。

「やつぱりこれ、本物かも・・しれないね、兄さん」
そしてまた清継が喋りだす。

「2月24日・・彼氏に言つて遠くの山に捨ててきてもらつた。その日の夜・・彼氏から電話「助けてくれ・・・気付いたらうしろの座席にこいつがのつていた。／＼／＼考えてみれば昔から見れば変だつた・・この人形・・気づけば髪が伸びているようにも見えた・・・」
もしかして・・・違つていると思いながら人形を見てみると・・・」

「あ・・・若・・・リュウガ様・・・これ・・・」

「ああ・・・確かに・・・これはヤバイね
人形の髪が不自然なまでに伸びていた。

「凍らせてしまします！！」

「い、いや！・僕が切り刻む！！」

「だ、ダメだよ！みんなの前で・・・！」

確かにまずい。俺も氷麗も姿が変わるし俺なんか髪は紫色、目は青色に代わり身長も大幅にのびてしまう。

「2月28日引っ越し前日。おかしい……しまっておいた箱が開いている……」

「日記を読むのやめて……！」

人形が動き出した！ やつぱり俺が……
その時、なにかの紙が人形に飛ぶ！ そして紙が人形につくと一瞬で破裂した！！

「浮世絵町……やつぱりおった」

花開院が喋りだす。今の技、もしかしてこいつ……

「おんみょうじ陰陽師の名において。妖怪よ。あなたをこの世から……滅死ます！！」

・・・陰陽師、陰陽師だと！ ？じゃあ……こいつが……父上と母上を滅した奴！ ？

第六話 錦陽殿との出合（後編）

感想お願いします。

第七話 初の出入り（前書き）

GW中はよく書くことができました。

第七話 初の出入り

「お、陰陽師だって！？け、花開院さん！？今・・・たしかにあなた
そう言つたんだね！？」

「うわっ、やつぱり妖怪なんだあ・・・」

「ほ、本当はだつたんだ！！！、いたんだ！！陰陽師といひことね。
・妖怪も・・・！」

本当の妖怪にカナと島はかなり驚き、清継はかなり興奮してうれし
がっていた。

「ね、雪女・・・陰陽師つて何？」

「若・・・逃げましよう。一刻も早く・・・」

氷麗はものすごく怖がっている。リクオが必死に慰めていた。

「リュウガ？」

「（あいつが俺の親を殺した奴なのか？）」

「リュウガ。ね、どうしたの？」

目の前にいる陰陽師の事を考えてリクオの声が聞こえなかつた。そ
れをリクオは心配そうに話しかけた。

「あ・・・いや。何でもないよ。それより氷麗は僕にまかせて話
を聞いてきなよ。兄さん・・・陰陽師のこと知らないからさ
「さり

「うん。分かった」

リクオが会話に加わり、俺は氷麗を落ち着かせる事にした。
抱きついてきたから静かに頭を撫でて落ち着かせた。

「ゆうりくんーぜひぜひ僕の清十字怪奇探偵団に参加してくれーー！僕
もある妖怪を探しているんだ」

「ある妖怪？」

「そうー！2人いるんだが、そのお一方は・・・月夜を駆け巡る闇の
支配者と紫髪を持ち眼光が青色の黒い妖怪ーー！」

「それはもしかして百鬼夜行を率いるものとの下僕・・・」

「一緒に探そうーー妖怪の主を見つけ出そうじゃないかーー！」

「さればマズイことになつたな・
・

「清十字怪奇探偵団、ここに始動だーー！とこいつことで田羅口ーー。
そうだな、奴良君たちの家は広くて趣があるーとこいつことで吾たち
の家に集合だーー！」

「「H、HHH—————」」

まさに予想的中した瞬間だった。

そして帰り道・・・

「若ーーーじつするんですかーー？なんであんな約束をしちゃつた
んですか！？」

「だつて・・頼まれたら断るわけにはいかないだろ。人として逆に怪しまれるかもしれないし！」

「私消されちゃいますよーー！封印されちゃいますよーー！」

「大丈夫だよ・・多分、花開院さんに会えばみんなおとなしくなるだろしーーこの先もーー！」

リクオと氷麗が言い争つてゐる間、俺はあることをかんがえていた。

「兄さん・・悪いけど口曜日のことはお願いしてもいい？」

「え、そんな！ボク1人に面倒を押し付けるつもりなの！？」

「『』めん。だけど本当にお願ひーー！」

「・・・分かった。そこまで言つならこいよ」

ガガガガオオオオ

話終わつた後、向こうからバイクの集団がやつてくる。暴走族だな、旗に『血畏夢百鬼夜行』と書いてある。

そして総長と呼ばれる大男がこつちに近づいてきた。

「あ、若、リュウガ様。おつとめ『』くわーさんです。人間に頼まれて少し出入りしてきました」

「なにやつてんだよーー！ーーわざと歸るよーー！」

リクオに言われて帰りを急いだ。

だが、家に帰つてくるとだんだん騒がしくなつてきた。

「おや、どうやら本家の方から聞こえてきますなあ」

まさかと思つたが本家から酔つたカラス天狗が飛んできた。

「若ーおかれりなさいませー皆の者ー若がお帰りになつたぞ。酒を
もつと用意しろーーー！」

カラスにも困つたもんだ。リクオがキレる前に氷麗と青を連れて立
ち去つた。

「・・・・・日曜日は学校の友達が来るんだーーー！」

そして日曜日・・・・平日より少し遅く起きて朝食済ませて、出かけ
る準備をした。

「リュウガ、どこが行くのか？」

準備が終わり玄関で出発しようとしたときぬりひょんと出会いつた。

「父上と母上が死んだ山に行つてくる

「じゅが今日はお前さんの学校のお友だちが来るんじゅなかつたの
か？」

「さうだけど、陰陽師の子も来るから僕には無理だよ。もしも何か
あつたら・・・」

「そうか。分かつた行つて来いーー！」

「ありがとう。それじゃ行つてきまーーす

そして俺は例の山に行つた。

電車に乗つて降りて、少し山の中を歩いて自分が倒れていた所を見

つけた。さりに進んだ所になにかの爆発跡があつた。

「ヒヒで父上と母上は戦ったのか・・・俺を守つて」

複雑な思いのまま俺はバックから道具を出して両親の墓を造つた。あまりいいものじゃないけど、名前の彫つて墓石を建てた。夕方にもなつたし、俺は手を合わせながら立ち去つた。

山を下りて行く途中で血の匂いがひどくするホスト風の男達に囲まれた。

「あの～～何か用ですか？」

「アンタ、三代目と一緒に居る奴だろ？ 旧鼠様がアンタを捕まえろつてさ」

「旧鼠・・・なるほどネズミか、道理で血の匂いが濃い訳だ。それにしても派手なね」

周りの人数を確認するように首を左右に振つた。

(・・・8匹)、それほど力も感じないことは、雑魚か・・・

「アンタを捕まえれば俺達は旧鼠組の幹部だぜーおつと、俺らに手を加えてみる。こっちには人質が居るんだぜー。三代目の知り合いの女がな。俺たちが帰つて報告すればそいつらの命はないぜ」

「そうか・・・ならば!?

『(オイオイ、イイ加減俺二毛暴レサセロヨ)』

突然頭に声が聞こえた途端に妖怪化した。だがそれは人型ではなく巨大な黒い獣だった。

『フフフ、イイネ～～。最高ナ氣分ダゼ（ニヤッ）』

「なあ！？ちよつ、ちよつと待つてくれ。おれらはただ・・・」
リーダー格の奴が騒ぎ出したが、片腕の爪が黒く長く伸びて飛びか
かつた。直後に旧鼠妖怪達8匹全ての首や体がどびちつた。俺は飛
び散る血や口についた血をなめた。

『サテ、早ク行カナイト終ワツテシマウゼ。ネズミ狩リ』
そう言つて俺はものすごい速さで奴らの本境地に向かつた。

第七話 初の出入り（後書き）

ぬらりひょんの孫1~6巻発売中で～～す。

第八話 旧鼠組対百鬼夜行（前書き）

やつと戦いの場面です。じつわ。読んでください。

第八話 旧鼠組対百鬼夜行

「さて……そろそろ時間だな。ま、来ないなら来ないで俺はかまわんがな……」

旧鼠組の頭領・旧鼠は腕に巻いている時計を見ながらそう言った。そしてゆらたちの方へやつてきた。

「知ってるか？人間の血はなあ、夜明け前の血が一番ドロッとしてうめえのよ。ちょうど、今くらいのなあ……？」

旧鼠の言葉と同時にカゴの中へ取り巻きのネズミ達もが入つて来る。

「ひつ……」

「いやつ……」

ゆらとカナは必死でそいつらから距離をとる。

「（）これが妖怪……なんて、非道なやつ（）」

「くく……オレこいつが好みだな~」

ホストの姿をしたネズミたちの下品な笑いが響く。

「（倒さないと……私は陰陽師なんやから……）」

だがその様子を見て、旧鼠は冷ややかな笑みをした。それがゆらの心を揺らがした。

「（武神さえあれば……こんな奴ら）」

追い詰められたゆらの目に涙がにじんだ。

「いやああああああ……（誰か、誰か……助けてえええーーー）」

モア・・・

突然、空氣に濃密な妖氣が混じり、霞みが一番街を覆つた。

「ん・・・」

「なんだ？ありや・・・」

その異変に気付いた田鼠と配下の妖怪たちは動きを止める。霞みを切り裂き、現れたのは・・・ 妖怪の群れ——百鬼夜行。

リクオ side

「へへへ・・・久しぶりの出入りじゃあー」

「あばれるぞー」

下僕妖怪どもが騒いでいる中、俺は牢屋の方を見た。カナちゃんといやらは無事みたいだな。

それにしてリュウガの奴・・・どこに行つたんだ？

「星矢さん……」、これは！？

「星矢様——！――」

「化猫組の奴らがいますぜ！――」

圧倒的威圧感に動くことができなかつたネズミ共が慌てて動き出し始めた。

「化猫組よ・・・あいつらか？」

首無が良太猫に尋ねた。

「ああ・・・憎い・・・ねずみどもだ」

良太猫が殺氣混じった声で答えた。俺は旧鼠に話しかけた。

「またせたな・・・ねずみども・・・」

「何者だあ！？テメー！」

「本家の奴らだな・・・」

「三代目はどーした！？」

俺の言葉に反応してネズミ達が騒ぎ出した。

「いや、あんなガキはどーでもいい。回状はー?ちゃんと廻したんだろうな？」

「奴が書いた物ならじじいがやぶつちまつたよ」

旧鼠の言葉を迷いもなくあっさり切り捨てた。その隙に青と首無が助けに行かせた。

「んだとーー！？・・・ならば約束通り殺すまでよ！」

旧鼠が牢屋を叩きながら言った時、裏口から手下のネズミが傷ついた腕を抑えながらやつて来た。

「旧鼠様、で、でかい・・・化け物が！！」

その瞬間に牢屋の後ろから巨大な妖怪が出てきた。なんだ・・・あいつ？

リュウガ side

まさかリクオがいるとは思わなかつた。表からじやヤバイと思つたのによ・・・

そのまま力ナたちがいる牢屋の屋根の部分を噛み壊して一人を助けようとした。

「ぐ、来るな妖怪！！」

やはり怖いか。無理やり捕まえるとするか・・・

『後ハ頼ムゾ』

二人を青と首無に渡すと安全な場所に連れていった。

「どうする、夜の帝王。人質が逃げちまつたぜ」

「くそ。なめやがつて、てめえら皆殺しだあーー！」

旧鼠組と百鬼夜行がぶつかる。しばらくして大きなドアから巨大ネズミが出てきやがった。

俺と同じ大きさの妖怪・火鼠だった。

『・・・・ココジャヤヤリニクイダロウ？ツイテキナ！』

俺は壁を壊して外に出た。火鼠も後の続いてある程度まで走つたら、体を丸くして火の玉のようになつて襲いかかつて來た。素早くかわしたが・・・

ガブッ

火鼠は反転してそのまま首元に噛みついた。けっこ痛いな・・・

『中々ヤルナ・・・ダガ！-』

無理やり引き離して火鼠の首元を噛みついた。

「ギッシュヤー——」

何とか引き離そつと火鼠は体を動かしたが、そんなんじゃ俺の牙からは逃れない。

鈍い音がした後、火鼠は崩れ落ちた。リクオの様子はどうかなと窓から見てみる。

「ぐ・・やつぱり・・・あんとき殺しどきやよかつたじやねーか！」

いきなり大声が聞こえ、巨大な鼠に変身した旧鼠、リクオの相手じゃないけどな・・・

「奥義 明鏡止水 桜」

酒を利用した奴良家秘伝の技で、盃に波紋が広がる間敵を焼き尽くす。旧鼠の体は燃えだした。

「夜明けとともに塵となれ」

「ぐう～古臭い代紋に縛られた奴良組は長くは続かねえ。俺は、もつと自由に生きるんだ～～～！」

完全に燃え尽きたのを確認して俺はリクオ達よりも早く家に帰った。

『面白カツタゼ 後ハコイツニ任セルカ』

家の前で元の入型の姿に戻る。

「痛つて～～首元から血出てるし」

あの獸も俺なんだよな。リクオにはバレないようこじないといけないな。

「おお、リュウガ！帰つたか」

「叔父上・・・」

いきなり会いたくない人に会つてしまつた（泣）

「うん？その首どうした・・・」

「あついや、なんでもありません！お休みなさい」
すぐにその場を離れ、血を落として、布団に入つた。

第八話 旧鼠組対百鬼夜行（後書き）

旧鼠の最後のセリフ・・・
アニメのセリフがけっこ氣に入つてたんで書きました。

第九話 妖怪合宿（前書き）

少し短い文になつてしましました。

第九話 妖怪合宿

「う、うらやましい……」
旧鼠事件の翌日の放課後、カナとゆらの話を聞いて清継が羨ましがつている。

「うらやましくないよ……スッゴク怖かつたんだから……」
まあそれが一般人の反応だな。
だがなぜ学校に来るんだろう？

「しかし、君らがピンチだからこそ彼等は現れた！！それでこそボクの憧れるお一方だ！！夜の帝王だ。こーなつたら早急にボクらも何か考えなければ……とりあえずボクも妖怪に捕まりたい」

「（若つたらすごい人気ですね。それよりリュウガ様！昨日は何処に行つっていたのですか！？）」

「（だから～～旧鼠の部下と戦つていたと言つてるだひつ）」

「（それに、その首の火傷は何ですか！？）」

俺と氷麗はこそと話しあつた。まだ清継が話をしているがあることに気付いた。

「なんか、人が……足りなくないか？」

「そういえば奴良君はどうしたの？」

花開院たちはクラスが違うから事情知らないのか

「兄さんなら熱出して休みなんだけど」

「え！？」「

一番驚いたのは氷麗だった。どうやら知つてないみたいだな。
とても動搖しながら俺に話しかけた。

「早く・・・帰りましょう！リュウガ様・・・」

「うん、分かつたから落ち着こう」

俺たちはすばやく帰宅した。家につくと氷麗はものすごい速さでリクオの所へ行つた。

着替えを終えてからリクオが寝ている部屋に向かつていた。

「ただいま大丈夫兄さん・・・って何その氷、でかすぎーーー！」

「氷麗がのせてつたんだよ～」

なぜこんなにも大きいんだ？疑問に思つてゐる中、氷麗がやつて來た。

「若、薬をお待たせしました」

氷麗が薬入りのお茶を持ってきた。

「ありがとう。そいいえばリュウガに氷麗はいつまでその姿でいるの？」

そう、俺は人間の姿でいるがいつもはすぐに妖怪の姿になる。

リクオが理由を聞いた時は、あまりにも人間の姿が不便だからと話した。氷麗も家に帰つたらすぐに本当の姿に戻るのだ。今日はリクオが熱をだして寝ていると俺に聞いて急いでたので忘れていたのだろづ。

「あ、そうですね。今、戻りますね」

「いや、ちょっと待って、つらい

今、妖怪に戻るのはマズイ。この匂いはまさか・・・

「どうしたんですか？リュウガ様」

「あれ、なんで及川さんが？」

「お見舞いに来てやつたぞ。ありがたく思え！マイファミリー」

俺は溜息をしながら外の方を見た。下僕妖怪たちが騒いでいる。

「なんじゃこいつら…また来とるぞ…」

「やばい

「まで、あの陰陽師はいないぞ？」

リクオがなぜやらがいか聞いてみた。どうやら制服を買いに行つたらしい。

「さあて…看病はさておき…GWの予定を発表する…ボクが以前からコントクトをとっていた妖怪博士に会いに行く…」

「え…?な、何それ…?合宿…?」

まじか…本当に自分勝手な奴だ…

「場所はボクの別荘もある捩眼山…今も妖怪伝説が数多く残る彼の地で…妖怪修行だ…！」

捩眼山…たしか牛鬼がいるところだよなあ。あいつは最近あやしいがたぶん問題ないな…

第十話 捜査官での妖怪ツアー（前書き）

中間テストがもうすぐあるので、更新が遅くなります。
すみません。

第十話 捺眼山での妖怪ツアー

今俺たちは、滋賀県の捺眼山いる。そしてここの牛鬼組の繩張りもある所だ。

「ぐえ～～気持ち悪い。吐こちやこそつ」

「ねえリクウガ。驕車じゃ大丈夫なのに、なんでバスや電車じゃ乗り物酔いしちゃうの？」

清継たちが騒いでいる中、リクオがバスと電車で酔った俺に話しかけてきた。

「だつて兄さん。驕車は妖怪でバスや電車とは違うから・・・」

「まつたく、しょうがないな。ほら、肩に手を載せて」

「やあひとついた。清継くん～～別荘は～～温泉は～～？」

「そんなの夜だ！～～さあいくよ～～！」

俺はリクオの肩を借りながら清継たちとともに捺眼山を登つて行つた。温泉を楽しみに・・・

歩くこと一時間たつた。いまだ田的発見できずにいた。

清継の言つには、妖怪先生の宿題で梅若丸の祠を探さなくてはならないらしい。

だが、まだ見つからないのでみんな文句を出すよくなつた。

「うん？なんやろ・・・あれ・・・」

「小ちなほ」「いらに」、お地蔵様が奉つてありますね」

「つ～ん読めないぞ？」

「『梅若丸』って書いてあるよーー！」

リクオが石に書いてある文字を読んだので、みんなで文字を確認してみた。

「梅若丸のほ」「ら・・・めつ」と「じ」だーーやつたぞゆらくんーーすぐだなーー！」

「以外と早く見つけたな。さすが清十字怪奇探偵団ーー！」
後ろから声がしたので振り向いてみると変な人がいた。なんだ？人型の妖怪か・・・？」

「ああーーあなたはーー作家にして妖怪研究家の化原先生ーーーお会いできて光榮ですーーー！」

「うんうん」

あれがねえ、実のところ妖怪に見えた。本当に・・・

「これは・・・梅若丸って何ですか？」
ゆらが祠を見ながら質問する。

「うむ・・・そいつは・・・この山の妖怪伝説の・・・主人公だよ。梅若丸・・・千年前にこの山に迷い込んだやん」となき家の少年の名・・・生き別れた母を探しに東へと旅をする途中、この山に住ま

う妖怪に
襲われた

「まつ・・・妖怪に・・・・・」
それが昔の牛鬼の名前なんだろうな。昔、父上に聞いたことがある
よつの気がする。

「この地にあつた一本杉の前で命をおとす。だが母を救えぬ無念の
心がこの山の靈障にあてられたか・・哀しい存在へと姿を変えた。
梅若丸は・鬼・となりこの山に迷い込む者どもを襲うよつになつた
みんな意外に妖怪先生の話を真剣に聞いていた。

「その梅若丸の暴走を食い止めるためにこの山にはいくつもの供養
碑がある。そのうちの一つがこの『梅若丸のぼり』だ。どうかね
?すばらしいだらー?妖怪になつちゃうんだよー」

「よくある・・・妖怪伝説っぽいですね・・・?」

「意外にありがちな昔話じやんか」

やつぱり信じないか・・・ベタな話と思つからな。

「あれ?信じてない?んじゃーもう少し見て廻るうか~」

化原先生の声でみんなまた森を進んで行く。看板があつたけどな・・

「うふふ・・・リュウガ様、リクオ様~行く前は心配でしたけど旅
行って樂しく~ですね~。梅若丸なんて妖怪知つてます~?」
氷麗が俺たちに話しかけてきた。氷麗は梅若丸のことを知らないみ
たいだ。

「梅若丸つていづのは牛鬼のことだよ氷麗。昔父上に聞いたことがあるから」

「うひうひ。リュウガ。ここ……少し危ないかも知れない」

「やうだね兄さん」

「……え？若？リュウガ様？」

氷麗と話しているとみんなより遅れたので少し早歩きで進む。しばらくすると霧が深くなってきた。

「すつごい霧深いなあ……全然晴れてたのに……」
さらに霧が深くなるにつれて、周りの木も太く大きい木が増えている気もある。

「ん？なんだこれ……」

大木の切れ端のようなものに縄を巻いて奉っている物に巻が気がついた。

「それは爪だよ。」こは妖怪の住まう山だ。もげた爪くらいでおどろいたちやーこまる」

この人間……何者だ？、どうまで本当の事知ってるんだ。

「山にまよいこんだ……旅人をおそつ妖怪……名を牛鬼といづ

捩眼山頂上 牛鬼組屋敷にて、1人の男が屋敷に帰ってきた。

「おかえりなさいませ」

それを青年らしき男が迎えに現れた。

「かわりないか牛頭丸」

「牛鬼様、山に獲物が入りました、よ」

深夜の時、牛鬼が奥の部屋で2人の部下を呼んだ。

さつきの男と頭に骸骨を被つた少年みたいな男である。

「情報により、奴良リクオと奴良リュウガ、その学友。おそらく側近も来るでしょう」

「そうか・・・今日それらをこの山に入れ、全てを決する」

「牛鬼様！？そんな・・・危険です！！」

「殺るということは奴良リュウガもですか？」

「そうだ・・・長い間・・・考えて出した・・・『結論』が・・・」

「

「わかりました。行くぞ馬頭丸。必ず奴良兄弟の首を取るぞ！」

牛鬼の考えを理解した牛頭丸は先ほどの少年のような妖怪、馬頭丸を連れて部屋を出ていき、廊下を歩きながら笑った。

「さあて、狩りの時間の始まりだ・・・」

「ダメだ、通じないわ・・・ぢつよひ。牛鬼組は奴良組の中でもうとうな武闘派」

氷麗がさつき言つてたことをまだ心配しているようだ。俺はこいつそ

り近づいた。

「氷麗。牛鬼とはいえない可能性がある。何がなんでも兄さんを守れいいな？」

「はい。分かりましたリュウガ様！側近として絶対に守ってみせます」

氷麗に命令を出した後、俺は少し考えだした。あの何事も慎重な牛鬼だけ、旧鼠事件のあとにそんなことを起こしたら大変なことになるのは分かっているはず。

巻と鳥居は爪らしきものを見てから怖がってしまった。だが、清継は逆にワクワクしていた。

「ふふ！！何をビビッているんだ君たち！？ボクの別荘があるじゃないか！！この山の妖怪研究の最前線！！セキュリティもバツグンだ！！」

セキュリティって言つても、そんなもの妖怪には通じないと想つんだが・・・

「セキュリティ？妖怪に？効くかな？」

「効かないと思つけど。大丈夫？」

「そうよ、奴良の言つ通りよ」

「使用者がときどき来てるがなにか出たなんて話しこ一回もないぞ！？襲われたとしてもこいつには・・・少女陰陽師、花開院やらくんがいるわけだ！！」

武闘派の牛鬼組が無駄に姿を見せることはないだろう。

チツ、なぜ陰陽師と一緒に泊まるんだ。

「あ、先生も一緒に・・・」

化原先生が山を下り始めたので、清継が誘ひつとした。

「いや、ワシはもつ山を下つるよ。じゃまじやへい」

「そ、そですか・・・? 話をもつと聞きたかったの?」

「いやいや……ワシの役目は終わりだよ。それだ・・・夜は危ないから絶対に出ない方がいい」

ん・・・なんだ・・・俺は妖氣を感じた方へ見つめたがすぐに消えた。やはりやばいかも・・・

「はつはつはつー!父親の山好きがこじて建てた別荘でね。この山の妖怪研究用に建て替えさせたものだ」

思つた通りかなり豪華な別荘だ・・・女子たちはみんな温泉に向かつていた。

「今のうちだ! ではさつそく『夜の妖怪探索』に行こうじゃないか! 邪魔者はいなくなつたしね! !」

「い・・・今からですか~?」

「バカ! ! 目的を忘れすぎだぞ、島くん! ! 我々の目的は! ! 妖怪に捕まることだつたじゃないか! は! ? そつだつたのか? 島は初耳みたいだが・・・

「ちよつと待つてよ! ! 行かないほうがいいよ! ! 君たち妖怪を甘

く見てるよーホントに・・・人を襲う奴らもいるんだよ」「だけど清継は逆にリクオに何をいつていてる詰め寄り、話を聞かなかつた。

「（兄さん、行かせてもいいじゃないか。）」

「（何言つているんだよー本当に妖怪が襲つてきたら・・・）」

「（大丈夫だよ。間違つたとしても僕たちが着いていけばすぐ退いてくれるよ。）」

「（・・・・・うん、分かった。僕らもついていこう）」

リクオには悪いが、本当に襲われてほしいと思っている。先程は危ないとつたが、もし襲われたらリクオが覚醒する可能性があるからだ。早くリクオには三代目になつてほしいからな・・・

「どうしても行くなら僕たちも付いて行くよ」

「ちよっとお待ちをーーだつたら私も行きますーー」

「うん？ 氷麗も来てたのか・・・」これはこれで、丁度いいな。

「（若とリュウガ様を危ない目にあわせられません。）」

リュウガが思つた事件はこの後、現実になつて起きるようになる。

第十話 捜査山での妖怪ツアー（後書き）

次はいよいよ奴良兄弟 vs 牛鬼です。
戦闘シーンもあるので、お楽しみに。

第十一話 奴良リュウガ対牛頭丸

俺たちは清継を先頭に夜の妖怪探索をしていた。

「見ろ！…あれを！…絶壁の妖怪スポットだ。『牛隱れの洞窟』！…かつてこの山で妖怪におそわれた法師が逃げこんで百日間す”じたという洞窟…・・・よし、島くん！おりよう」

「無理ですよ！…」

俺とリクオ、清継、島の4人は洞窟のある崖の上に立っている。氷麗は周りに何かいないか見張っているようだ。

ガサツ

その時突然、草むらからなにかが飛び出してきた。

「ハツ、リクオ様あぶなーい！」

それに氷麗が反応し、リクオを突き飛ばす。出てきたのはただの狸だつた…・・・

その後も氷麗の行動を見て俺は少し苦笑した。だが、リクオにどうては迷惑だったみたいだ。

「おや、別れ道だ。島くん・・・どっちに行つたら会えるかな〜？
妖怪に」

「左だと、思います・・・・・・」

「そうか、ボクは・・右・・・だなあ・・・・じゃあ、一手に別れるか・

・・・

うん？なんか・・・一人の様子がおかしいな？リクオも同じみたいで動搖した。

「何か変だぞ？つらら！島くん追つて！！リュウガは僕と・・・」
氷麗はためらいをしたが、俺は素直にリクオの命令に従い一緒に歩いて行つた。そして清継にある程度まで近づいた俺は、近くにあった木の棒でおもいつきり叩いた。

「悪いね。手加減なしだ！」

リクオは手で顔を隠した。目を開けた時は清継は倒れていて、二人で協力して近くの祠においた。

その時、俺はある妖気を感じた。

血の匂いもしてリクオに知らせようと振り向いたが、もういなかつた。

リクオSide

「何してやがるお前・・・この女は奴良組若頭の、ボクの下僕だぞ・・・わかつてやつてんなら『オレ』はお前を斬る！」

今来た道から妖気が押し寄せてきたので急いで戻つてみると牛鬼組の妖怪が氷麗を襲つていた。

リュウガSide

「リクオ様、リュウガ様。下がつて・・・ください。私が、やらなきゃ・・・」

氷麗は必死に戦おうとしたが、痛みで倒れてしまった。

「ハハハ・・・ざまあねえな。そんな弱つちい娘に守つてもらわなきやーならない妖怪の総大将なんてよ、そんな奴、不必要だと・・・思わんか？」

牛頭丸の言葉に反応して俺はだんだん妖怪化して、リクオに話しかけた。

「こゝは俺に任せなリクオ」

「ふざけんなツ！オレの下僕にてえ出したんだ。あいつは・・・オレが片付ける！…！」

「リクオ、今回の黒幕は牛鬼だ。三代目として牛鬼の所に行きなよ。そしてケリをつけるんだ！」

日が落ちて、リクオの姿も髪も変わり、夜のリクオに変わつていつた。

「チツ、それじゃ任せた。だがリュウガ、つららを守れよ。お前は・・・オレの後ろを歩く奴だからな」

そう言つてリクオは歩き出した。牛頭丸は俺に阻まれて動けない。

リクオが言つた言葉に感謝しながら俺は牛頭丸に話しかけた。

「昔、父上が牛鬼はいつでも奴良組を愛しているつて言つてたけどなあ」

「違う！牛鬼様は今でも奴良組を誰よりも愛している！！だが奴良リクオせいで！！あんな奴に奴良組の・・俺たちの大将は任せられるわけないだろうが！！」

牛頭丸が刀を振るつて突っ込んできた。

「リュウガ様！！！」

氷麗が叫ぶ。俺は大鎌を盾にし、牛頭丸を押し返して・奥義 殺戮風の舞・を放つた。

だが牛頭丸は俺の技をうまくかわしまくった。

「そんなの効くかー！！牛頭陰魔爪！！」

牛頭丸の技により体が動かず、刀が腕に突き刺さった。

「牛鬼組は人をあやつり惑わしひきよせ殺す『？』の代紋。お前ごときにこれが破れるか？」

牛頭丸の背中から二一本の巨大な爪が現れ、襲いかかってくる。体中や服がズタズタにされた。氷麗が悲鳴をあげてるな・・・俺は安心させるようにゆっくり立ち上がった。

「チツ、やるじゃないか・・・」

『（オイ、俺ガヤルカラ早ク変ワレ）』

声がすると俺は旧鼠の時と同じ獣姿に変わった。その姿を見た氷麗と牛頭丸は恐怖で畏れてしまった。

「なつ！？ヒツ！？」

「えつ！？リュ、リュウガ様・・・？」

『受ケテミナ！爆風竜激破！』
ばくふりゅうげきぱ

獣になつた俺の口から強力な竜巻を吹いた。この技は相手が複数でも一人の時でも威力は強い技だ。

牛頭丸はそれをもろにくらい、一瞬で気絶した。そのまま氷麗の元に駆け寄つた。

氷麗が傷を負つたところを・奥義 愈し風の舞・で治した。

『コレデイイナ。大丈夫力、ツララ？』

返事がこないから見ると氷麗はまだ震えていた。そんなにも俺様が怖いのか？

仕方がないから、後は人型に任せて姿を戻した。

「あ、ありがとうございます。リュウガ様。あの、今の姿は・・・」

「もう一人の俺だよ。あの姿が影犬の姿さ」

氷麗にそう言つた時、森の木々を押し倒して巨大な妖怪共がやつて來た。

「あれも牛鬼組のやつか・・・」

巨大な妖怪たちは俺たちに向かつて襲いかかつて來た。

ドガアアアアアアア！――――！

74

来ると思つた瞬間、巨大な妖怪たちが倒れる。

それをやつたのは俺たちもよく知つてゐる妖怪だ。

「リュウガ様！――ご無事ですか！」

奴良組のお目付け役、カラス天狗の子供である黒羽丸、トサカ丸、ささ美の三羽鴉だった。

ささ美の手には牛鬼組の妖怪・馬頭丸が縄で縛られていた。

「お前ら、なんでここに來たんだ？」

「旧鼠の件の黒幕が牛鬼と分かり、捩眼山に行かれたリクオ様とリュウガ様を追つてきたのです。それでリクオ様はどちらに？」「三羽鴉の長男の黒羽丸が答えてくれた。

「リクオは三代目としてケリをつけるために牛鬼のもとに向かつた」

「そんな……危ないですぜえ」

「安心しな。俺もこれから向かつ。ささ美は氷麗を別荘まで連れて行つてくれ、つらり、気持ちは分かるがその怪我じゃ無理だろう……・ゆつくり休みな。黒羽丸とトサカ丸は俺と一緒に牛鬼の館に行くぞ！」

「リュウガ様……分かりました」

俺は行こうとしたがあることを思い出し、氷麗の耳元に呟いた。

「（つらり・・・やつきの姿は・・・まだ誰にも言わないでくれよ）

氷麗は再び震えだし、コクリと頷いた。

「それじゃ、行くか？」

「「「はっーーー」」

俺は黒羽丸とトサカ丸を連れて、山頂にある牛鬼の館に向かつた。

第十一話 奴良リュウガ対牛頭丸（後書き）

次で牛鬼編終了です。 獣については後ほどで・・・・・

第十一話 リュウガの決意（前書き）

久しぶりです。やっとテストが終わりました。
これからも書き続けたいです。

第十一話 リュウガの決意

捩眼山の山頂にある牛鬼の館に俺たちがついた時には、既に決着がついていた。

胸を斬られ片膝をついているリクオと、その後ろで同じく胸を斬られて倒れている牛鬼がいた。

「リクオ様ああ！？」

「な、なんだああ―――？この状況は！？」

逆臣となつた牛鬼を捕えようとした黒羽丸とトサカ丸をリクオはとめた。

「リクオきけ。捩眼山は奴良組の最西端――から先奴良組地は一つもない。この地にいるからこそよくわかるぞリクオ。内からも、外からも・・・いずれこの組は壊れる。早急に立て直さねばならない。だから私は動いたのだ。私の愛した奴良組を・・・つぶす奴が許せんのだ」

牛鬼の奴・・・・そんなにも奴良組の事を愛してたのか・・・

「もはやこれ以上考える必要はなくなつた」

牛鬼が体を起こし刀を逆持ちして振り上げる。あいつ・・・まさか！？

「これが私の・・・結論だ！！」

自分の腹に向かつて刀を突き刺す。

しかしその刃はリクオによつて砕かれ柱に突き刺さつた。

「なぜ止める？リクオ」

無意識のうちに俺も近くにいた。

「私には謀反を企てた責任を負う義務があるので……なぜ死なせてくれぬ、牛頭や馬頭に会わす顔がないではないか……」

「おめーの気持ちは痛え程わかつたぜ。オレがふぬけだとオレを殺して自分も死に認めたら認めたでそれでも死を選ぶたあ……らしい心意氣だぜ牛鬼。だが死ぬこたあねえよ。こんなことで、なあ？」

「だけどリクオ、これは大事件なんだぞいいのか？」

「いいじでのこと、お前らが言わなきやすむ話だら、
まったく。夜のお前は無茶な事を言つぜ。黒羽丸とトサカ丸は口を
ポツカーンとあけている。

「牛鬼、さつきの答え。人間のことは・・人間ん時のオレにきけよ。
氣に入らなきやそんとき斬りやーい。そのあと・・・・勝手に果
てる」

もう俺の出る幕じやないな。倒れた牛鬼を連れてあとのことばの
リクオに任せせるか。

翌日

俺たちは本家に戻った。リクオたちの怪我の手当でもあつたし本当のケリをつけるために叔父上が幹部を急遽に召集して総会を開いた。この総会でリクオは牛鬼の件をおどがめなしとして、奴良組三代目

の候補に正式に立候補した。ちなみに俺は総会には出席しないよ。再び墓に行つてたからだ。

「父上、母上、俺はこれからもリクオを支え続けます、そして両親の墓をきれいにして帰つた。本家に帰るとみんなでリクオの祝会をしていた。

「あ！リュウガ様どこに行つてたんですか？さあ、リュウガ様も早く行きましょう」

氷麗に引っ張られて俺も宴会に参加した。しばらく経つたとれ・・・またアイツが騒ぎ出した。

『（酒力・・・・人型、俺一毛飲マセロ）』

「少し待て！」『ではまづい』

「うん？どうしたリュウガ」

「え！？いや、なんでもないよ。少し席をはずすから・・・」酒を隠し待ちながら部屋を出て、誰もいない所で姿を変えた。

『全ク・・・何故人型ハアンナ奴ノコトヲ主トオモツテルンダカ』

「きっと、助けられた恩があるからですよ」

突然氷麗に声をかけられたから少し驚いた。氷麗にはもう見られているけどな。

しばらく氷麗と雑談していたら、見たことのない三体の妖怪が俺の前に現れた。

氷麗が戦闘態勢になるが、三体は俺に近づき涙を流し始めた。

「おおー！リュウガ様」

「よべぞ」無事で！！」

「お会いしたかつたです！！」

なんだ」「こつら？取り合えず氷麗に片づけを頼んで、ここにこつらを部屋に連れて聞いてみた。

「お前ら、一体何者だ？」

ちなみに部屋では人型になつたよ。獣の姿じゃ大きすぎるので……質問すると赤く炎の車輪が回っている馬のよつた妖怪が答えた。

「はい。我らはあなた様の父上・影犬様より仕えていた妖怪炎獣・氷獣・雷獣の三馬獣でござります」

「三馬獣？」

「はい。影犬様が陰陽師によつて亡くなつた後、我らは各地を巡つて息子のリュウガ様を探してきました」

すると今度は水晶のような色し、赤いのと同じ氷の車輪が回つている氷獣が話しだした。その時になつて背筋が寒くなつた気がした。

「ある日、ある噂を聞いたのです。奴良組にリュウガ様があられる」と……

次に緑色で黄色の模様があり、雷の車輪が回つている雷獣が話しだした。

「そして俺ら、やつとリュウガ様に会つことができたのです

そして三体は再び泣きだした。このときは泣いている姿を見て苦笑した。

泣きやんだ後、炎獣が真剣な目で見つめてきた。

「リュウガ様。どうか我らを、あなた様の下僕にしてください。そして再び組を再興をしましょー！」

そう言われて俺は静かに拍子を開けて夜の月を眺めた。

今日は光なき新月か・・・・うん、決めた。

「ふう、いいぜ！俺は必ず影犬組を再興させる」

その言葉に感激した三馬歎は頭を下げて夜の闇の中、盃を交わした。

第十一話 リュウガの決意（後書き）

炎獸

影犬組の幹部妖怪。馬の姿をした妖怪で影犬の代から使っている妖怪。つねにリュウガの事を考えている。地獄の業火の畏を身にまとつていて炎を使った技で攻撃する。

武器 炎車輪

両肩についている車輪に自分の炎を纏わせて相手を焼き切り下ろす。

氷獸

影犬組の幹部妖怪。大人の女性的な雰囲気で力マイタチを尊敬していたので優しい性格。だけど、敵に対しては極寒で凍りつくような性格になる。戦いでは氷技で何でも凍らせる。

武器 氷車輪

雷獸

激しい雷を身にまとつていてる幹部妖怪。自分の雷のせいで周りに雷雲をだして迷惑をかけることもしばしば・・・
三馬獸の中で一番力が強い。

武器 雷車輪

次からはオリジナルの話になります。

注意して下さい。

第十二話 化猫屋での出来事

「はい。リュウガ様。お茶でござります。」

「ああ、悪いな。」

総会の後、リクオは三代目を継ぐことを本気で考えるようになった。ある日の夜に俺は、お茶を持ってきて立ち去ろうとした氷獣を呼び止めた。

「リュウガ様。何か御用でもありますか?」

「なあ、父上はともかく母上はどんな妖怪だったんだ?」
父上については俺もよくわかるが、母上についてあまり記憶がないからだ。氷獣は少し黙つて・・・

「リュウガ様の母上カマイタチ様は、とても優しく、力強いお方でした。どんな時でもみんなのことを思っていました。その優しさは敵の妖怪にも同じ思いでした。そして影犬様の側をずっといて、いつも仲の良い関係でした。私から見たらまるで、殺戮ばかりしていた影犬様を癒す懐かしき風のように・・・」

「そつか・・・ありがとうな話してくれて。」

「いえ。これくらいなんともございません。それでは失礼します。」
氷獣が去つてから俺は部屋に戻り親の事を思いながら眠つた。

翌日の朝

「うーん・・・」

「どうしたのリュウガ？ 難しい顔して悩みもあるの？」

俺が悩んでいる時、一緒に登校しているリクオが気をかけてくれた。

「うん。 兄さんのためにどんな事で役に立つのかと組の復興についてね。」

「大丈夫だよ。 リュウガなら頑張れるさ。」

リクオの励ましに答えて俺は笑って答えた。・・・ほんとはまだ悩んでいるけどな。

「おっはよー！」

後ろから声がして振り向くとカナが元気にあいさつしてきた。

「おはようございます！」

「おはようカナちゃん」

「あれ？ リュウガ君元気がないけどなんかあったの？」

何？ 顔に出でていたのか・・・・・

「まあ、ちょっとね・・・・そういうえば、ハイ！ 誕生日プレゼント。

カバンの中からキラキラと輝く花の形の石が付いたブレスレットを出してカナに渡した。

「あー覚えててくれたんだ。 ありがとう。」

「カナちゃん、僕からもどうぞ。」

リクオがカナに渡したのも装飾が碧色の髪留めだった。

「一人ともありがとうございました。」

その後授業も終わり、放課後の時間・・・

「フレー、フレーリクオ様
リクオがまた先生の手伝いすることをしたので現在それをやつてい
る。そして、何故か俺も手伝うことになってしまった。

「よし・・・・これにて終了!」

「リュウガとつらひは先に帰つていいよ。ボクは教室のゴミ捨てに
行くから。」

まったく、そこまでやらなくていいと思いながら俺は氷麗と一緒に
帰つた。それからは特に会話もなく家に着く。着いた途端に・・・

・
「　「「おかえりなさいませ。リュウガ様」」

「ああ！出迎えごへるひつとま三馬獸」

俺の側近である三馬獸が帰つて来た途端に現れた。氷麗は夕食の支
度をしに行つた。

「リュウガ様。実は俺らちょっとお願いしたい事があるんですが。」

雷獸が俺にお願い事を言つてきた。

「なんだ雷獸？」

「はい。俺たちここが初めてなんで、その・・・一番街に行きたい
ですよ。」

一番街にといつたら旧鼠事件のときに来た以来だ。噂じや結構賑わ
つていると聞いたなあ。

「なんだお前ら、そんなにも行きたいのか？」

「「「はい。どうかお願ひします。」「」」

三体はキラキラした目で俺を見た。しばらく時間が経つた後に・・・
「しようがないな。わかつたよ、今着替えてくるから待ってな。」制服から着替えて準備し、妖怪になつてから炎獣たちと命流して一番街に向かった。しばらく歩いてたどり着いた。俺は一度目だが、初めての三馬獣たちは興味があり、あつちこつち見回っていた。

「リュウガ様ーこの名物の『化猫屋』でどうですか？」

「うん？ああ、それならこのあたりに・・・・っと、ここだ。」一番街の化猫横丁に入つてからしばらく歩いたところに化猫屋はあつた。

「いらっしゃいませーー！」　「御来店ありがとうございます。」「妖怪和風隠食事処『化猫屋』へようこそーー！」

店に入ると店主の良太猫と配下化け猫妖怪たちが元気に迎えてくれた。

「よし、良太猫。だいぶ繁盛してるんじゃないかな。」

「はいー。リュウガ様たちのおかげでまです。そういうえば先程若が来たんですよ。」

リクオが？不思議に思いながら案内されるとたしかにリクオがいた。何故か力ナも一緒だ。

「リュウガ様。あの女はたしか・・・。」

「（言うな！いいかお前ら、何も言つなよ。）」

炎獣を黙らせてからリクオの隣に座り、周りに聞こえないようになりオに話しかけた。

「（リクオ、なんでこんなところに力ナを連れてきたんだよ！？）

「（学校で妖怪に襲われているところを助けたら俺のことを知りた
って言うから連れてきた。）」

平然というリクオ。ここにくれば化け猫たちが『若…』ってよんだ
り、他の妖怪もそれなりの行動をするからリクオが妖怪の主だつて
ことはわかるだろうけどな〜〜〜。

「（でも力ナが人間だつてばれたら他の妖怪共がうるさいぞ。）」

「（バレなきやいんだろ）」
ダメだこりや・・・人間のときと性格が変わってるよりクオ・・・・

接客の妖怪が力ナに興味津々だ。仕方がないことだ。人間なんて見
たことないからだ。その後いろいろと遊んでいたが俺はまだ悩んで
いた。そんな俺を見た氷獣が俺に黒色の古い笛を渡した。

「あ、リュウガ様。これをぜひ受け取ってください。」

「なんだこの笛は？」

「その笛は父上影犬様がよく吹いていた笛でござります。しかし、
影犬様が亡くなれて以来ずっと吹かれていない悲しい笛でもあります。ですでにリュウガ様が吹かれてはいいかと思ったので・・・」
そういうて氷獣は笛を渡した。少し重い感じがしたが気にせず、俺

は少し吹いてみた。

吹き終わると三馬獸とリクオとカナはもちろん、良太猫や周りにいた妖怪たちも拍手をした。

「いいぞ～！」 「最高だぜ！」 「私また聞きた～い」

多くの妖怪たちが今までより騒ぎ出した。だが、日が昇ろうとしたので閉店の時間になつた。カナはさつきリクオが家まで送り届けた。けつこう遊んでいて寝ちゃつてたからな。

「よーっしー俺たちも帰るとするか。」

「ありがとうございましたーーーーー！」

閉店に伴い俺たちも家に帰る。楽しかったなあそれに組について、いい方法も思いついたしな

第十二話 化猫屋での出来事（後書き）

ここからオリジナルの話になります。ちなみに笛の形は大神に出てくるウシワカの笛の形です。

第十四話 新天地の新たな仲間（前書き）

オリジナルの話です。会話や文字のおかしいところがあつたら、教えてください。

第十四話 新天地の新たな仲間

朝5時頃

「本当に行くのリュウガ？」

「ああ、『ごめんね兄さん。けど・・・もう決めたのです』朝早くから俺は出かける支度をした。なぜなら、影犬組復興のために新しい土地を探すからだ。

最先端である捩眼山よりもさらに西に向かわなければならない。そのためにはかなりの時間がかかるのだ。しかし、そこにいる妖怪は奴良組に従わない妖怪だらけなので丁度いい話だ。必ず仲間を増やして父上の組を復興させてやる。

「それじゃ兄さん、叔父上。行つてまいります」

「うむ、リュウガよ。気よつけるんじやよ」

叔父上はいつも通りぬらりくらりとしているがリクオはまだ心配してた。俺はリクオの肩に手を乗せた。

「大丈夫だよ、兄さん。もし兄さんが困った時は必ず僕に連絡してね。すぐに帰つてくるから」

「・・・・・うん、分かった。ボクはリュウガの事を信じてるよ」そう言った後、三馬獣とともに本家を後にした。途中で俺は土地の状況を知るために牛鬼の屋敷に立ち寄った。無論今は妖怪の姿だ。

「久しぶりに来たなあ・・・やつぱりここは空気がおいしいな歩いていると牛鬼自らが俺たちの所にやってきた。

「私に何か用か？リュウガよ」

「ああ、牛鬼。少し聞きたい事があるんだ・・・」
牛鬼に東北の土地に関する情報を聞いて、聞き終わつた後は牛鬼と別れて炎獣の背中に乗り先を急ぐことにした。三体はものすごいスピードで速つたから息をするのに困つたよ。

3時間後・・・・

俺たちは福井県の足羽川の近くにやつて來た。牛鬼から聞いた情報によるとこの土地では三つの勢力があつて、その妖怪たちは互いに勢力を競いあつていてのことだ。

「リュウガ様。いよいよござりますね

「必ず組を復興させましょーぜ」

氷獣と雷獣の気合は十分のようだな。まあ、この戦いでお前たちの実力が分かるからな。

「ではリュウガ様。始めに蛇帯と言う妖の所に行きましょう

炎獣は指差した先には、蛇帯という妖怪がいる森であつた。さつきから強い妖氣も感じるからな。

「そうだな。よし！まずはあの林の所から行くとするか

そして俺たちは歩き出した。しばらく森の中を歩いているとさういふ妖氣が強くなつてきた。炎獣達も気付いているようだな・・・

その時、俺たちに向かつて刀が回転しながら迫つてきた。

「……チツ・・・・」

間一髪のところで刀からよけた。刀が飛んできた方向を見ると、蛇のように長い体をしているが、先端が両方とも口がありその中に目がある妖怪がいた。

「あいつが蛇帯か？」

「怨念によつて竹が妖怪になつた妖、間違いありません」

炎獣が説明していると、飛んできた刀が全て蛇帯の体に刺さり俺の方を見た。

「貴様ら何者だ？ここが俺様の縄張りだと分かつているのか～～～？」

「随分戦いに余裕がある奴だな。俺は奴良組の・・・いや、影犬組二代目頭領リュウガ！」

自分の名を名乗り上げると蛇帯は笑いながらしゃべりだした。

「ケケケ・・・影犬だあ～～？ふん、その犬ころが俺様に何の用だ？」

「单刀直入に言つ。蛇帯、俺の仲間になれ！」

「なめんなよ。俺様を仲間にしたいならお前一人で俺様と戦いな！」
蛇帯がそう言うと炎獣達は怒り、今にも攻撃しそうな感じだつた。
だけどそれを止めさせた。ここは、俺が行くつもりだよ。

「分かった。本気でいくから覚悟してなよ」

「へつ、お前なんか串刺しにしてやるぜ！」

俺は大鎌を構え、蛇帯もさつきとは違う目になり真剣な目になった。しばらく動かなかつたが、先に蛇帯の方が動き刀を飛ばしてきた。

カキンツッ！！

俺は大鎌を振り、刀を弾き飛ばしたが次から次へと蛇帯は刀を飛ばしていく。

「ギヤツハハハハ、いつまで耐えきれつかな～～～」

蛇帯はどんどん刀を飛ばしてくる。それを刀を大鎌で弾き飛ばすのを続けながら近づいて行つた。もう少しのところで蛇帯は気付き、地中の中に逃げた。

その間にまたあいつの我がままで人型から獣の姿になり、『畏』を開放したのだ。

「そろそろケリをつけてやるとするか。覚悟しな～～！」

蛇帯は俺がいたところから出てきた。しかし、そこに俺はいなく蛇帯は周りを見て俺の姿をぞつとした。

『驚イタ力？コレガ俺ノモウ一ツノ本当ノ姿サ』

そして自分の影から黒い塊をたくさん出した。塊は次第に俺と同じ形になつた。

「な、なんだよこれは・・・？」

蛇帯の周りに何体もの俺がいるのだ。氷獣と雷獣もこの光景に驚いているが、炎獣だけは冷静だった。

「（あれは・・・影犬様の使つていた技 幻惑影分身」

そうしている中、蛇帯は先程から動搖しており、混乱していた。

「くそが、こうなりや全部やつてやるぜ！くらえ！」

蛇帯は体にある四本の刀全てを分身に投げつけた。だがどれも幻で刀がすり抜けてしまい、蛇帯は焦りまくった。

「無駄ダヨ。オマエハ・・・俺ノ『畏』ニ負ケタカラナ」

どこからともなく声がして、蛇帯が必死に辺りを見回している姿についつい笑ってしまう。

「オワリダ。爆風竜激破！！」

そして俺は獣になつた時の技を繰り出した。牛頭丸の時と同じ結果になつた。炎獣達が俺のもとに近づいて、雷獣が気絶している蛇帯を起こした。

『オイ。早ク起キナ』

「う、うん・・・はっ！ひつ、助けてくれ。命だけは頼む」

蛇帯は見ただけで恐がり、必死に命乞いをした。さつきまでの自信はどこに行つたのやら。

『人型、コイツノ後始末ハオ前ガヤレヨ』

そう言つて再び人の姿に戻つた。獣型のわがままに若干呆れながら文句を言つた。

「まったく・・・大丈夫だよ。別に命までとらないさ。けど俺の仲間にはなってくれるよな？」

「まつたく・・・大丈夫だよ。別に命までとらないさ。けど俺の仲

「はー、これからは俺はあなたの部下です。みいじへお願ひします！」

その晩俺は、妖怪・蛇帶と面を交わした。

第十四話 新天地の新たな仲間（後書き）

蛇帯

新天地でリュウガと戦い敗れてそのまま盃をかわして仲間になった。
前後に口があつて、その中に目がある。体に四本の刀が刺さつてい
てそれを操つて戦う。
敵に巻きついて締め上げる攻撃もある。

武器 血怨刀

第十五話 一 つ田狼族との出合 (前書き)

会話や内容がおかしかつたら感想で教えてください。

第十五話 一つ田狼族との出会い

昨日の夜に俺は、妖怪・蛇帯を仲間にした。

朝になつて、蛇帯を道案内役にして再び仲間と土地を探しに出発した。山道を登つている時に蛇帯に話しかけた。

「なあ、蛇帯。ここいら辺でお前以外に強い妖怪はいないのか？」

「いえ、リュウガ様。ここ越前には俺以外に力が強いのと組を名乗つている妖怪がいるんですよ」

そこへ炎獣が蛇帯に質問した。

「その妖怪はどんな奴なんだ？」

「一つ田狼族と鬼胡桃という妖怪です。もうすぐで一つ田狼族のシマですよ」

蛇帯と話をしている時にどこからか動物の鳴き声がした。これは・・・狼の鳴き声？

「「「「「うう、リュウガ様！？」」」」

突然のこと驚いた三馬獣と蛇帯だつたが、すぐに我にかえり後を追つた。

声がしたほうにしばらく走ると一匹の子狼を発見した。
よくよく見ると子狼の足には、人間どもが仕掛けた罠にかかってい

た。近づこうとする子狼に警戒されてしまったので仕方なく人型から獸型になつて子狼に近づき話しかけた。

ちなみに獸の姿だと動物の声が分かるようになる。

「安心シナ。俺ハオマエヲライジメニ来タンジャナイゼ。ムシロ・・・
オマエヲ助ケニ来タ」

「本当に・・・？私を食べない？」

「オマエヲ食べテモ何ニモナラナイ。外シテアゲルカラ動クナヨ」
優しく子狼にそう言って足にかかつた罫を噛み壊して、風の陣 癒し風の舞で治した。

そして子狼に別れを言つて炎獸達のもとに戻つた。だが子狼はその後をついてきていた。

「あ、リュウガ様！ どに行つてたんですか！ ？心配しましたよ
戻つて来た途端に俺は、みんなから説教されてしまった。

「分かつたよ、俺が悪かつたって。それより蛇帶。一つ目狼族はどこにいるんだ？」

俺はみんなからの説教から逃れて蛇帶にシマについて聞いた。

「あの丘を上がつたところに一つ目狼族の屋敷があります。」

「よしーさつそく行くかッ・・・・・・つん？」

俺が丘に登りうつとするとさつきの子狼がやつてきてそばに近づいてきた。

「リュウガ様、この狼はどうしたんですか？」

「なにやらリュウガ様のことが気に入つたようですね」

氷獸が言つたとおりに子狼は俺の足に体をすりすりしていた。先程あつた出来事をみんなに話した。

「良いことをされましたな、リュウガ様は優しいお方ですぜ」その後子狼を連れて蛇帯が言つた丘を上がつた。周りを見てみるとそこに大きな屋敷があつた。

屋敷に向かうとするとたくさん狼の妖怪があらわれた。ざつと数えて四十匹はいるな・・・・・子狼を隠して戦闘態勢になつた。

「お前ら、一人十匹ずつでやれ。お前らの力・・・俺に見せてみろ」

「「「「はっ！！」」解しました」「」

蛇帯は俺と戦つた時みたいに刀を使い、三馬獸はそれぞれ炎・氷・雷の流れている武器を使い妖怪達を倒していく。完全にこちらの方が圧倒しているな。しかし狼妖怪達も負けずに襲いかかってくる。

「待て！…皆の者やめるんじや！…」

五時間くらい戦い続いた後、屋敷の方からこの狼妖怪達の頭らしき妖怪がやって来た。炎獸達に攻撃をやめさせて、俺はその者に話しかけた。

「俺は影犬組頭領リュウガ。あんたがこここのワーダーか？」

「そうです。私はこの一つ目狼族の長、牙^{がき}魏と言います」

「中々いい奴だな。牙魏・・・俺の仲間になれ」俺は堂々と牙魏に言った。すぐには決まらないと思ったが・・・・・

「あなたの方の強さに私は惚れました。しかし……これは一族に関わる事です。それに今、いなくなってしまった私の娘を探しているところですのです……」

「お前の娘？」

もしかしてと思い俺は氷獸に子狼を連れてこさせた。牙魏は子狼を見たとたんに驚いた泣きながら子狼に抱きついた。

「人間どもの罠にかかつていたんでな助けたのさ。……一日待つてやるから決まつたら俺のところに来いよ」

そう言つて俺は炎獸達を連れて丘を下りて行つた。やがて一日が経ち、再び夜の時間になつた。今、俺たちは屋敷から少し離れた場所で飲み会をしている。今日は暇つぶしに笛を吹いていた。俺が笛を吹いていると牙魏の娘がこっちにやって來た。

「なんだ？ 笛でも聴きに来たのか？」

そう言つと牙魏の娘は頷いたので俺は笑いながら再び笛を吹き始めた。次に牙魏が配下の妖怪を連れてやってきた。そして俺の前で頭を下げた。

「リュウガ様。私と盃を交わしてください。そして一つ目狼族総勢五十五、あなたの下で働くせて下せ」

「…………よろしくお願いします……」「…………

「ああ、いいぜ。今日からお前らは……俺の仲間だ！」

そして俺は牙魏と盃を交わした。

第十五話 一つ田狼族との出会い（後書き）

牙
魏

一つ田狼族の長。自分の娘を助け、自分よりも強い力を持つリュウガの存在に惚れて盃をかわした。一族とのきずなは強く素早い動きで敵をかく乱して爪と牙で切り裂く。

そろそろ別の土地に行きます。

第十六話 進軍！そして異変（前書き）

遅くなつてしまつていゝめんなさ。これからはもつと早く書をまか。

第十六話 進軍！そして異変

一つ目狼族を仲間にした次の日、そのまま鬼胡桃も配下にした。福井県で勢力を競い合っていた妖怪・蛇帯、一つ目狼、鬼胡桃の三つの勢力は全て配下にした。この土地は俺のシマになつたというわけだ。ここまできて3日は経ちあとはリクオに報告するだけだ。

「みんな、そろそろ奴良組本家に戻るうと思つが・・・どう思つ？」
もつとシマを増やしたいと思っているが、みんなの気持ちを聞くことにした。すると、武闘派の鬼胡桃と蛇帯は俺の意見に反対した。

「待ってくれよアニキ！そんな早く帰らずに、もつとシマを広げてからにしねえかい？」

「たしかに・・・ひとつしか土地がないのでは他の連中にリュウガ様がバカにされてしまうかも」

「しかし、リクオ様はリュウガ様の主であるし・・・」
牙魏と炎獣は賛成派・鬼胡桃と蛇帯が反対派と意見が分かれた。なかなか決着がつかないからお互いの意見を取り入れることにした。

「よし、牙魏。お前の部下から一匹使いを出しててくれ。そして浮世絵町の様子を探らさせろ。俺たちはこのまま西へと向かう。全員分かつたな！」

「――「了解しました」」

その後、牙魏の部下が浮世絵町に向かったのを確認して俺たちは西に向かって行進した。

着いた場所は福井県の隣の兵庫県、ここでも多くの妖怪がいた。最初の1日目は石や土の塊から生まれた妖怪・クグツに出会った。5百体くらいいたが、俺にも仲間がいるおかげで有利に戦いが進んでいった。そして倒した奴から百体を配下にした。次に背中の甲羅に顔がある妖怪・カニ坊主一家を従わせた。ここまで俺の僕は約2百人になつた。

その日の夜は宴会になつた。みんな大量に酒を飲んでいたが俺は抜け出し海の方に行き眺めた。初めての光景に興味があり、少し遊んで暇つぶしに笛を吹いた。

「リュウガ様」「どこですか？」遠くから氷獣の声がして見つかると手を引っ張られて、再び宴会に混ざつた。

次の日、俺が道路道を歩いていると1人の女の子が4人の子供にいじめられていた。俺はいじめられている女の子からある事に気が付いた。

――あいつから漂うこの匂い……妖怪の匂いだ――

そう確信して俺は、妖怪化していじめっ子の前に立つた。「うせろ」と俺が言つた瞬間にいじめっ子は逃げて行つた。それでも遠くからバカにしたので首を回しながら炎獣の方を向いて、

「お前ら、あのガキども・・・食つてもいいぞ」

そつ言うと真っ先にみんな、喜びながら追いかけて行つた。やれやれと思いながら俺は女の子の方を見た。

「大丈夫か？今治してやるからな」

俺が殴られたところを治療していると女の子は不思議そうな目をしてながら尋ねた。

「あなた誰？・・・なんで私を助けたの？」

「俺は影犬組一代理頭領リュウガ。理由は、そうだな、妖怪仁義つてやつかな。お前は見たところ・・・半妖怪か？」

「うん、私は茜。大神族という妖怪の子だけど母親が人間で父親が妖怪なんだ。それで一族からもバカにされて、人間の方についてもさつきみたいになっちゃんだ・・・」

話を聞いていてるうちに俺は知らず知らずに手に力が入つていた。

「・・・親はどうした？」

「死んだ・・・仲間と人間たちによつてね。だから私に家族なんていないんだ」

俺はとてもほつておくわけにはいかない気持ちになつた。そしてあることを思いついた。

「それなら、俺がお前の家族になる。お前は今から家に帰り自分の大切なものを持つておいで。俺はここで待つているからさ。嘘は言わないから早く行きな」

茜にそう言つた後、近くの樹木に腰をかけて寝ることにした。茜は最初はおろおろしてたが最終的に家のある方向へ走つて行つた。し

ばらくすると、炎獣たちが笑いながら戻つて来た。ひどい血の匂いが鼻に漂つてくる。

「いや／＼リュウガ様。あの子供たちの絶望した顔は面白かったですよ」

「そうそう、それにあの新鮮な人肉はうまかつたぜ。アーチもこれ食べる？」

みんなが騒いでいる中、茜が荷物が入ったリュックと骨からできたトゲトゲの刃物がついた大剣を背負つてこっちに来た。親からの形見かな。みんなが不思議に見ていて、俺は立ち上がり、茜の肩に手を回して言った。

「待つてたよ。こいつは茜、今日から俺たちの仲間だ。仲良くしてくれよ」

俺が自己紹介するど、じぞつて全員が名乗り始めた。茜の戸惑つている姿に苦笑したら、茜が俺の前に来たので怒っていると思ったら…

「あの、リュウガ様。もしもいいのならあなたを…『兄様』と呼んでもいいですか？」

「…・・・・・いいよ。それじゃ、今日からお前は俺の妹だな」
茜を優しく抱きしめると茜も泣きながら俺に抱きついた。茜の頭を撫でていると牙魏の使いがものすごい速さでやって来た。使いを一旦落ち着かせて報告を聞いた。

「ただいま浮世絵町では四国八十八鬼夜行と名乗る連中が奴良組に攻めているという事です。敵の大将は玉章という者で、隠神刑部狸の妖怪です。リクオ様は百鬼夜行を連れて戦うようです」

「そうか。ほれ、褒美だ」
さつき鬼胡桃からもらつた子供の腕を渡した。使いがそれに夢中に
なつて食べ始めた。

「聞いたかお前ら、行進は中止で急いで浮世絵町に帰るぞ。そした
ら出入りだ・・・いいな！」

「　　「　　「　　「　　「　　おつ　おお～～～」　　「　　「

第十六話 進軍！そして異変（後書き）

ちなみに妖怪・クグツは「ゲゲゲの鬼太郎 千年呪い歌」、力二坊主はアニメの「ゲゲゲの鬼太郎」、茜は「千邪の封魔師」からです。

第十七話 四国八十八鬼夜行対百鬼夜行

奴良組と四国八十八鬼夜行との戦争はしばらく沈黙から、大将であるリクオが先陣を進んでいつて、そこから両軍の妖怪が真っ向からぶつかり合つた。互いの幹部同士もぶつかるなど両軍の総力戦である。そしてリクオはゅっくりとまつすぐ、向こうの大将・玉章のところに歩いてゆく。ぬらりひょんの畏れで周りからはリクオの姿を認識されずただゆっくりと歩いていく。

「明鏡止水 桜」

リクオが玉章にむかって自らの奥義を発動する。盆の中の波紋が鳴り止むまで炎は消えず対象を燃やしつくす技だ。

「玉章様・・・!? ギヤアアアアアアアアアア」

玉章は七人同行の一人の犬鳳凰を身代わりにして炎を受けさせた。それにより犬鳳凰が燃え尽きるところリクオはまた歩み、玉章に近づいた。

「オイオイ・・・部下を身代わりにして逃げるのか。どうも・・・いつまでたつても小物にしか見えねえ奴だ。このまま消してしまってかまわねえ気がしてきたぜ」

スツ・・・

しかしリクオは気付けなかつた。音もなく空中からリクオに近づいた妖怪・夜雀に。

「そうだ・・・」の玉章の部下になるものは・・・玉章のために犠牲となり玉章に・・・つくすのだ！見せてやれ、夜雀！」

徐々にリクオの視界は真っ暗になつた。例えるなら完全なる闇の世界——

「世の理には：陰：と：陽：がある。：陰：とはすなわち妖怪のこと。：姿：を消し・・・：闇：に消える・・・まさに：陰：の存在・・・その：陰：を相殺するもの——：陽：。：陽：の力を持つことで・・・：陰：を消すことができる。つまり妖怪退治とは：陽：の力を加えることなのだ。それが人間が生み出した陰陽術であり、おぬしがくりだした明鏡止水・桜——。普通の妖怪はもたぬ——かつて百鬼を統一したおぬしの祖父が手にした力——そしてこの玉章が手にしている力もまた————」

ずつ・・・

玉章の刀がリクオのわき腹を切り裂いて鈍い音がした。

「人間はかつて：陰：を強く畏れた。——が今は・・・世界が明るすぎるとは思わんか・・・・妖怪の：存在：が薄れるわけだ、奴良リクオ・・・・変える必要がある。そして我々は・・・再び人に畏れられなければならない。そうだ——この玉章がこの世に闇を取り戻すのだ」

玉章が刀を抜く瞬間にリクオが片ひざを突く。そして周りからリクオの姿が見えた。

「フフフ・・・どうやら君の姿は認識されているようだね。訊こう、奴良リクオ。我がハ十八鬼夜行の末尾に加わらんかね？悪くないと

思つぞ。働きしだいでは幹部にしてやらんでもない・・・どうだ?「玉章の問いにリクオが静に答える。

「・・・」とわる。てめえと畳を交わすと考えるだけで虫睡が走る
「ぜ」

「そつかね・・・残念だな。ならば君を殺して君の百鬼の畏れを得
るとしよう!」

まだ動けないリクオに玉章は刀を振り上げ切ろうとする。だがそれ
を氷麗が寸前で庇つた。

ウオオオオオオオオ!

突然、戦場に大きな遠吠えが響いた。それはリクオと玉章、氷麗や
夜雀だけじゃなく戦場にいた妖怪全てが気が付きその方向に向いた。
その先には巨大な黒き獣と謎の妖怪集団が走っていた。他の妖怪は
四国勢に襲いかかり、獣はすばやい動きで妖怪たちを退け、大将同
士がいる場所に来た。当然玉章と夜雀は警戒しているが氷麗は逆に
笑顔になつた。

「この畏は・・・・・」

リクオが感じたその畏は・・・下僕であり、義兄弟であり、自分の
影である妖怪だった。

『大丈夫力!/?リクオ』

「やっぱりお前か、リュウガ。それより・・・なんでこんなに毛が
あるんだ?」

『アン？ソレハナリクオ。今ノ俺ハ・・・化ケ物ダカラサ
リクオにそう言つたが目が見えないことに気づいた。目が見えた時
に俺を見たら驚くだろうな。

「リュウガ様！危ない！！」

この声は氷麗か、リクオと雑談していたら夜雀が細かな毒羽を目に突き刺してきた。

「フハハ、これでお前の光もこれで閉ざされた・・・殺れ、夜雀！」

『・・・影犬ハ元々闇カラ生マレタ妖怪。俺ニコンナ技ハ効力ナイ
ゼ。畏発動・・・黒影狼銳爪！！』

ザツシユウウウ！！！

影からできた長い爪で夜雀の畏を断ち切つた。これで見えなかつたリクオの目も視力が戻つて、俺の姿をまじまじと見てている。そして畏を断ち切られた夜雀は氣絶して地面に落ちた。もう戦えないだろう。

「リュウガ様！すごいです！！本当にすごい方です！！」

氷麗が感激していた。そんな氷麗に念のために夜雀を凍らせると命じ、その間に人型に戻つた。

「な・・・なにをしたんだ貴様。」

「これが俺の畏れだ。もう一つあるがお前に味合わせてやろうか？」

「待て、リュウガ。」いつは・・・大将は俺がやる。」

「分かりました。主」

リクオの邪魔にならないように後ろに下がる。だが、一いつの持つてる刀・・・なんであんなボロボロのを使つてるんだ。

「「「「リュウガ様ー！ー！」」」

後ろから俺を呼ぶ声が聞こえる。青に黒。首無い河童、毛憎楼だ。敵の幹部を倒したようだな。

「よくぞ戻つてきましたあ、リュウガ様」

「みんなも今までよくやつたな。後の雑魚は俺の組に任せとおけ」周りを見ると蛇帯や牙魏、鬼胡桃、茜などが圧倒的な強さで四国勢を倒していた。

「どいつもこいつも役に立たない奴らだね・・・ま・・・関係ないけどさ。所詮、使われる存在だからな。お前達・・・ボクの為に・・・身を捧げる」

「た、玉章様！？」

「ギャアアアアア」

玉章は髪に刀を持たせ振り回して、周囲にいる仲間の四国妖怪を切り刻んでいった。

「！？何をして居るんだあいつは！？」

「味方を・・・斬つているのか！？」

そんな玉章を止めようとした針女も切り捨てた。そして、玉章の妖

「気がどんどん大きくなつていつた。

「ふはは・・・・見ていろリクオ！下僕の血肉でボクは魔王となるのだ！！」

もう敵味方どちらも戦いどじるではなく玉章から逃げる」とになつた。

「え・・・！？あれつて、リクオ様とリュウガ様の学校の・・・」

「・・・おーおー」

「あの陰陽師が、余計なことを！」

横の路地からやらが現れ、玉章の前に立ち式神を召喚する。

「待て！！そこの妖怪！！人を害する事はこの私が許さへんで！！」
あいつ・・・死にたいのか？今の玉章には勝てないのに。

「たんろーーろくそんーーいくで・・・全式神出動やーーーーー！」
威勢よく式神を召喚したがしかし、式神たちは玉章の一閃によつて
瞬殺された。

「リュウガ、やらを頼む！殺すなよ」

リクオは玉章を斬りに行き、俺は嫌々ながら花開院の確保に向かう。

ズバッ！！

リクオの刀は玉章の顔を斬り、片方の面を割つた。その隙に俺は花開院を後ろから大鎌で抱え込み下がらせようとする。

「死ぬぞお前。下がつてろよ」

「…………ハツ、お、お前は妖怪の主！なんでここの…………つて
お前も離さんかい！！」

「黙れ小娘、生意氣な事を言ひとお前の心臓……食いつかせるぞ」
花開院を脅して脇に抱え後ろに下がる。そして人間の世話にまわれ
と言つた。俺が離れたあとリクオと玉章が再度ぶつかり合つ。しか
し、今の玉章は百鬼夜行を背負つている妖怪になつてリクオとの差
は歴然としていた。リクオが何度も吹き飛ばされてしまつ。

「リュウガ様！私たちもリクオ様に加勢しましょー！」

「ダメだ！主は大将として体張つてるんだ。これは試練なんだよ
いつの間にか茜が俺の元にやってきていた。

シユウウウ

リクオの体が少しだけ小さくなつたように見える。ヤバイな。日が
出てきたのか、人間に完全に戻つたらアウトだ。

「リクオ様からはなれろおーーー！」

やはり我慢できなかつた首無や青たちが玉章に向かつていぐ。しか
し、またもや玉章の一閃により弾き返される。

「なぜ・・・貴様たちはこんな弱いやつについていく？」

「ああ？当たり前だろ・・・・・」

青の言う通りだ。俺がついていく理由なんていらない。リクオと玉

章には圧倒的な違いがあるからだ。

「玉章・・・てめえの言つその・畏れ・・オレたちはテメエのどこに感じりつてんだ・・・?てめーは刀におどらされてるだけでてめー自信は・・・器じやねーんだよ。ボクがおじーちゃんに感じた気持ちは怖さとは違う。強くてカッコよくて・・でもどこかにくめない。だから、みんなついてゆくーー・あこがれ・なんだよ、畏・・・つてのは」

リクオの奴・・・昼と夜の血が混じつているのか・・・

「そんなんじーちゃんが作ったこの奴良組。リュウガがいて、カラス天狗がいて、牛鬼が・・・みんながいるこの組を守りたいんだ」リクオがゆっくりと立ち上がる。

「ボクは氣づいた!それが百鬼夜行を背負つてここにだ!!仲間をおろそかにする奴の畏れなんて――誰も・・ついていきやしねーんだよ!!」

「だまれ」

立ち上がったリクオに玉章の刀が降り下ろされた。

「あ?」

・・・あれがリクオの畏れなのか?・・・

確かに刀はリクオの体を斬つた。斬れてるけど、それは実体にも見えずそこにあつた。玉章は怯えてしまった。そして、今度はリクオが刀を振り下ろした。

「鏡花水月」

第十七話 四国八十八鬼夜行対百鬼夜行（後書き）

次で四国編終了です。またオリジナルにいきます。

第十八話 野望の終幕

リクオの一閃により玉章の右腕が切り落とされ、それにより魔王の小槌と百鬼夜行も玉章の手から離れた。

ボトオオオオ

「うおっ、うおおおおおおお！百鬼が・・・百鬼が抜けてゆく――！ま、また・・・まつのだ。」

徐々に玉章の妖気が小さくなっている。原因は刀が離れたからだろう。玉章もそれに気づき、取ろうとするが夜雀が裏切り、刀を持ち去ってしまった。

「んで・・だ。バカな・・！？」ここで・・間違ったって・・言うんだ。玉章の方が遙か上、なにが・・違ったというんだ？」

「組を名乗るんならよ・・・自分を慕う妖怪くらい・・・しゃんと背負つてやれよな。お前につくすために・・・ボクに死にものぐるいでぶつかってきたアイツ・・・お前の畏れのついてきた奴はいたんだ。お前が・・・裏切ったんだ。」

「！？リクオ。」

リクオの体が倒れかかる寸前で俺と首無が支えた。その後玉章は気が狂つたように笑い始め、ぶつぶつとなにかを言いだした。

「若、こいつは・・・もうダメだぜ。約束は守らせてもらひつ――！おやじの・・・仇だ。」

狛々の息子・猩影が玉章に刀を向け、仇を討とうと刀を振り下げたがそこへ現れた叔父上もといぬらりひょんによつて防がれた。全員

が呆氣していると、じろから老人が近づいてきた。

「おお、玉章・・・なさけない姿になりおつて・・・」

「なんだ? このジイサンは・・・」

不思議に思つていると突然老人が巨大な狸になつた。

「あんたが四国の八百八狸の長・隠神刑部狸か?」

「そうです。頼みます。こんなヤツでもワシリには・・・」
といつしかおらんのです。バカな息子・・・償つても償いきれんだろうが四
国で今後一切おとなしくさせますゆえ。お願ひじや・・・何卒命だけ
は、それ以外ならどんなけじめもとらせますから。」

隠神刑部狸は頭を下げ、懇願してリクオに頼んだ。叔父上はリクオ
に決めさせるみたいだしな。よつてリクオは『犠牲になつたものを
弔つ』という条件で手打ちとした。

「玉章・・・お前にはたつた一人の父親がいるんだ。誰かみたいに
(・・・・・)なくすなよ。」

その間俺は玉章に近づき癒しの風で玉章の怪我を治し、蛇帯とカニ
坊主に隠神刑部狸のところに連れてかせた。仮面は戦利品としても
らつておいた。

「リュウガ、やつぱりお前は優しいやつだな。」

それから後は本家に戻つて学校に行く支度をした。リクオは傷で学
校に行けないので、俺一人で行くことになつた。何日も学校行つて
ないから休むわけにはいかないからな。しばらくは普通にするか。

「リュウガ、今から清十字団の集まりあるから久しぶりに来いよーーー」

島が俺を呼びに来る。リクオの情報によれば清継が生徒会長になつたと言つてたな。けどリクオがいないなら行く必要がないな。

「あー、ごめんね。僕、ちょっと用事あるから、じゃあね。」
家に着くといつもと変わらない光景だつた。四国騒動が終わり奴良組も元通りになつたからな。

「ただいまー。傷の方は大丈夫みたいだね兄さん。はい、今日の分の宿題。」

「ありがとうございます、リュウガ。今日の学校はどうだつた? ゆらが学校にいないと教えた。リクオは心配してたが、別にいいけど・・・

「失礼します。リクオ様、兄様、お茶が入りましたよ。」
茜が一人分のお茶を持ってリクオと俺に差し出した。

「えっ!? 君今、何て言つたの? 兄様つて・・・」

「ああ、実はね兄さん。この子僕の妹になつたんだ。」

俺は今までの事をリクオに全て話した。それによりリクオも納得した。

「そりだつたんだ。茜だけ、よろしくね。」

「はい、リクオ様! そういうえば兄様13歳おめでとうございます。」
茜に言われて思いだした。今日が俺の成人の日か〜。すっかり忘れてた。

「じゃあ、今日は総会だからそのあと誕生日会やね。」

そしてその日の夜に本家で総会が行われた。いつもならサボるが炎獣トリクオに捕まり出席した。

「今日は四国勢を返り討ちにした祝いとリュウガ様が奴良組の幹部になられた事です。」

今までの功績と領土を手に入れたことで幹部に認められた。反対しそうな者には貢物を送つて賛成させた。一つ目なんかはすぐに態度をかわった。腹がたつ奴だ。それでもこの総会で影犬組は文字通り奴良組より再建された。

第十八話 野望の終幕（後書き）

これで四国編終了です。

次はまたオリジナル話です。そろそろ仇討ちかね〜〜。

第十九話 因縁の男（前書き）

ついに現れました。名前を考えるのに悩みました。

第十九話 因縁の男

総会があつた日から一日たつたある晩の時間……

「リリが浮世絵町か

黒い服を着て袋を持つた男が咳いた。見るからに怪しい感じだった。

「……リリに・・・アイツの子がいるのか。ツチ、面倒くさいが仕方ね」

そして男は再び歩き始めた。札のような物を握りしめながら……

といひの変わって本家ではリクオと共に学校から帰つて来た。そして着替えをして出かける支度をした。いつも通りの両親の墓の掃除だ。茜や牙魏たちが行きたいと言つたが、本家で待つていろと命じた。あそこにはあまり多くの者に伝えたくない場所だからな。

「それじゃ、行つてきます」

「早く帰つてきてくださいね」

リクオと叔父上にもしっかりと伝えだし、茜達に見送られながら俺は出発した。そしてしばらく歩いて山の奥に行つて墓のある所に着いた。前に来た時からこの山全体に特別な霧の結界を張つておいた。入ると迷つてしまふと噂も流し、人間たちの間には・呪いの山・と言われて都合がよかつた。

「しばらくの間にも汚くなるんだな」

少し愚痴を言つて、掃除に取り掛かつた。1時間経つてようやく人の墓の掃除が完了した。

「日も暮れてきたし、そろそろ帰るか」

墓の前で手を揃えてお辞儀をした後道具を持って帰ろうとした時、突然霧が薄くなつたことに気が付いた。

「へ～こんな所にいたのか～。探しまくつたぜ」

声のした方を向くと先程浮世絵町にやつてきた男がいた。しかも・・・なにやら怪しい札を何枚も持つていた。見た瞬間に俺は感じ取つた。この男は危険な奴と・・・

「お前は誰だ？なぜこの山に入った」

「簡単なことだ。俺が・・・陰陽師だからさ！..」

そう言つた瞬間に男は俺に向かつて札を投げつけた。とっさにかわしてさつきいた場所を見ると、札が貼りついた所は爆発して跡形もなかつた。

「勘の良い奴だな。鼻だけが良いと思つたけどな」

「さつきからなに言つているんだお前！？」

「あれ？分かんないの。お前の大切な妖怪を滅した者だぜ。」

大切な妖怪・・・もしかして・・・この陰陽師が・・・！？

「分かんねなら教えてやるよ。てめえの親を殺したのはこの・・・
花開院星斗様だ！」

陰陽師は自慢げに自己紹介をした。自分の力に相当自信があるみた

いだ。

「お前が……俺の……父上と母上を……殺したのか
！？」「

心の奥底から湧き出る怒りと憎しみを抑えつつ、星斗に話しかけた。

「ああ？ 当たり前だろ。お前ら妖怪はこの世になくていい者なんだよ。あつ、でも……いてもいいかもな。そつじやないと俺様がつまらないからな、アツハハハハハ！」

星斗がおもしろおかしく笑っていたが冷たいほどの殺氣を感じた。
俺の怒りが爆発した瞬間だ。

「お前……殺してやる……！」

「……つは、やってみやがれ糞犬が……！」

ついに因縁の戦いが此処で始まつとしていた。

第十九話 因縁の男（後書き）

次に影犬の真実に迫ります。

第一十話 仇討ち（前書き）

まだまだ書き続ります。

今更ですがリュウガの獣の時の姿は犬神と同じで体の色が黒で頭に鎌状の角があります。

第一十話 仇討ち

今、目の前に俺の・・・父上と母上を殺した奴がいる！！

俺は今両親の仇である花開院星斗と対峙している。少し前に墓場から離れて行き、崖がある所へ移動した。さすがに墓の近くで戦うのはまずいからな。

「さあ～～つて、早いところつけ」

そう言って星斗は懐から絵のついた札を出した。なんだ・・・虎か？

「式神召喚！ いでよ聖獣百虎！！」

星斗の投げた札が巨大な虎に変わった。色が白で体中から電気が流れ出していた。

「電気系の式神か・・・かかつてこい！」

大鎌を握りしめ、大声で挑んだ。その瞬間百虎も牙をむき出しながら襲いかかつたが、それをかわして鎌で思いつきり切り裂いた。だが、百虎から流れ出る電気が一気に俺の体に伝わった。

「あつははは！ やつぱり親父と同じだな。そいつは直接攻撃する」と相手に電気が流れる仕組みさ」

星斗は笑いながら説明してきた。

それならば・・・っと俺は百虎から離れて奥義・殺戮風の舞・を繰り出した。これにはさすがに電気が伝えられず、百虎は切り裂かれて元の札に戻った。

「これで終わりか？」

「『』の野郎・・・なめんな！..式神召喚！聖獸朱雀・青龍・玄武！」

挑発に乗せられ、星斗は懐から三枚札を出して式神を召喚した。やらと同じ才能みたいで式神を多く出せるようだ。

「これは・・・さすがにきついな」

俺の見た感じ状況は不利になつた。三方から式神に囲まれてそれぞれ別々の特性で攻めてきた。朱雀は火・青龍は水・玄武は土である。

『人型。俺様ト交代シナ！コイツハ俺達ノ相手ダカラヨ』

体中ボロボロになり人型の姿では限界と思い獣型と変わつた。畏れを発動し、朱雀に向かつて・暴風竜激破・を放して倒した。

「獣の姿になつたか。調子に乗るなよ糞犬が！！」

ズブツ

振り向いたときに星斗が持つていた妖刀で何かが潰れた。しばらくしてそれが左目だと分かつた。

『ガツ、グゥウウ・・・テツメエ〜』

痛みを抑えながら星斗をにらみ続けた。

「こいつがな最初に使つたのはお前の母を切つた時だつたよ。そいつはお前を守ろうとしてワザと後ろを向いたんだぜ。親父は式神によつてなんだけどな！仕方ないよな〜〜お前ら人食い妖怪はな。あ

「ははは・・・！」

昔の記憶に笑っていた星斗、だが今までと違う気配に気づいた。

「情けない・・・俺はずつと守られていたとは・・・」

『愚力ダ。コンナ・・・人間ゴトキ一！』

悲しみと怒りが心中で渦巻いている。俺は、いや、俺たちは決心した。人食いだろうと化け物と言われてもいい・・・必ず俺達は・・・どんな奴にも負けない妖怪になつてやる。その時俺の右目はだんだん赤色になつていた。

「（なんだこいつ、さつきまでとは違う・・・なんで！？体が動かない・・・）」

リュウガに見つめられた星斗はまるで石になつたように動かなくなつた。星斗だけでなく、聖獣たちも同じだった。

『「妖魔血眼」』

動かない星斗たちに俺は憎しみがこもつた・黒影狼銳爪・で切り裂いた。

「ガツ・・・・！」

聖獣は消え、星斗も致命傷を受けた。そして静かに近づき押さえつけた。

『覚悟シナ。貴様は俺様ノ・・・最初ニ食ウ人間ダカラナ（人型、

覚悟ハイイナ？）』

「（ああ、構わない）」

「！？お前まさか、よせ・・・やめろ！？」

奴の声なんか聞こえなかつた。そのまま俺は腹を引き裂き、心臓を

食いちぎった。その後傷と疲労で人型に戻った。

「やばいな・・・かなり血をだしちゃつたか」

頭がくらくらしながら歩いたが、力尽いてしまいそのまま気絶した。

第一十話 仇討ち（後書き）

ちょっとエグイ感じになつてしましました。
リュウガは人食い妖怪になつたのでこれからは血に関するので気を
付けてください。

第一十一話 ねりひょんと影犬の出来ご（前編）（前書き）

いきなりの過去編です。すみません・・・

第一十一話 ぬらりひょんと影犬の出会い（前編）

俺が山の奥で気絶していて、リクオ達に発見されたのは一日後であった。その後俺は怪我した部分を鳩に治療されて今は床でおとなしくしている。ちなみに潰れた左目はなくなつて、穴が開いた状態であつた。鳩によつて俺専用の眼帯が作られたけど・・・面倒で付けていない。

「・・・暇だ。誰か来ないかな・・・」

「おう、リュウガよ、大事無いか？」

最初にお見舞いに尋ねてきたのは総大将ぬらりひょんだつた。

「お前さん・・・目の方は痛くないか？」

「大丈夫です叔父上」

「そつか、ならいいんじやよ。お前もワシの大切な孫じやからのもん」

・
こんな俺に心配するのか・・・優しい人だ。

「ありがとうございます。・・・ところで叔父上はいつ父上に会つたのですか？」

「影犬にか・・・そつじやな、暇だし少し昔話でもするかの」

時は戦国時代

戦乱の世とよばれ、人間は天下を目指し多くの戦をして争つていった。そして、妖怪も自らの力を示すため、自分のシマを広げるために戦い続けていた。そしてここにも数多くの妖怪を率いる妖怪、ぬらりひょんがいた。まだ100歳程度の妖怪だが急速に力を伸ばし組も急激に成長していた。数年前には捩目山に住まう武力集団『牛鬼組』を倒し従えさせて、その勢いは絶好調であった。そして今奴良組は今後どのように動くかを決める会議をしていた。

「総大将、次はどこを攻める気ですか？」

「そうじゃのう・・・牛鬼の捩眼山までの奴らはだいたい倒すか従えるかしたからのう。このまま一気に京、大阪に行くとするか！」
ぬらりひょんが行こうとするが牛鬼がそれに反対した。

「お待ちください総大将！あそこには羽衣狐がいるのですよ！」

16世紀末期、豊臣秀吉が天下をとりその側室である淀姫に大妖怪・羽衣狐がとりついたのだ。この妖怪は人間の寿命で死ぬが、何度も

生まれ変わり多くの妖怪を率いてきた。羽衣狐の配下の妖怪はどれも相当な力を持つているものばかりで、余程の戦力がないと戦えないくらいであった。

「おもしれえじゃねえの」

「やりましょぜ総大将！」

牛鬼の反対を気にすることなく関東大猿会の会長・狒々を筆頭に幹部たちが大阪に攻め込もうと盛り上がった。

「私も反対ですな。牛鬼の言うとおり、大阪に入るにはまだ時期尚早かと。もう少し力を溜めてからにするべきかと存じます」

「木魚達磨がそこまで言つなら仕方ねえな・・・そうだなあ、新しい仲間でも探すか。誰か心当たりのある奴はいねえか？」

先ほどまで騒いでいた妖怪たちが一気に静まる。そこへ納豆小僧がぬらりひょんの前に出てきた。

「実は総大将。おいら、ある強い妖怪を知ってるんですよ。」

「ほう・・・そいつは誰だ納豆小僧？」

「その妖怪は影犬。年は40で、畏れを完全に習得してます。そして元京妖怪です。」

「何で元京妖怪なんだい？納豆小僧」

雪女の雪麗が質問した。彼女は後の氷麗の母親である。

「前においら、怪我したところを助けられまして。影犬は生まれてすぐに強い妖怪になり、京妖怪たちの中でも有名で羽衣狐も影犬を

側に置いていました。けど、それが他の幹部らと険悪になり、裏切られて琵琶湖に逃げたんです。それで誘われても誰にも付かないで寂しく暮らしているんですよ。おいら・・・何とか恩返しをしたいんです。」

「いいぜ納豆小僧！うちの組に入れてやる！」

「総大将！そんなに簡単に決めていいんですか！？」

「まあ、会つてみないとわからなーいが絶対に入れるぞ。」

ひつひつして奴良組は近江の国、琵琶湖沿岸へと向かったのでした。

第一十一話 ねりひょんと影犬の出合（中編）（前書き）

ねりひょんと影犬の出合（中編）（前書き）
ねりひょんと影犬の出合（中編）（前書き）

第一十一話 ぬらりひょんと影犬の出番（中編）

近江ノ国にある琵琶湖沿岸

ここは日本の中で一番大きな湖である。満月の夜にぬらりひょん率いる百鬼夜行が湖の水面に映つていた。

「ここが琵琶湖か・・・宴会にい場所じゃねえか」

「まつたく総大将は・・・今はそのよつなことにやつて來たわけではないでしょ。」

カラス天狗がぬらりひょんに突つ込みを入れた。彼らが來た理由は納豆小僧が言つた妖怪・影犬を仲間にするためだ。

「分かつてゐよカラス・・・しつかしどこにいるんだうつな牛鬼?ぬらりひょんが牛鬼に話しかけた。

「そうですな総大将、おい納豆!お前影犬のいるところを知らんのか?」

「へい、いつもならここに・・・あ、この音!」

納豆小僧が言つと向いの方から笛の音がした。それは・・・心の癒される音だつた。

「きつと影犬さんに間違いないすつよ」

「よし!こべぞお前!」

ぬらりひょんは音のする方に向かつていつた。そこには笛をかぶり、牛鬼と同じくらいの高さの男がいた。

「影犬さへん！」

納豆小僧は男の元に走った。男は振り向き笑顔で頭をなでた。

「おお納豆、久しぶりだな。俺に何の様だ？」

「はい、実は影犬さんに会わせたい人がいるんですよ。」
俺に？と影犬が不思議に思つているとぬらりひょんが一人の前に現れた。

「ワシは奴良組総大将ぬらりひょん。影犬、ワシの組に入れ！」

「断る」

即決。ぬらりひょんの誘いに影犬はすぐに断つた。

「あらら・・・意外と頭の固い人だね、納豆。」

「どうしてですか影犬さん！？」

「悪いな納豆。お前の気持ちもうれしいけど、あの時のことから俺は・・・誰にも付かないことにしたんだ。ぬらりひょんがいい奴かもしれないけど・・・俺には無理だ」

影犬は自分が過去に受けたせいで誰にも付かなくなつた。そのまま影に入ろうとするといつさにぬらりひょんが手にあつた笛もとつた。

「！？貴様・・・それを返せ！」

「影犬。これが返してほしいならワシと戦え。勝つたら返すが、負

けたら組に入れ。いいな？」

組の者達は反対しかつた。それは総大将が決めたことであり、彼がいつもより真剣だったからだ。

そう言って、ぬらりひょんは懐から刀を取り出し構える。

「……いいだろ、遠慮せずにやらせてもらうぞ！」

その瞬間影犬の両方の手の爪が長く伸びた。そしてぬらりひょんに近づき切り裂こうとする。しかし、それをぬらりひょんが刀で防いだ。よくよく見るとその爪は影で出来ていた。影犬は何度も切り裂こうとするがぬらりひょんはそれを全て防いだ。

「やるねえ、いい畏れだな。お前、絶対に組に入れるぜ。」

「ふざけるな！お前もどつせ、俺を……裏切るだろ？」「

「……じゃあ、そろそろ本気で行くぜ。」

ぬらりひょんが爪をはじき返し、ゆっくりと影犬にむかって歩き始めた。妖怪の『畏れ』の・・・闇の戦いが始まる。

「明鏡止水！」

影犬の視界からぬらりひょんの姿が消えた。ぬらりひょんの畏れ。相手に自分を認識させなくなるものだ。

「ぬらりひょんの畏れか……」ざかしい双黒影狼銳牙！』

影犬の畏れ、『双黒影狼銳牙』それによりぬらりひょんの畏れは断ち切られた。

ドシユツ！！

自分の畏れが断ち切られたぬらりひょんは動けない。影犬はその隙に獸の姿になつた。これを見た緊張感が高まつた。次の攻撃として影からたくさんの黒い塊を出した。徐々に塊が弓の形になり、ぬらりひょんを貫こうとする。だが、弓は体を貫いたのだがその後、ぬらりひょんの体は消えていた。

ガツ！！

影犬が気づいたとき、ぬらりひょんは後ろにいて刀を振り下ろしていた。影犬は素早い動きでかわした。

「本当にお前の畏れは面白いな。」

「・・・・お前こそな」

今のはぬらりひょんの畏れの魅『鏡花水月』だ。相手の認識をずらす技。

わかりやすく言えば幻影を作るということだ。

刀と爪がぶつかるがすぐに一人は距離をとつた。そこへ影犬の部下・炎獸がやってきた。

「大変です影犬様！また人間どもが討伐隊を送つてきました。数は約一千人」

「なんだと！？よし、氷獣と雷獣にも知らせろ！」

そう言って影犬は炎獣とともに走り去ってしまった。

「・・・おいおい、ちょっと待つてよ」

あわててぬらりひょんは影犬を追いかけた。

「えっ！？ちょっとお待ちください総大将～～！」

状況に飲み込めないでいた妖怪たちもあわてて二人を追いかけ始めた。

第一十一話 ねりひょんと影犬の出来ご（中編）（後書き）

次で過去編終了です。
お楽しみに・・・・・

第一二三話 ねりひょんと影犬の出来事（後編）（前書き）

今回で過去編終了です。

第一二三話 ぬらりひょんと影犬の出会い（後編）

影犬を追つてぬらりひょんは森の中を走っていた。

「あいつは・・・・・どこに・・・・・

ウオオオオオオオオ・・・

「！？あつか。」

激しい獣の遠吠えがした方向にぬらりひょんは走り出した。

そのころ影犬は三馬獸とともに、武装した人間たちと戦っていた。
戦場は地獄絵図で、そこら中に血の跡が散っていた。

「くそ、鉄砲隊前へ出ろ！あの化け物を打ち殺せ！！」

大将らしき者に命令されて鉄砲を持った人間が影犬を狙った。

ドドン

玉は影犬に向かっていったが届くことはなかった。目の前に突然ぬ

らりひょんが現れ、玉を全て切り落としたのだ。その後討伐隊は、ぬらりひょんと三馬獣の活躍で全滅した。

「貴様・・・何のつもりだ！？早く逃げ「なぜワシが言つ」とを聞かねばならんのじや。」「…？」

「ワシはの・・・お前を仲間にしたいのじや。お前みたいな強い妖怪ならなおさらじや。どうじや、仲間にならんか？」ぬらりひょんはまっすぐに影犬を見つめた。しばらくした後、影犬は人型に戻った。

「いいだろう。お前の組の雰囲気もいいし、大将がこんだけおもしろいしな。」

「ハハハッ。うれしいぜえ、影犬。盃を交わそ。」

こつして影犬はぬらりひょんと盃を交わし奴良組の一員となつた。その後カラス達も追いつき、二人のやり取りを見ていた。

「ありがとうござります、ぬらりひょん様。これからはよろしくお願ひします。」

「うん？お前さんは・・・」

「はい。我らは影犬様配下の三馬獣です。」

「そつか・・・よろしくな！あと、一つ聞きたいことがある。」ぬらりひょんは酒を飲みながら話す。

「なんだ？」

「ワシはもう直に京に入る。やつすれば羽衣狐とぶつかるだらう。

そのときお前はどうする?」

ねらいひょんの問いに影犬はすぐに答えた。

「安心しろ。俺は奴良組の一員で総大将についていく者だよ。羽衣狐との因縁も断ち切るのにもいい機会だし、あなたの命令に従うよ」

「よし。やつぱりいい奴だなお前・・・」

それから数ヶ月後、奴良組は京にはいった。

「以上じやよ。・・・って寝てしまつたか」

長い話でリュウガは寝てしまっていた。怒りつとしたがやめた。リ

ュウガの寝顔がかわいかったから・・・

第一二三話 ねりひょんと影犬の出来事（後編）（後書き）

最後のメモ变でしたね～。
次から原作に入ります。

第一十四話 邪魅の漂う家（前書き）

久しぶりに原作に入りました。

第一一十四話 邪魅の漂つ家

夏の季節——そんな時期には浮かれた人間がわいてくる——

「……ハアー何やつているんだ?」

俺はため息を吐いた。リクオがぶつかりアイスがついて汚れたとヤクザっぽい男の連中に文句を言われている。あきらかに向こうのほうが余所見をしてぶつかって来たのに……

「お前見ねー顔だなあ!俺達のシマで何しどんじゃい!」

「妖怪を退治!」

即答したリクオに男たちは、笑い始めて妖怪はいないと言に出した。俺はそつと近づき……

「じゃあ、これを見てもですか?」

言い終わると同時に小妖怪たちにリクオの背後から顔出すよつて云えた。

「うわっ、うわあああああ!」

情けない声を出しながら男たちは逃げ去った。笑いたかったがカナに声をかけられてこらえた。

「ふーーーあぶね。リュウガダメじゃないか!」
カナちゃんにばれちゃうよ

「じめんね兄さん。けど、あいつひまほいとい藥を

そうだろ、と小妖怪たちに言つて賛成してくれた。

「まあ、こやとなつたら私が全部凍らせればいいんですけど……」
氷麗の言葉に俺たちはすぐに否定した。護衛が必要つて言つならば
あいつらも。後ろを向くと茜・炎獣・蛇帝の3人が黒い服装とサン
グラスをして付いてきていた。つまく変装したと思うが結果的に危
ない人の感じだ。そもそもこんなことになつたのも清継が……。

学校で1学期最後の試験が終わり夏休みがすぐそこまで来ていた。
リクオとともに清十字団の部室へやって来ていた。

「さああて！期末テストも終わつてウキウキだねええ」
試験が終わつてくれたことはよかつたよ。勉強はいつもやつている
ので、リクオと同じ点数だけな。
いつも面倒だから嫌なんだ。

「それはさておき」れを見てくれ……！

「何……？メール？」

「何これ？『妖怪ハンター 清継くんへ』……！」

清継がいつも持ち歩いているノートパソコンを一同に見せる。画面
には巻がよんだ題名のメールが映つていた。

『妖怪ハンター 清継へ』

清継くん！助けて！！

私の家に妖怪が出るの！夜になると枕もとに立つのよ……お願い……

・御祓いしてもどーやっても解決しないの・・・数多くの妖怪をハントしたという清継くんしか頼れないのよー。

「まさか・・・」の子助けに行くの?」

「イタズラかもしないじゃん」

「その心配はなこよ。」の地域に伝わるとある伝説とも符合する部分も多いしね!」

それは妖怪として興味深いな。そして妖怪の名は邪魅か・・・

本物見てみたって気持ちはあるけど暑い夏は外出たくないんだよな。毛皮のせいでも体温の調節できないから嫌なんだよな。まあ、リクオが反対してくれるだろ?し俺が行くことはないだろ?。巻たちもたいして行きたそうじゃないのとカナは妖怪嫌いで花開院は来てないし、氷麗も行く理由がないだろ?。

「えええ~・・・貴重な休みを~」

「ちなみにそこは海があるよ。」

「さすが清継くん。ぬかりのない。」

「夏といえば海~~~~~!」

・・・味方の巻と鳥居が落ちた・・・

「家長くんは行くよね？」

「う～ん。みんながいくなら私もいいよ！」
力ナまでもか・・・・・ということはー？

「しようがない・・・僕も行くよ！」
やつぱりリクオもか・・・・ガクッ

「ハイ！私も行きます！」

くそ～～氷麗め・・・リクオが行くからか。俺は逃げるか・・・・

「リュウガ！」「リュウガ様！」

リクオと氷麗が同時に俺を捕まえ、『行こうつー』という田線を向けてくる。

「はあ、わかりました。僕も行きます」

・・・というわけだ。今は石畳で舗装された並木道を歩いて早數十分。テンションの高い清継とそれに便乗している島を先頭にたまたま一人ずつの組になつて歩いている。巻と鳥居、リクオと力ナ、俺と氷麗だ。氷麗もまたテンションが高かつた。

「リュウガ様と一緒に旅行。楽しみ」

リクオと俺がいるのと自分ひとりじゃなにかあつたときにみんなを守れないかもしないからだと。

「旅行って、たいして観光とかじやはないと思うが。」

それにもつきから後ろでものすごい殺氣を感じるのは何故・・・？

街に入るとそこは都会ではない、和風の風情がある所だった。依頼主の家はその中でも大きな塀に囲まれた屋敷だった。奴良組よりは大きくないが。

「依頼主の菅沼品子です。来てくれてありがとうございます。・・・大丈夫かしら、一応は期待しています。」

挨拶もそこそこに髪をサイドで二三つ編にして眼鏡をかけている菅沼品子という女の子が俺たちを敷地内に招きいれようとする。

ザアアアアア・・・・・

「・・・その娘に近づくな」

突然妖氣を感じたが、すぐに妖氣が消えそこにも誰もいなかつた。

「リュウガ、今・・・」

「うん、今そこに妖怪がいたね。あれが邪魅なんだろうけど・・・」

「

『その娘に近づくな』か・・・・

第一十四話 邪魅の漂ひ家（後書き）

次はエグロイ感じです。

第一十五話 邪魅の漂ひ家 一一(前書き)

「これで邪魅編終了です。」

第一一十五話 邪魅の漂つ家 一一

「お？お邪魔します・・・」

品子さんの部屋に入ると天井、壁の一面に大量の札が貼られていた。この町にいる神主が大量の札を彼女に渡していたのだ。ひづ。

「ここよ、昨日もここに出て・・・私に覆いかぶさるようになつて私は私をじつーと見るの」

「覗き込むだけなんだね？」
確認のために清継が聞く・・・が、

「これを見て・・・昨日はいつして跡がつくまで強く握られたの！包帯がとられた右腕には強く握られたような跡があった。さわってぐるのか・・・邪魅は。

「ちよつと・・・話が違つじゃんかーーー？」

「危害加えてるじゃないのーーーゆうぢやんはなんで来てないのーーー！」

「ああ・・・最近学校も休みがちなんだよね」

たしかに・・・まあ、俺には関係のない事だが・・・

「もう次は・・何されるかわからない。私・・怖いんです。お願ひ・
・邪魅から守つて！！」

彼女の必死の願いにみんなは静かにうなずき神主とともに邪魅に対
してじづすむかを話し合つた。

話し合つた結果、女子が管野品子の部屋で一緒に寝ることになり、男子は廊下で見張り役になつた。

「何かあつたらこいつで連絡取り合おう。やつと怪奇探偵団ぼくなつたなあ」

清継が言つて取り出したのは例の呪いの人形だ。

「君たちにも先日、あげただろ?」

「うそ、ほんあるナビ」

「僕も・・・」

それにしてもさつき神主が言つには昔から辺は邪魅に荒らされていみみたいだ。

「邪魅は昔からこの地に伝えられてきた憑きもの妖怪。幻のような存在だが被害は逆にハツキリ残つている。ああ・・・でも、その前に・・・あのお一方にあえるかもしれない!」

清継は靈感ないから無理だ。これは確實だ。

「いたつ・・・清継くんつしるーーー!」

リクオが叫んで、俺も振り向いたら一瞬人のような影が廊下の角を曲がっていくのを見た。

「なにイー、ビードー！？」

よし、邪魅の正体を確かめてやろつ。清継たちが邪魔だな……こはひとつ。

「清継君！、島君！奴は部屋の方に行つたよ！僕とリクオは念のためこっちの方を見てくるね」

「わかつたぞ、リュウガくん！さあ、行くぞ島くん」

「リュウガ、邪魅が部屋の方に行つたなら僕たちも行かなきや！みんなが危ないよ！」

「大丈夫だよ兄さん！あれは嘘で、本物の影はまだこっちにいるはずだよ」

リクオと一緒に長い廊下を走る。

「ん？待てよ……さつき見た奴と違うような……」

違う？どういうことだ？とにかくあいつを追うしかない。距離が短くなつた時に妖刀を抜き、切り裂いた。ちなみにこれは星斗が持つていたものだ。

あれ消えた？なんだ、今の感覚は……妖怪のじゃない！？

「リュウガ！さっきの影はどうなつた？」

後から追い付いてきたリクオが尋ねた。

「ああ、刀で貫いたら消えちゃつた……」

「消えたっ・・・・・もしかして」

「うん、こいつは邪魅なんかじゃ・・・妖怪でもない。こいつはいっ
たい！？」

ある程度予想はつくけど証拠がない。なにかないのか・・・

「ん？これって・・・」

リクオが壁に張り付いている何かを見つけた。それは小さな紙切れ
でなにか模様が書いてあるみたいだ。

「やつ

「兄さん、この邪魅騒動は意外とはやくケリがつくかもね」

翌日、清継の提案で昨日の神主の神社に来ていた。

「そひ、また出たのですか・・・・・邪魅には本当に手をやかれると

「神主さんは邪魅のことによく御存じなんですね！」

「もちろん・・・昔からそういった邪魅騒動の話が多いんだよ、こ
こは」

「え？ じゃあ昨日はお化けも何かお話があるんですか？」
力ナは昨夜、妖怪を見たらしく神主にそれを聞いた。

「・・・・昔この町が秀島藩と呼ばれていた頃、大名屋敷があつ
てね。そこにまつわるいまいましい伝説があるんだ」
神主が邪魅にまつわる話を俺たちに語りだした。

そこには名前が定かではないが非常に君主に忠実な若い侍がいたと
いう勤勉でよく働き、何よりも君主定盛を心から尊敬していた。や
がて、定盛の目にとまり、定盛もその侍のことを信頼してたいそ
かわいがつたという。腕もたつた侍は瞬く間に出現していき、いつ
しか定盛の片腕とまで呼ばれるようになつた。だが・・・その侍を
よしと思わぬ者がいた。

定盛の妻である。

彼女は何をするにも一緒に二人の仲の良さが気にくわなかつた。嫉
妬した妻は君主のいない間にいわれのない罪をさせ、侍を屋敷の地
下牢に閉じ込めてしまった。

そのときだった――海沿いにあるこの町を大津波が襲つたのは――
――後に『地ならし』と呼ばれた程の大量の海水。町の者はほ

とんど高い丘に逃れたが地下にあつた屋敷の牢は瞬く間に海水が流れ込み若い命が散つたのだ。それ以来、この町ではさよひ侍の靈がたびたび田撃されるようになる。

といつ話だつた。神社をでてとりあえず菅沼家に戻るため歩く。先ほどのことや道を歩いていると聞こえる菅沼品子への陰口でみんなが暗い気持ちになつてゐる。みんなと少し離れたところを歩きながらリクオが話しかけた。

「リュウガ、今回の件は今夜には片つけよう。僕ももう少しで全てが繋がりそなんだ・・・さつき神社の部屋に飾つてあつた写真に昨日見た紙切れに書かれてあつた模様と同じものが書いてあつたからね」

ああ・・・あの模様か。よく見てたな。

「それじゃ、あとは動機だけだね

「え？ 動機！？」

「うん、昨日の昼間に邪魅らしき奴を見たとき『その娘に近づくな』って言つてた。そして、菅沼品子は秀島藩藩主の直系で邪魅は藩主を慕つていて嫉妬した妻に殺された若い侍だから・・・」

「もしかして、邪魅は藩主への恩を今も忘れてなくてその直系にあたる品子さんをあの神主のお札の式神から守つてるんだね！」

その通り、さすがはリクオ。頭がいいね～。

「海に行こう！」

いきなり、清継が手をたたき大きな声で言つた。

「気分を晴らすには海が一番！一作戦を練るにも気分が落ちてちゃー出るものも出ないよ……」の際、パートと行こうじゃないか！」

「いい！…ナイスアイディアよ清継くん！…」

「まさか、その口からそんな言葉が出るなんてえ〜」

しかし、ここは海は海といつてもカニの産地であり、そこには漁港があり遊べる場所なんてどこにもなかった。それでも、管沼品子は『みんなみたいな仲間がいるってことが本当にうれしい』『ありがとう』といったんだ。その言葉で俺達もまた元気がでた。その後ヤクザ達に絡まれた事でまた、みんなのやる気がでてまた、神社に来て作戦会議中だ。

あのヤクザは邪魅の噂がたつて出て行つた家を安く買いたいといふのブローカーで管沼家にきては『早く出ていけ』など言つてるそうだ。

「何か方法はないんでしょうかー? 僕ら品子さんを守りたいんです」

「やうやく・・・もつと強力なお札とかは?」

「何言つてんだよ、リュウガ。この人のお札は効かないって言ってたじやん」

俺たちは今夜決着をつけるために作戦を考えた。それは神主に新たなお札・・・式神の札を催促し神主はそれで管沼品子を脅かし家から追い出そうとするだろうが俺たちの予想だと邪魅が現れてそれを退治してくれる。そこに俺たちが妖怪の姿でそこに行き事情を説明して、神主のもとに行きすべての悪事を暴くというわけだ。

「仕方ありませんね。実は20年前に邪魅にとり殺された事件があつたんです。その時京より取り寄せた奥の手があります。」

そう言つて神主が4枚のお札を出す。

「これは強力な護符です。この四枚を部屋の四方にはり決して外には出ないこと。もちろん品子ちゃん以外は中にも入らないこと。そして朝まで絶対に戸を開けてはなりませんよ・・・」

よし、ちゃんと引っかかるつてくれたな。

ふふ、俺たち中学生を疑うようなことはしないだろうと思つてたら大丈夫だと思ってたけどね。

そして夜中・・・

「準備できました。主！」

「ああ、行くぞ」

清継たちを適当に寝むらせて妖怪の姿になつた俺とリクオは管沼品子の部屋に向かつた。

ガタガタ・・ガタガタ

戸が揺れる音がする瞬間、扉が斜めに切られた！

ゴラ・・・ギイイツン

「おつと」
部屋の中から人型としてはそれなりに大きい妖怪が先頭にいたリクオに切りかかってきた。

「俺は敵じゃねえよ」

「！？」

「詳しいことは道々話してやる・・・この邪魅騒動のカラクリ、暴いてやるから・・ついてきな――」

「え？ ど、どういうこと・・・？」

状況がわからず、戸惑っている品子を何かが持ちあげた。犯人は獣の姿になつた俺。後ろには茜たちもリクオ達と一緒に着いて行つた。

神社の中には神主と黒いスーツをとサングラスを身に付けた奴らに昼のやくざたちがいた。すべての元凶は彼らの仕業で、今日ので成功したと笑っていたところに品子がいたのに驚いた。

「神主さん……なんで、この人たちと一緒にいるの……？」

「知つてしまつたか……ならば痛い目を見て言つことをきいてもらうしかないね。おい、やれ」

品子を捕まえようとした時、辺りからリクオと俺が声を出した。

「外道どもが……邪魅はらいとは笑わせる。邪魅騒動つてのは猿芝居。まさに・悪氣なるべし・だ」

リクオの声に怯えたヤクザたちが声を上げ、怒鳴りだしたのを刀で抑えた。一斉に襲つかかろうとした奴らを俺が……噛み殺した。

『フン、愚力ナ！（ウメエ～～～ヤッパリ人間ノ肉最高。）』

多くは蛇帯と茜に切り殺され、神主は式神をだそうとしたが邪魅に防がれ、明鏡止水一一桜で家ごと燃やした。外に出ると品子が質問した。

「邪魅……どうして？私たち一族を恨んでたんじゃないの？」

「こいつはただ・主君・に死くしていただけだ。ずっと……あんたたち一族を守つてたんだ」

ゆっくりと邪魅はうなづく。菅沼品子は邪魅に顔を向ける。

「あの……誤解してて」「めんなさい。おかげで、助かったわ……」

守ってくれてありがとう。』

邪魅は彼女の顔をじっと見つめる。『ありがとう』といったのを聞きたかったから。

今、リクオは邪魅と七分三分の盃を酌み交わしている。邪魅の主君への忠義に感動したらしく百鬼夜行に加えたくなつたらしい。これで仲間が増えるってことか。その間に俺は炎獣が取つて来た生き肝を二つそり食べたのであった。

第一十六話 二人の正義（前書き）

今回は原作とオリジナルの一いつを合わせた話です。

第一十六話 一人の正義

「皆の集合～～！！」

カラス天狗が本家の妖怪たちを呼び、一列に並ばせて三羽鴉と一緒に羽織を配つていた。

- ただいま！ -

せれせれ、明日から夏休みだ。うん?「

リケスとともに学校から帰ってきて来た途端はお麗と茜が何も説明もなしに羽織を着せた。

みんなでセーの！！

バー
アン

効果音がつく感じで写真を撮られた。俺たちが着たものは、背中に…畏・の文字が入った羽織だつた。リクオは全員がお揃いの羽織を着ていることに叫ばずにはいられなかつたのみたいだ。

「ばかしい――――――！」

「何言つてんですかリクオ様！！これくらいやつた方がいいんです」

「いけてます。いけてます」

首無と氷麗が恥ずかしくて顔を隠しているリクオを必死に慰めていた。リクオが総大将の代理として四国の妖怪勢を返り討ちにしたことは妖怪任侠の世界では急速に広まつたからだ。しかし、これにより敵対勢力の妖怪どもと激しく対立することは予測できるがな。カラス天狗がリクオに何とか奴良組を再興しようと言つと……

「わかつてゐよカラス天狗。ボクは必ず奴良組の百鬼夜行は再興する。でもこれから入る奴はボクがふさわしいか見極めるから！」カラス天狗は「リクオ様」と感激していた。俺もリクオは強くなつたと確信した。その時木の上の牛頭丸と馬頭丸が愚痴を言つていた。

「け、うかれやがつて……だから奴良組はなめられんだよ。オレたち牛鬼組はあんことしなくてもかたい結束で……牛鬼様その3枚の羽織は一体―――！？」

「何でこいつ見てるんです―――！」

牛頭たちの言つた事と裏腹に牛鬼が持つてきた3枚の羽織を見て、ガーンとしたようだ。こんなに穏やかになれたのは久しぶりだ。すると牙魏の娘（子狼姿）が足元に擦りついてきた。そして俺の目をじつと見つめている。

「どうしたんだ？」

「おそらく、リュウガ様の笛を聞きたいと思います」

牙魏の娘は何度も首を振った。周りからも「聞きたい」と騒ぎ出した。リクオも聞きたいと言つたので、笛を取り出した。笛の音は奴良組本家中に穏やかな気持ちで響いた。

第一十六話 一人の正義（後書き）

もうすぐで期末テストなのでしばらく更新しません。

第一一十七話　再び陰陽師と対峙する（前書き）

最近テストが多くて更新遅れです。それでもがんばります。

第一一十七話 再び陰陽師と対峙する

季節は7月の後半に入り更に暑さが増した。夏休みに入つたから家でのんびりするつもりがまた清継の奴から招集がかかつた。内容はゆらを探すことらしい。リクオに連れてこられてしまい氷麗とゆらを探しているところだ。ところがリクオまでいなくなつたので、別れて探すこととなつてしまつた。

ここからあたりにリクオの匂いがするのだが・・・なんだか他の奴の匂いもするな。早く匂いのする方に行くとリクオとゆら、着物をきた2人の男がいた。リクオに近づき事情を聞くと、着物を着た奴らは陰陽師でゆらのお兄さんだった。なかなか強そうだな。俺は妖怪化してゆらの兄貴と対峙する。

「それがお前の本性か。妹を・・・だましあつて、妖怪めが!!--」

「リュウガ、気をつけ!-」

「主、ゆらを連れて下がつてください」

俺の言葉にリクオは頷き、ゆらを起こす。ゆらは声を上げて言った。

「リュウガくん! なんで私を助けるんや!-?」

「（人型俺モ同ジダ。何故助ケルンダ?）」

「ん?俺はただ主を助けに来ただけだ。勘違にするな

ゆらと獣化の質問に答え、体から妖氣を放つ。普通の人間なら畏れで気絶でもするんだが平然としている。

「なかなかやるよつだな。俺も本氣でいくか」と竜一は懐から竹筒を取りだしそこから水をだす。

「式神融合、仰言」

声とともに一瞬で煙が充満する。そして煙が晴れたとき、俺の回りは水でできた花に囲まれていた。

「ただの水ではないぞ。仰言よ、地に根を張り、花を咲かせて魅せよ」

数個の花が地面に落ちた。

「ジユボオオオオオオオオ！」

「な、溶けた？めり込むくらい・・・なんや・・・この式神は・・・」

「式神、仰言は金生水の花。金生水とは——金の表面に凝結により生じた水滴を集めたもの。その純度は99.9999%最も澄んでいてもつとやわらかい水・・・まさに水の中の水！この世で最も腐蝕を促す液体は：酸：でも：王水：でもなく純粹な水だ。式をまじえたこの花に触れればどんなものもたちまち溶ける・・・たとえ妖怪でもだ」

「妖怪でもね・・・」

「あいにく俺にはゆらや魔魅流のような才能がないんだ。オレ

“J”ときではこの強力な式神は3分しか使えない。それに耐えればお前の勝ちだ。やるかやられるか大勝負だ！！

「（人型早ク）アイツノ生キ肝食べヨウゼー！」
「（そうだな。）それじゃ、さつさと始めようぜ」
そう言うと一斉に花が俺に向かってくる。だが、これくらいなんともないぜ。

「奥義 風壁衝」

俺が炎獣たちに教えられて覚えた防御技で、小さな竜巻をいくつも出して花を消していく。少し破片が飛び散るが・・・

「風の妖怪か、なかなかやるな（しかし・・・アイツの腰にある刀は・・・）」

「ふん。なめんなよ」

襲つてくる花を竜巻と大鎌を使い消していく。予想以上のじぶとさに竜一は上、下、右、左、斜めなど全方向から花を襲いかかった。チツ、こちらも全力でやるしかないな。竜巻を今までのより何倍も大きくして迫ってきた花を消滅させた。

「3分間Jバトルさん」

ん！？俺の回りに水が円を作り、そこには東西南北などの文字が書いてある。やつきの攻撃はこれの準備のためか！

「異形のものよ、闇に散れ。仰言、金生水の陣！」
水柱が立ち、俺がそれに飲み込まれたのを確認しよつとした時、竜一は後ろから痛みを感じた。

「言つたはずだ。なめるなつて・・・

「がつ・・・」

鎌を抜くと同時に竜一が血を吐きながら倒れた。それを見てゆらが叫びだした。こんな奴でも兄と思つてゐるんだな・・・・・

その時、竜一の後ろにいたもう一人の陰陽師が俺に向かつてきた。
大鎌を横に一閃！！

ガシッ！！

しかし魔魅流は俺の肩に手を置き、鎌を避けた。そして、もう片方の手を俺に向け雷撃を放つ。

「めつ」

と同時に体に強力な電気が流れる。このままじや滅される。

「（人型モウイイダロウ。早ク変ワレー）」

今は素直に獣化の言う通りにした。そして獣化になると雷撃の力が弱くなつた。その瞬間を見逃さなかつた。炎獣に教えられたあの技を使ってみるか。

「邪念黒炎波！-！」

「オオオオオオオオオオ！！

く魔魅流に向かって一直線に放たれた黒い炎の畏れは雷撃を消し去り、辺りを黒こげにし、それをまともにくらつた魔魅流は燃えはしなかつたが氣絶した。

「魔魅流が・・・何者だ、お前？」

「妖怪・影犬トカマイタチノ子リュウガ、ソシテ奴良組若頭、ぬらりひょんノ孫の奴良リクオノ影ダ！」

そう言うとリクオが俺の横に来て、周囲も百鬼に囲まれていた。いかに陰陽師でもこれはきついだろうと思いつつ、竜一の方を見た。うん？なんであいつ震えているんだ？

「影犬・・・星斗を食い殺した奴か！！」

「！？食つただと！？リュウガが人を食つた・・・」

ヤバイ・・・リクオにばれた！！

第一一十七話 再び陰陽師と対峙する（後書き）

次は少し穏やかな感じの話です。ねうつひょんの孫17巻発売中です。

第一十八話 新たなる関係（前書き）

遅れた分の時間をがんばって更新に使います。もうすぐ過去編です。

第二十八話 新たなる関係

少し前に竜一がゆらに訃報を伝えた。内容は仲間が復活した大妖怪・羽衣狐に殺されたことだった。伝えることを全て伝えて、竜一は気絶した魔魅流を背負い去つていった。ゆらも京都に帰つて行き、その後リクオに捕まり、今は庭の桜の木の所で話し合つてている。離れた場所で氷麗や青、三馬獸などが隠れながら見ている。

「リュウガ、お前、人を食つてたのか？」

「ああ、その通りだよ」

リクオの尋問に俺は素直に答えた。隠していてもしょうがないしな。

「なんでだ」

「影犬は元々人を食う妖怪なんだ。俺は我慢できるけど、もう一人のオレは無理みたいだからさ」

そう言うとリクオはもう一人の俺に変われと言つた。そして意識が変わると姿は獣化になつた。

「・・・お前も、リュウガなんだな」

リクオはしばらく見つめていたが笑いながら言つた。

『ケツ、今更氣付クトハ・・・鈍感ナ奴ダゼ』

「（おい、獣化！主にそんなことは言つな。）」

人型に注意されても獣化は気にせず、リクオに詰め寄つた。

『イイカ、俺ハ人ヲ食ウ事ハヤメナイカラナ！ソウデナイト、俺ハ

死ジマウカラナ』

しばらく沈黙が続いたので下僕の妖怪達が騒ぎ出しだした。

「（まことに。おい、じゅ『タダ、貴様一対スル思イハ、俺ハ・・・人型ト同ジダ』
「（・・・え？）」

「へ・・・・・

こいつは違う思いだと思っていた俺（人型）とリクオは内心驚いていた。

『貴様ガ何處ニ行コウトツイテ行ク。ナニシロ俺ハ影ダカラナ』
感動した。こいつもリクオに対する忠誠心は俺と同じだ。人のことについては必ず1日1個ということで解決した。その後、獣化は鬼胡桃に酒を持ってこさせ、リクオと盃をかわした。本人が言つた
――人型だけかわしたのはズルイ――――

と言つたけど、ただ酒を飲みたかつただけだろうと誰もが思つた。

「なかなかやりあるのう

月を眺めながらキセルで一服しているぬらりひょん。先程のリクオ達のやり取りをこつそり見ていた。かつて自分が影犬と盃をかわしたように・・・

「京都に、陰陽師に、羽衣狐か・・・」
「こんなことを思つてゐるうちにぬらりひょんは400年前のあのときの出来事を思い出していた。

時は――数百年前

京都は天下の往来を跋扈する魑魅魍魎どもで溢れていた――

第一十八話 新たなる関係（後書き）

ついに過去編です。一人の出会い方お楽しみに。

第一十九話 【過去編】 一人の出会い（前書き）

遅くなりました。だけど、それなりに長く書くことができました。
最後まで読んでください！

第一十九話 【過去編】 一人の出会い

戦国時代も終わりに近づいていく中、奴良組の勢力は更に増していった。今は京に出入りをするため牛鬼組のシマである捩眼山にいた。盃をかわした日から数カ月経つてので影犬は組の者たちと仲を深め、組の幹部になっていた。

「いじが捩眼山か」

「あれ？ アンタここに来たことないんだ」
影犬と話しているのは雪女の雪麗だ。

「京から出たあと、ずっとあの山にいたからな」

「ふうん。そういうえばぬらりひょん、今日遠野から一人傭兵が来る
んじゃなかつた？」

「ああ、昼に合流する事になつてているんだ。たしか、風の妖怪だが
ワシもよく知らねえんだよ。カラス天狗！ 今日のはどんなやつだ？」

「総大将がそんなのでどうするんです！？ 今日来るのは風の妖怪・
カマイタチです」

ぬらりひょんにカラス天狗が言つがここまで知つてているのはカラス
天狗だけだつたらしい。

「カマイタチか・・・・。認められるだろうか」

「うううううう！」

こつそり呴いた瞬間、突然強い風が吹いた。全員が驚いていると田の前に頭を下げた一匹の妖怪が現れた。

「ぬらりひょん様ですか？」

「ああ、ワシがそうじゃが・・・お前がカマイタチか？」
その妖怪は忍びの姿をして紫色で腰まで長い髪があつて、胸が大き
く、身長160？の女性であつた。

「はい。遠野から来ましたカマイタチです。どうぞ、よろしくお願
いします！」

「ワシが奴良組総大将のぬらりひょんじや。よろしく頼む」
総大將のぬらりひょんがカマイタチを受け入れたので幹部たちも自
己紹介をしたり握手したりした。幹部紹介の最後に影犬がカマイタ
チのもとにやってくる。

「か、影犬だ。よろしく」

そつけのない自己紹介なのでぬらりひょんが野次をいれた。

「影犬！せつかくなんだからもうと喋るよ。ほら、握手でもして
みろよ」

そう言って力マイタチも影犬に握手しようとする。しかしその光景
が影犬にとつて嫌な記憶が写つた。

——今日から妾の側にいるのじゃ、影犬よ――――

「（羽衣狐・・・・・はつ！）無理だ。俺にはできない！」

「え？」

そう言つと影犬はぬらりひょんの影に隠れてしまった。ぬらりひょんはその姿に呆れてしまつた。

「情けないやつだな。お前らも大変だな三馬獸」
三馬獸も苦笑いしながらカマイタチと話をした。

これが影犬とカマイタチの出会いだつた・・・

第一十九話 【過去編】 二人の出会い（後書き）

変な方ですみません……
次は戦い付きです。

第三十話 【過去編】 京の出入り（前書き）

夏休みですが、勉強があつたり宿題によつてあまり書けないかもしれません。

それでも頑張っていきたいです。

第三十話 【過去編】 京の出入り

京——

赤子を連れた女が町中を走っていた。女はある者から逃げるために走っていたが突然目に見えないものにぶつかった。

「！？と、通れない！？何もないのに・・・」

そう思い足をみると魚のようなものが足に絡み付いていた。そして周りに大量の妖怪が現れた。女は恐怖で動けなくなつた。

「うわああ・・ヒイツ。お、お願い。こ、この子だけは・・・」
通れないと思っていた場所にはぬりかべと三途魚が現れ、女は赤子の命乞いをする。

「よくやつたぞ。赤子の生き肝・・・食らえば百人力の妖になると
いつ。女を逆じやよろこべ、ワシの力となるのだから！」
その狼のような妖怪を先頭に妖怪たちが女性と赤子に襲いかかる。

女が覚悟した時、ぬりかべを斬りつけた奴良組総大将ぬらりひょんが現れた。

「ぬ、奴良組だああ、奴良組が出たぞおおおーー！」

「さあて今日も行こうか・・・お前ら妖狩りだ」
ぬらりひょんの言葉と同時に奴良組の妖怪たちは京妖怪に襲いかかつた。一番早く斬りつけたのは幹部の牛鬼だった。

「はは、やはりお前が一番の出しゃばりか。よこせ、えりまきにする」

ぬらりひょんは牛鬼が斬った狼の妖怪をもらう。決着はすぐについた。大半の妖怪たちは死に、残りの少数は仲間のことなど気にせず逃げようとした。だが彼らの目の前に笠をかぶった男が出てきた。京妖怪らはその男を知っていたので先程の女のように動けなくなつた。

「久しぶりだな、お前ら」

「か、影犬。お前・・・帰つて来たのか」

京妖怪たちが怯えているのを見ながら影犬は笠を氷獸に渡し、獸の姿に変わって京妖怪を食い殺し始めた。そして少し時間が経つた時に影犬は元の人型に戻つた。

「ひどい殺し方だな」

とぬらりひょんが影犬に言つた。笠をかぶりながら影犬は言つた。

「俺は奴らに裏切られたんだ。あいつらは笑つて俺を肩扱いしたんだ」

憎しみが影犬の手に伝わり、近くにあつたつぼを壊した。奴良組の妖怪たち全員が影犬の怒りを知つた。

「・・・影犬さん」

その近くを歩いていカマイタチが深く心配して見ていた。影犬を何とか助けたいと思いながら。

その後奴良組は再び歩き出した。

慶長年間・・・太閤秀吉の死後、霸権を握った徳川家は全国の大名に陣觸を発し大阪城を包囲。来るべき戦に備え、豊臣側は食いつめた浪人を大量にやとつたため京には立身出世をねらう男たちであふれていた。古来より妖たちの中心であつた京には野望に燃える若い妖たちもまた霸権を目指し終結していた。しかし、京の妖は他の妖より強さが上である。それにより他の妖たちは大きな力が必要だつた。逆に力弱き京妖怪も焦つていた。他の妖怪たちにも力を持つものもいる。そのために京妖怪たちももつと大きな力を求めていた。そのため妖怪たちは『生き肝信仰』をしていた。

『生き肝信仰』とは古くは中国の三蔵法師の生き肝（内蔵のこと）を妖怪たちが狙つた話があるよう赤子・巫女・皇女のように、より尊い命には妖の力を增幅させる力があると妖たちは信じ、それを求めたことを言つ。そのため夜になると京妖怪たちが『生き肝信仰』が行うため、町を徘徊し人間を襲つていた。

京に入った奴良組は『生き肝信仰』などには興味はなく、夜に徘徊している妖怪狩りをしながら京で生活をしていた。だが、毎夜しているわけではない。むしろ、たまにしかそんなことをせず酒をのみ、宴会をしている。

ただ一人の妖怪を除いて・・・

「浪人どもが巷にあふれています。おいまきや、中には赤子のほらわたがえぐり取られる事件が何件も報告されています」

一人の家来がある者に報告をしていた。

「そのような些事は報告せんでよい」

その者は大阪城主・豊臣秀頼の母、淀殿である。しかし彼女は大妖怪・羽衣狐であつた。家来が何かを言つてもとりえようとはせず、夜になつてある部屋で配下の幹部妖怪たちと総会をした。

「まさか——秀吉が死んで・豊臣・がこれほど早く滅亡への道を歩むとは思わなんだ。担いでゆくはずの秀頼があのようなでぐの坊では人間の天下などまわつてこぬ。我らの計画が、・力・がいるのだ・・・徳川の世になれば妖が住みにくい世になる事は間違えない。その前になんとかせねばならぬ」

そう言って羽衣狐は一人の部下から小型のつぼを受け取つた。そしてその中にあつた生き肝を食べ始めた。全てを食べ終わると優しくお腹を撫でた。

「生まれてくるこのやや子のために、もっと大きな力を、子の羽衣狐のために」

その後、配下の妖怪に多く生き肝を持つてくるように命令をして部屋から出た。そのまま空を見上げると月は雲に隠れていて、完全な闇であった。そしてポソリと呟いた。

「妾を許しておくれ・・・・影犬よ」

「まだ、足りないな」

そう言って影犬は道を歩いている。先程いた場所には京妖怪の残骸がのこっていた。そして奴良組のいる落西一島原に帰つてくると入口にカマイタチがいた。

「今日も……殺つて来たんですか？」

「……そうだ。悪いか」

「もう、やめたほうがいいんじゃ」「これは俺の問題だ。お前には関係ないことだ」「あっ……」

影犬はカマイタチも巻き込みたくないと思い、突き放した。彼は戦いでしか相手の思いが分からなかつたのをカマイタチは知らなかつた。それでもと思いながら追いかけようとすると突然影犬が止まつた。

「?なんでこんなにも騒がしいんだ?」

「え?あ、はい。実は先程ぬらりひょん様が瑠姫という女を連れて来たんです」

「ほう、瑠姫をね〜〜」

笑い顔で影犬は宿に入つて行つた。カマイタチもあわてて入つて行つた。

第三十話 【過去編】 京の出入り（後書き）

次は少し長くなるかも。
お楽しみに

第二十一話 【過去編】 羽衣狐と再会（前編）

早く書けました。

今回は少し悲しい話かも・・・

「まったく！ 総大将の考へてゐることは……分からん！」

「人間の女をこんな妖怪の集団の中に入れて酔狂な・・・
三馬獸とともに酒を飲みながら影犬は様子を見ていた。小妖怪たちは
は琰姫と遊んでいるが他の妖怪たちはぬらりひよんの行動に呆れて
いた。仕舞いには：後で肝を食うのか・と言う奴もいる中、ぬらり
ひよんの口が動いた。

「
璇姬」

「ハイ？」

「ワシと夫婦になろう」

———何？

酒を飲んでいたので思わず吹きそうになつたが何とかこらえた。そして周りの妖怪たちも騒ぎ出し始めた。カラス天狗と雪麗のやり取りが起きている中でぬらりひょんが再び琰姫に言つた。

「あんたは特別な存在だ・・・。ワシはずつとあんたを見てきたが
その思いはいや増すばかりじゃ・・・平たくいやあ、あんたに惚れ
た！瑛姫、ワシの妻になれ！！」

あまりのことに顔を赤く染めながら驚く瑠姫の姿を肴に影犬は再び酒を飲みだした。そしてぬらりひょんが瑠姫を屋敷に帰しに行つて、外で苦しんでいるカラス天狗を牛鬼と一緒に心配（？）していた。

「全く総大将は人と交わろうなどと、常識はずれなことをする」

「たしかにそうだな……」

「だが、それでこそ、みんながついてゆくのだがな」

「ああ、常識にとらわれぬ……あの人こそ魑魅魍魎の主になる器……！」

「そうだ。それが奴良組だ！！百鬼夜行となるまで大きくなつた！」しかし突然一人は顔をしかめる。あまりにも早く京に入ったことが不安であるからだ。

「いいんじゃないか？そんな事……」

「何？」

「今の奴良組を考えればな……当たり前のことではないんじゃないか」

そう言つて影犬は宿に入つていった。一人は・影犬は変わつた・と感じた。宿の上から様子を窺つていたカマイタチもそう感じた。

次の日、奴良組の妖怪たちは出入りの準備をしていた。先程牛鬼がぬらりひょんが大阪城に向かつたと報告したから。

ついに・・・この時が来た！！あの女を・・・羽衣狐を・・・殺せるときが！！

そう心の中で呟いた時影犬の側にカマイタチが寄つて來た。

「あまり・・・憎しみな心で戦わないでください」

影犬は疑問に思つた。なぜ、こいつは俺のことを心配するんだ？

「・・・ふん。分かったよ。お前も気をつけな」

影犬が初めて自分と話をしてくれたのでカマイタチは自然に笑顔になり、組の妖怪たちと一緒に大阪城に向かつた。

大阪城――

羽衣狐が琰姫と口を合わせようとした寸前、ぬらりひょんは自分が持つていた刀を握りしめながら羽衣狐に振りかざした。だが、それは京妖怪幹部らによつて止められてしまった。

「チ・・・・」

舌打ちをした瞬間に巨大な鬼が持つていた金棒を振り下ろした。ぬらりひょんは後ろに下がつたが、風圧によつて着ていた服が破けてしまつた。

「・・・何じゃ？侵入者か」

襲われたにも関わらず余裕な表情で羽衣狐はぬらりひょんを見つめた。その間に服の破ける音が響いた。

「・・・ヤクザ者か」

「ワシは奴良組総大将ぬらりひょん。」
「いつはワシの女じや。わり
いがつれて帰るぜ」

「なんと、妖が人を助けに？」

羽衣狐が驚いている中、京妖怪たちがぬらりひょんの周りを囲んだ。

「異なる事をする奴じや。血迷うたばぐれ鼠か何かか・・・・・・！？」

ド「オオオオオオン！－！」

突然城の中に大量の妖怪が出てきたので京妖怪達は驚いていた。だが、羽衣狐だけは違った。その百鬼夜行の中にはいるある妖怪を見つめた。かつて自分のそばに置き、恋をした妖怪・・・

「影犬！－！」

影犬は名前を呼ばれたので、笠を取り頭を下げ挨拶をした。

「久しぶりだな、羽衣狐。俺を追放して何年ぶりかな？」

「あの時は・・・妾が悪かつた。だが影犬よ、分かつておくれ！妾は本当に「もう、無理だ」！？」

話の途中で影犬はすでに獣の姿になっていた。そして・・・殺氣混じった声で言った。

「俺は奴良組幹部であるし、他の京妖怪共は俺を嫌つてゐるしむ」
そう言つてまわりを見ると他の京妖怪達はそれぞれ武器を取つていた。そして、一斉に奴良組に襲いかかつて來た。

第三十一話 【過去編】 羽衣狐と再会（後書き）

次で過去編終わるかな・・・・。羽衣狐と影犬——悲しい関係だ。

第三十一話 【過去編】 京・大阪抗争（前書き）

超久しぶりの更新です。今回はぬらりひょんも活躍する戦いです。
これから羽衣狐の会話は『』となります。

第三十一話 【過去編】 京・大阪抗争

羽衣狐との会話が終わる（？）とすぐにぬらりひょんの後ろに下がつた。すると先程、着物を破つた鬼が前に進み出た。

「我が名は凱郎太！！ 羅生門に千年住まう者！…」

「久しぶりだな凱郎太」

「そうだな裏切り者。貴様の仲間と共にこの技の名を冥土の土産に持つていけ！」

金棒を振りかぶつてそう言った。しかし冥土の土産か・・・つまらん奴だ。

「雷^{かづ}? 棒^{こんぼう}豪風^{たけかぜ}！！」

振り回した金棒の風圧で吹き飛ばそうとするが力マイタチが全員の前に現れて両手に持つた鎌を振った。

「奥義^{さうぎ} 斬風壁衝^{さんふうへきしゆう}！」

「なつ！？なあああああつ！…」

あっけなく凱郎太は死んだ。

「よくやつた力マイタチ。行くぞお前ら！邪魔する奴あ、たたつ斬る」

「うほ～いいぞ！！ 総大将につづけー！…」「いやうほー！ 出入りじゃあー！」

強そうなのを倒したことで奴良組の士気が上昇した。狒々、牛鬼、

「ソルなどの幹部たちも何か言っているのを聞きながら俺も戦いの舞台に向かった。

『何をしておる、お前たち・・・。妖としての格の違いを、見せてやらんか・・・!』

奴良組の総攻撃により羽衣狐が配下に指示する。その命令を受けて百鬼夜行の戦いとなつた。

「おい、影犬」

「ん? なんだ、ぬらりひょん」

「お前は雑魚の相手をしてな。ワシが、羽衣狐と決着をつける!」
一人動いてなかつた俺にぬらりひょんがそう言つてきた。大切な人を守るためにか・・・

「分かつた。だが、羽衣狐は強いからな」

「わーつてゐつて。それじや、行つてくる」

そして俺が雑魚掃除、ぬらりひょんは羽衣狐の前に進み出た。おかげしそうに笑う羽衣狐の腕の中には捕らわれの瑠姫がいた。

ぬらりひょんSHDE

『面白い、面白い余興じや・・・ここまで魅せる役者も珍しい。妾に刃向うた妖は、百年振りじや』

「ワシの女に、触んじゃ ねえ！！」

羽衣狐は人質を抱えている状態。だからこそワシは正面から向かつたが、羽衣狐の目は完全に妖怪の目になり、その着物の下から何本か尻尾が出てきた。そしてその尻尾は簡単に体を切り刻んだ。

「ガハ・・・・」

『ほう、この女に惚れているのか・・・この芝居は本当に奇想天外じや。この姫、妖を誑かす力を持つているのか』

そう言つて羽衣狐は瑠姫を口の方へ引き寄せた。

『ますますその生き肝、食らひてみたくなつたわい』

「瑠姫ええええーーーー！」

再び向かつていくワシは一瞬で血まみれになり、羽衣狐の尻尾はシユルシユルと音を立てて動き回つてゐる。

「ぐおつ・・・つ！」

『ほれほれ、お前の惚れた女を頂くぞ』

何度も何度も、ワシは向かつていくが無駄であつた。羽衣狐の尻尾は素早く動き、更に傷つける。羽衣狐は笑つていて余裕である。

『踊れ、死の舞踏を。妖の血肉舞うのが演目なら、それもよからうて』

「妖様――――！」

ワシが傷ついていくのが耐えられなくなつたのだろうか、瑠姫は叫んで暴れもがく。

・・・だが、羽衣狐はそれを許さない。

『おつと・・・駄目じや。能力は知つてゐるぞ・・・そういうのはつまらん』

羽衣狐はきつちり瑠姫を捕まえて、ワシに向かうのを阻む。瑠姫に能力を使わせないためか。

「なぜ！？ こんな無茶を！！私は・・・妖様がわかりません！！こんなになるまで・・・男の人は、皆そうなのですか・・・！？」

『カワイイことを言つのう、瑠姫・・・いいかえ？世の中には人も妖でも『カシコイ男』は大勢いるのだ。妾が愛した男はカシコイ男であった・・・』

羽衣狐は諭すように瑠姫に言つてゐる。だが、瑠姫はワシを心配そうに見つめていて、それに返答することはない。しかし少し顔を上げて見てみると、羽衣狐の顔は悲しそうに見えた。

『男を知らんな。妾の時は本当にカシコイ男じやつた。初めて知つた男が、あんなバカで愚直で・・・カワイイそうに。そして・・・それが最後の男なんじやからな』

羽衣狐の言葉が終わつた時に、ワシは態勢を立て直す。そして・・・

『瑠姫・・・ワシはお前の目に・・・今どう映つてる？ やはりそいつが言つのように、バカに映るか・・・？』

ワシは瑠姫に質問する。その質問に瑠姫はすぐにフルフルと首を振つて、否と答えた。

「あんたのことを考へるとな・・・心が・・・綻ぶんじや・・・」
体中血だらけになつてゐるにもかかわらず、ワシは笑いながら瑠姫に語りかけた。

「例えるなら『桜』。美しく・・・清らかで・・・儂げで、見るものの心をやわらげる。あんたがそばにあるだけで、きっとワシのまわりは華やぐ。そんな未来が・・・見えるんじゃ。なのに・・・あなたは、不幸な顔をしてた。ワシが、あんたを幸せにする・・・どうじや目の前にいるワシは、あんたを、幸せに出来る男に見えるか？」

話を聞いて瑠姫は涙を流して震えている。

「フハツ、見えんだろうな・・・ワシはあんたにカツコイイとこを見せつけて、ほれさせにやーーいかんのにな・・・」
そして、刀を上に上げて完全に立ち上がる。

「あんたに溺れて、見失うとこじやつた。そろそろ返してもいいわ、羽衣狐」

目を妖の目にして、雰囲気が今までとは遙かに違つようとした。

『（尻尾が反応せん。ここにいるのに、見えなんだ）』

羽衣狐がそう思つた瞬間にワシは・明鏡止水・で羽衣狐の目の前に行き、刀を振りかぶつた。しかし、一寸の差で、刀が尻尾に飛ばされる。

だが、その背に隠し持つた刀でもう一度羽衣狐に斬りつける！

『同じことを！』

すでに余裕がなくなつた羽衣狐の尻尾が、またワシの刀を弾こいつとする。しかし、ワシの持つてゐる刀は、瑠姫が持つてゐた退魔刀だ。羽衣狐の尻尾を軽々と切り裂く！

『何！？』

そしてそのまま、羽衣狐の顔を深々と斬りつけた。それにより瑠姫は解放された。

影犬 SIDE

「本当にやりやがった・・・」

影犬が驚くのは仕方なかつた。今まで羽衣狐を傷つける者なんていなかつたからだ。

「ガツ、ハ・・・が・・・ぐう・・・! ? な、なんじや・・・ ! ? その、刀は・・・』

「ハア、ハア」

ぬらりひょんが退魔刀で斬りつけたことにより、羽衣狐は苦しみながら酷く狼狽している。

天井を突き破るほどであった。

『おおおおおおおおおおおおおおーーー！　ぬ、ぬけていくーー？　う、これは・・・妾の妖力が抜けたゆくーー？』

羽衣狐から抜け出た妖力は止まらず、遙か天空の彼方に昇つていった。羽衣狐はそれを信じられないような顔で見つめて、慌てて追いかけようとする。

卷之三

京妖怪たちも信じられないようにそれを眺め、困惑のセリフを吐いているな。

「瑛姫ー！」

「総大将！！ ここはオレ達にまかせろ！！」

ぬらりひょんに言つたのは、助けだした瑛姫をすぐに保護した牛鬼である。

「あんたはあいつを追え！！ とどめを・・・刺しにいけーーー！」

「・・・牛鬼・・・！！ まかせたぞ！！」

牛鬼の言葉を聞いたぬらりひょんは羽衣狐を追つていく。

「まで！！ 行かせんぞ！！」

だが、それを京妖怪が許さない。鬼童丸を筆頭に、ぬらりひょんを追おうとする。だが、俺たちがそんなことを邪魔しないとでも？

「おつと、あんたらの相手は・・・オレたちだぜ？」

一ツ目を先頭に、奴良組の面々が京妖怪の行く手を遮る。周りを見渡すとぬらりひょんが羽衣狐を斬つたことにより、奴良組の士気が上昇しているな。

「でもなあ・・・お前らだと地力が、違うんだよ・・・」

そう呟いて俺は獣化から人型になつて一つ目たちの前に出た。

「鬼童丸・しうけら・大天狗・茨木童子・狂骨、出てこい」

憎いやつらの名前を言つと、5人が殺氣を出しながら前に現れた。そして茨木童子が俺に噛みついた。

「ああっ！？なんか用か、裏切り野郎」

「ふつ、この場で決着をつけるのはどうかな？」

「…………いいだるが。ワシらもお主を切りたいと思つていたんじや」

大天狗が言つた瞬間に茨木童子が俺に向かつて突進してきた。その後に続き、他の連中も向かつてくる。俺の復讐はここで終わらせる思いで爪を振つた。

ぬらりひょんSHIDE

『お、おのれえええ・・・おぬしら、許さん。絶対に許さんぞ。呪つてやる！呪つてやる！ぬらりひょん！妾の悲願を潰した罪・・・必ずや償つてもらうからな。おぬしらの血筋を未來永劫呪うてやる、おぬしらの子は孫は！この狐の呪いに縛られるであろう！』

ぬらりひょんと花開院家に呪詛を吐きながら、羽衣狐は上空がなたに退散していった。

「君は 譬魅魍魎の主になつて・・・何がしたい？ 徳川の世は明るいで・・・今よりもっとな。闇は 確実に消えてゆく。この先・・・妖には生きにくい世になる」

秀元はワシに問うてきた。羽衣狐を倒して魑魅魍魎の主となつたら一体どうあるのかと。

「・・・失われてゆく闇 んなこたあわかつてゐる。だからワシは、消えてゆくかもしけん・・・そいつらの為に主となるんじや」

「じゃ

「妖を……守る為：か？人の行いを認め……妖の世界も守る。“共生”やな……それはムズイで」

「そうでもないさ。総大将が……無敵になりやあいいんだからな」
ワシが無敵になつて、誰にも邪魔させなけりやいい。うん、ワシの言葉を聞いて秀元の目が微妙に開いてる……なんか面白いな。

「妖様……！」

「よ……琰姫！？な、何故ここに……？」

声がした方を向いて見ると、琰姫が息を切らして屋根を登つていた。何で危ない真似するんじや。

「おケガを……あ！？」

「おい……」

最後まで言い切る前に、琰姫が足を滑らせる。ワシは急いで手を伸ばし、琰姫の伸ばされた手を掴む。そしてそのまま琰姫を胸に抱き寄せた。

「琰姫……」

「妖様。琰姫は……心配しました。私に……おケガを治させて下さい……あなたの側で……この先もずっと……」

「よ……ようひめ……」「ハイ……」

ワシと琰姫は、互いに見つめあう。そんなワシらを見て、秀元と

禿兄が何か言つてゐるが・・・全く聞こえない。ワシの耳には、瑛姫しか映らなかつた。そして瑛姫をきつく抱きしめる。

「何をしていんですか、総大将。さつと床りましょ」

「チツ、しょうがねえなあ」

牛鬼に注意されて瑛姫を姫抱きにしてワシリは屋根を突き破つて下に降りる。

「いて・・・」

「キヤ・・・」

「総大将・・・瑛姫のこと、もつと考えて」

少し強引過ぎたじやろうか、屋根を壊したことによつて砂ぼこりが凄くて前が見えない。さつきの部屋に降りたはずじゃが・・・

「・・・ん? 音がねえな

屋根から色々と落ちてくる音以外、部屋で物音がしなかつた。普通なら誰かの声があるはず・・・そして、砂ぼこりが消えたら・・・

・

「なつ・・・何じや、これは!?

ワシはその場の光景に、目を疑わずにいられなかつた。その部屋の妖たちは敵味方同じように震えている。互いの中心には京妖怪の幹部である奴らが倒れていて、血だらけの姿になつて立つている影犬がいた。

近くにいた雪麗に聞くと、影犬が因縁をつけるため幹部らと一緒に戦つたそうじやつた。

「よつ、総大将。俺の因縁はここで消えたよ・・・」

そう言って影犬は静かに倒れた。

第三十一話 【過去編】 京・大阪抗争（後書き）

次で過去編は終わります。
だけど、次は遠野編ですね～。どうしようかな？

第二十二話 【過去編】 今へと繋ぐ（前書き）

ついでに過去編完結です！！

長かったと思ひついの君……京編はもつと長いから

第三十二話 【過去編】 今へと繋ぐ

羽衣狐との戦いから数週間が経ち、江戸に帰る」となって今は花開院本家に入つて宴会中である。ぬらりひょんは秀元と話をしに行つてゐる。影犬の体の傷は酷かつたらしく、特に鬼童丸達の戦いで爪が折れたので、包帯でぐるぐる巻きのミイラ状態だ。

「こぐらなんでも巻きますがだ……」

「ダメです！ 完治するまでそのままでいてください……！」

思わず舌打ちが出そうになる。カマイタチはぬらりひょんから監視役を頼まれたのだ。

しかし、本当はカマイタチがぬらりひょんに自ら監視役になりたいと志願したことを影犬は知らなかつた。

「「」、「」は花開院本家だぞ！？ なぜ妖が入りこんどるんじゃー——！？」

秀元の兄が驚くのは仕方ない。秀元に招待されたんだが、このハゲは知らなかつたらしい。小妖怪にバカにされている。

「くすくす。カリカリしてたらハゲるよね——」

「くすくす。ね——」

そんなハゲを、秀元の式紙すらバカにしている。こいつらには意志があるらしいが・・・秀元の奴が言わせてるんじゃないかと思つ。いやつだ。

「秀元おお————！ てめえか————！」

ハゲは頭に血管を浮かばせながら、自分の弟の名前を叫ぶ。「うるさいやつだ。

「まあまあ、座れよ」

頭に鉢巻きつけた小鬼が手を振つて誘つ。だがハゲは座ることはない、ずっと立つたままだ。

「お前、聞いたぜー。直系で28年修行したけど、当主になれなかつたんだって？」

「弟に越されたとか」

「これ天然ハゲ？」

「剃髪だ！ いいから出てけーーー！」

奴良組の小妖怪共は、わいわいとハゲを弄りにかかる。まったく、静かに飲むために庭の方に出た。その後を力マイタチと三馬獸がついてくる。外は月の光で明るく照らされていた。

「今日は満月か・・・そういうやお前らを仲間にしたのもこんな時だつたな」

三馬獸に聞くと、彼らはうれしそうな顔で答えた。

「はい。こんな日ありました」

「我々は元々のら妖怪でしたので、誰にも頼れることができなかつたのです」

「けど、影犬様がそんな俺たちを助けてくれたんですねえ」
三馬獸が感謝の気持ちを込めて話しだした。隣で聞いていた力マイタチは笑顔になつて・・・

「影犬さん。私はこれからもあなたの側にいますから……」
まつすぐな目で影犬を見つめた。

「…………勝手にしろ」
そう言つて酒を口に運んだ。すると戸が開き、魑魅魍魎の主・ぬらりひょんが現れた。

「いくぜてめえらー！京はしちゃだ。ワシの背中に並んで……ついでこい！！」

こゝしてぬらりひょんのによつて妖の世界は動く。影犬とカママイタチも長い年を経つて子を成す。

そして……ぬらりひょんの孫と影犬の子は再び——陰陽師と共に妖世界の運命の歯車を廻す……！

おまけ

江戸に帰る前に影犬は1匹の京妖怪とあつた。

「これを・・・羽衣狐に渡しておいてくれ、しようぢやうぢやう
そして渡したものは髑髏の形をした首飾りであった。」

「なぜ・・・私なんだ？」

「昔の親友だつたからだ。頼む・・・」

「いいだらう。黒き犬に闇の聖母の導きがあるようだ

そしてしょつかうは、深き闇の中に消えていった。

第二十二話 【過去編】 今へと繋ぐ（後書き）

影犬としょうけらが親友でありました。
次は遠野編です。

第三十四話 遠野妖怪（前書き）

遅くなりました。

なかなか時間がなくて・・・頑張っていきたいです。

第三十四話 遠野妖怪

第六の結界——龍炎寺

「まーるたーけえべすにおしおーいナ——あねをうらつかくたこにしきー。しあやぶつたかまつまんじょう せつたぢやうぢやう、うおのたな」

久しぶりに歌を聞いたの。妾が四百年間ぶりにこの世に甦つてみたら、この世はつまらない世の中になつていたわ。

「（ゾクツ）！？貴様！！妖か！？」

陰陽師のあの驚いた顔は面白いな。妾に仕えている狂骨の娘も笑つておる。

「あ・・・？今・・・私を畏れたわ・・・？」

そして狂骨が畏を発動して、得意の蛇を使つて陰陽師の田玉を奪い、あつさり殺した。

「あ、羽衣狐様。じづき・・・六番目ですけど陰陽師の・生き肝・です」

『狂骨の娘よ。お前父親よりみどりあるのう・・・』

そう言つて長髪を振り払つて空を見上げた。空は黒い雲に覆われていた。

『（また、お前に会える。今度こそお前を・・・影犬・・・』

リュウガ side

「気持ちいい——」のままどこかへ流れで行きたいなあ~~~~~」

「それは危ないぞ。河童」

陰陽師との戦いの後、しばらく暇な時間が続いた。やることと言えば人間を狩つたり、自分のシマで屋敷を建てることだった。その時、リクオがボーーとしているのに気がついた。

「気になるんですかい？あの子のこと」

河童がやらのことだと思って聞いた。あいつは京都に帰ったからな。

「……京都で一体何が起こつてんだろう？花開院さんのお兄さんは……やつら（……）が動き出したって」
そのことか……たしか羽衣狐だけ？父上と何か関係がある妖怪だつたな。

「奴良くん！家にいったらこことだつてきいてね！――」

「きつ、清継くん！？」

突然清継がやつてきたから慌てて河童を川の中に隠れさせた。危ないところだった。その後、清継が京都に行こうと言つてリクオがぬらりひょんと相談してから行こうと言つたので、冷やしておいたスイカを持ってリクオとともに家に戻つた。

「やれやれ。やつとあつたわい。そーじゃそーじゃ、煙管は2本あつたんじや。失くしたのは大阪城で拾つたビーでもこいやつじやつた。じつのは・・・・・」

探していたものを持ちながらぬらりひょんは仏像を静かに見つめた。

「あ、おじいちゃん」

「叔父上」

「なんじゃい、リクオ、リュウガや」

なんかいつもと違う感じだなと俺は思い聞こいつとしたが、リクオの方が先に言つた。

「じいちゃん・・・ボク、京都に行こいつと思つ。あの陰陽師の娘・・・知つてるだろ? なんか・・・京都で悪いことがおきてるらしいんだ」

リクオがそのままの勢いで話を続けた。

「それも妖怪がらみで、ボクが行つて・・・あの娘を助けてあげたいんだ! ! !」

「死にてえのかお前?」

その瞬間、ぬらりひょんの姿が消えた。リクオは少し経つて叔父上に気がついた。

「・・・・・チツ、ビビリおつて」

すぐそばにぬらりひょんがいた。やばいな・・・全然気がつかなかつた。そして叔父上はリクオを回し蹴りで池の方に飛ばした。急い

で行ひうとしたがその前にぬらつひょんが立ちはだかり動けなかつた。

「そこで頭を冷やせリクオ。今のお前じやあ京へは死にこむくよひなものじや・・・・」

池の方へ歩きながらぬらりひょんは話し続けた。

「四国を倒して天狗か？てめえの力じや・・・下端にもやられるぞ」

ザパアアアアアツ

「なにをしやがる・・・べそじじい！やつてみねえとわからんねえだろーが」

「・・・・ためしてみるか？」

マズイマズイ、俺はどっちに味方すればいい？もう心の中はそんなことしか思つていなくて、途中でやつて来たカラス天狗の声でも俺の耳には聞こえなかつた。

しばらくの間ぬらりひょんとリクオが戦つていたが、ぬらつひょんの技（？）でリクオが倒れた。

「今のお前じや京都に行つてもどーしよつもない。わかつたらねでる」

「叔父上。今のは一体何ですか？」

聞ひうとしたらリクオが再び攻撃しようとしたが、ぬらりひょんに

刀で池の方へ吹き飛ばしてしまった。今度はすぐに動いてリクオを助けだした。

2日後――

あれよりリクオはずつと眠つたままだつた。リクオがいる部屋には俺と氷麗、毛倡妓、茜がいた。

「まだ・・・起きないの？」

「もう2日も寝たつきり・・・。」のまま2度と目が覚めなかつたらじりしそう・・・」

「そーいえば清十字団が今日来たわよ。一週間後に京都に出発！！
だつて――」

「そんなことよりリクオ様よ！――総大将は何を考えているのかしら。実の孫をこんな目にあわせて・・・ねえ、リュウガ様！」

「うん。それもあるのが・・・・」

それよりもぬらりひょんがその後、誰かを呼ぶと言つてたな。

ガラツ

「おい――お前ら、リクオ様をかくまえ
突然首無が息を上げながら現れた。すると茜が怒りながら立ち上がつた。

「ちょっとーー！兄様に向かつ 「静かにしな茜。誰か来たようだ」え
つー？」

すると2体の鬼の顔の妖怪がやつて來た。予想通りだな。匂いです
ぐに分かつたからな。

「弱い子はいねがーーー。弱い子はいねがーーー」

「くんくん・・・人間くせえなあーーー？」

2体の鬼顔の妖怪はリクオをみると連れて行こうとした。氷麗が止
めようとしたが、逆に手に持っていた包丁を畳にたたきつけた。3
人は吹き飛ばされたが、俺は茜を抱えて外に出た。うん？何故らか
茜の顔が赤いな・・・・・そんなことよりあいつらは。

「それじゃ・・・・・確かに預かりましたぜ。あんたのお孫さん。
ワシら・・・・・奥州遠野一家がなーーー！」

彼らが門を出た後、俺は牙魏をすぐに呼んだ。

「お呼びでござりますか？リュウガ様」

「今すぐ部下を使ってアイツらの居場所を探れ。これは・・・他の
奴には内緒だ」

「御意ーー！」

牙魏は頭を下げて走つて行つた。なかなか面白くなりそうだ。

第三十五話 【遠野・物語】京妖怪・鬼童丸

リクオが遠野妖怪に連れていかれた後、三馬獸を捕まえて遠野について聞きだした。

「なるほど、遠野には強い奴がたくさんいるのだな」

「はいリュウガ様。遠野は特別な・・・ってまさかりリュウガ様！？」炎獸が何かに気づくように俺に質問してきた。それに対して笑いながら答えた。

「行つてみようかな？遠野へ」

翌日、俺はクグツ達に酒や食糧を荷車に乗せさせた。これらの物は無論自分の屋敷から持つてこさせた物だ。ぬらりひょんにも説明したし留守番も茜たちに任せてあるから準備は完了した。

「兄様。どうか・・・気を付けてください」

「心配ないよ茜。帰つてきたらまた剣術の稽古じょうな茜は顔赤くして返事をした。

「それじゃ、行つてへる。留守番とシマの守つ頼むぞー！」

「――――解しました。リュウガ様！――」

護衛のクグツを20体連れて行き出発した。

しばらく休みなしで歩き続けたおかげで1日半で遠野に着いた。遠野に近づくとあとをつけていた牙魏の部下が現れ、道案内をしてくれたおかげで迷わず里にたどりつけた。

「「」がね～・・・。見た限り何かに守られているな

「オイ、人型」

突然獣型に声を掛けられて驚いたがすぐに冷静に話をした。

「何だ突然？」

「今スグ俺ト変ワリナ。俺ナラコンナ畏、破レルゼ」

「分かった。任せるよ」

人格が変わると同時に姿も変わった。俺の中にいるもう一つの俺になつたからだ。

「フン！コンナ畏ゴトキ何トモナイワ。黒影狼銳牙！」

俺の技であつさり断ち切つた。ぬらりひょんとリクオの戦いで見たやつもなかなか面白い畏だつたな。

そんな事よりさつさと赤・・・何とかにあいさつして暴れるかな

うん？川の近くで誰かいるな？

リクオ side

「・・・昔、じじいにきいたことがあった。ぬらりひょんってのは何の妖怪なのか・・・って」

京妖怪2匹を倒した後にリクオの姿が少しづつ現れた。

「じじいはカツコつけてこう言った。ぬらりひょんと・鏡にうつる花、水にうかぶ月・すなわち・鏡花水月・！夢幻を体現する妖・・・つてな・・・」

京妖怪の鬼童丸はぬらりひょんの認識をズラし畏を断つことに危険性を感じた。

「ム、折れちまってる。さすがに木の棒で妖怪倒すのは無理か・・・」

「畏をとくなリクオ！！」

イタクが大声で叫ぶが遅く、鬼童丸がリクオの近くまで来て刀を抜こうとしていた。つぶすなら今・・・つと思い襲つて来たのだ。誰もが間に合わないと思ったその時、突然鬼童丸の体に何かがぶつかり吹っ飛ばされた。すぐに周りを見渡すと巨大な獣がいた。

リュウガ side

リクオがやられる前に俺は駆け出した。そしてそのまま刀を抜こうとしている老人をぶつ飛ばした。奴が倒れているうちにリクオに近づいた。

「大丈夫力？主ヨ」

「リュウガ！？何でお前が此処に！？」

「アン？心配ダカラツイテキタンダヨ・・・（本当ハ暴レタイダケナンダガナ）」

本音を隠してリクオを守るように前に出て先程の老人を見た。随分と驚いているがそんなに俺が気になるのか？

「貴様は影犬！…なぜ、此処にいるんだ！？」

老人が俺の姿を見てそう叫ぶ。影犬って親父殿のことだらうな。だとすればこいつは京妖怪か！？

リクオに聞くと「ああ、こいつらは京妖怪だ」と言つたから間違いないな・・・

「俺ハ影犬組二代目頭領リュウガダ！…アンタ京妖怪ダロ。・・・
ナラ親父殿ニツイテ知ツテミタイダナ」

俺が殺氣混じりの畏を発生させた。そこにいたリクオや鎌を持った妖怪に京妖怪、後から来たクグツ達やそのほかの奴らも身震いした。しばらく経つて・・・・・

「・・・私のやることは遠野を全滅させることではないのだよ。だが・・・ぬらりひょんの孫に手を貸したことはおぼえておく。奴良組とつるめば・・・花開院のように皆殺しだ！！」

鬼童丸の言葉にリクオが驚いているな。それにしても皆殺しね。

「一週間以内に京は、陰陽師と共に・・・羽衣狐様の手に落ちるのだ！そして影犬の子よ。必ず貴様を殺す！！」

そう言って部下を連れて里から去つて行つた。さてと一次に起きたことは決まつている。

「お前・・・・・何者だ？」

鎌を持つた妖怪が俺に質問した。それを、リクオが慌てて制した。

「待てイタク！…そいつは俺の義弟だ」

「 「 「 「 「 なつ、何～～～～！？」「」「

その声は・・・遠野の里全体に響くへりだつた。

第三十五話 【遠野・物語】京妖怪・鬼童丸（後書き）

結構体育祭の練習で時間がないのです。
それでも早く書きたいと頑張ります！

第三十六話 【遠野・物語】鬼發と鬼憑（前書き）

頑張りました。

最近は学校であまり良くないので、ひさひさで『仮分を晴りして』いるのですよ～～。

リクオの説得によつてイタク達の誤解を解くことができた。そして河童に案内されて屋敷に着いて遠野妖怪の大将・赤河童の前に正座する。

「はじめまして。俺はぬらりひょんの養子で妖怪・影犬とカママイチの子、リュウガです」

「ほお、その髪の色。あいつにそっくりだ」

この髪の色つて母上の事か・・・・

「おこーなぜ母上のこと知つていいんだー!?

「知つてるもなにもカマイタチはこの遠野出身の妖怪だからな。知つて当たり前だ」

そうだったのか・・・此処が母上の故郷なのか。

「では、ぬらりひょんの孫と同じ見習いの仕事をやれよ」見習いって・・・リクオもやらされているとか、面白いな。

「それじゃ、我が主を特訓してくれているお礼を・・・」

そう言つてクグツ達が持つてきた酒や食糧を渡した。酒が好きみたいな赤河童はすぐに飛びついて来た。

「おお!これは有り難い」

屋敷を出てクグツ達を引き連れてリクオのいるところへ向かつた。

たくさんの大木が立ち並び、その真ん中にはまたもや巨大な切り株があつた。

現在、そこでリクオと土彦が戦っていた。もちろんそれは命懸けのものではなく互いの力を高めるもので遠野では日常的に行われているものだ。

「此処が実戦場か・・・なかなかの所だな」

『（人型 最初二俺様カラヤラセロヨ）』

「ダメだ。1日交代で俺からだから」

俺の言葉に獣型はしぶしぶ納得した。切り株の上に行くとリクオが気がついた。

「よつーお前もやりに来たのかリュウガ？」

「はい。主がいるところに影がなくてはいけませんから。しばらく俺もやらせてもらいます！」

隣で見ていたイタクが俺に近づいてきた。

「それなら今からお前の力を見てやる。すこしかかつて来い」
リクオと土彦が下がり、イタクの後ろについていき切り株の上に立つ。するとそこにいた他の妖怪も集まってきた。

「お、新人さんとやるのかイタク？」

話しかけてきたのはあまのじゃくの淡島だ。親が天女と鬼神らしく
昼は男、夜は女の妖怪らしい。

「ああ。まずはどれだけ畏使えるか見てやる

「じゃあ、いくぜ」

影の中から鎌を取り出して奥義 殺戮風の舞を繰り出した。イタクは後ろに下がり刃物になつた風から避けようとする。けど、そんなんじゃ俺の技は避けられないぜ。

「・・・・シグ、畏の発動、『鬼發』・・・・・の移動！・『鬼憑』！・妖怪忍法レラ・マキリ！」

うん？この感じは・・・・・畏が鎌に集中したようだな。その鎌は思いつきり投げ飛ばされた。

ドンッ！…

向かってくる鎌を避けるために奥義 風壁衝で防ぐとするが一部がやぶられ、俺の顔にかすり更にそのまま周りの大木を破壊した。

「ヒヒヒヒヒ、やりすぎだあ～～～イタク～～～

「まーたりクオの時と同じよつに実戦場を壊す気か？」

鎌がイタクの元に戻つてくる。

「畏を断ち切る……畏をやぶると言つてもいい。畏をやぶるには・・・氣合いや氣迫のたぐいでしかなかつた。自らの畏を具現化し技として昇華せることだ。畏を以て畏をやぶる…これが妖怪の歴史の必然で産み出された対妖怪用の戦闘術・・・これが鬼憑だ」

「大丈夫ですかリュウガ様！？」

クグツ達が心配して駆け寄つて來た。俺は平氣な振りをしながら奥義 療しの風で傷を治した。

「いいね。面白いなそれ。必ず手に入れてやるぜー！」

「よし！…次はこの淡島の鬼を見せてやるひつ。さあやるだ

「おいおい！次は俺だらうが」

その日はリクオと共に鬼憑の練習をした。もちろん見習いの仕事はやらされたよ・・・・・ハア〜。

第三十六話 【遠野・物語】鬼發と鬼憑（後書き）

次で遠野・物語は終了です。

いよいよ京編です。羽衣狐とコウガの間をどうしようかな・・・

第三十七話 【遠野・物語】遠野風来抄（前書き）

少し短いです。

第三十七話 【遠野・物語】遠野風来抄

「そうだ。鬼發を持続させる。戦闘中は決して解くなよ」
あれから3日が経つた。リクオの鬼發『鏡花水月』はほぼできるようになり、俺も獣型も遠野に来て強くなつた感じはした。クグツ達20体も稽古したから他の奴らより数倍強くなつた。

「ピュイイーーー。リクオやるね」

「ああ、これなら主も京都に行けるかもな」
戦い方を見て俺が呟いた時だ。

「大変だぜ、リクオ！」

淡島が血相を変えて実戦場に飛び込んできた。

「京都方面に行っている遠野モンから連絡があつた。陰陽師は壊滅だ！京都が・・・・羽衣狐の手に落ちるぞ！」

その状況によつてリクオが里を出ることを決意した。
俺はすぐに帰られるように準備をした。リクオは大将・赤河童に御礼を述べに行つた。

『ワザワザイカナクテモ・・・・』

「それがいいところじゃないか」

その後リクオが戻つて来たのすぐに出発した。里を出る前まではリクオの顔が名残惜しそうであつたが、それはすぐに変わつた。

「ああ、頼む！京都の妖は相当強えみたいだ。俺は戦力が欲しい！おめーらが俺の百鬼夜行に加わりや最高だ！」

「おいおい、リクオ・・・」

「まあ、素直な子・・・」

淡島や雨造などが、どうすると顔を含ませていてる光景に苦笑しかけた。イタクは後ろの方にいることが分かるけどな。

「イタクは来てねえか」

「常に畏を解くなつて言つてんだろ」

「相変わらずだなイタク・・・」

そう言つて俺は攻撃しそうなクグツ達を止めさせた。そしてイタクもついて行くことが決まった。

そしてリクオが腰帯に差していた棒切れ『多樹丸』を里を包む畏に向かつて勢いよく振り上げた。

「いくぜ。さよならだ、遠野！」

里の畏が断ち切られた瞬間にリクオは人間に変わった。

「仕方ないな・・・」

人になつたりクオを背負つていつたのは言つまでもない。

第三十八話 帰還！いざ京へ（前書き）

いよいよ京編に突入ですので、楽しみにしていた人は喜んでください。

羽衣狐を少しふりマスかも・・・・。

第三十八話 帰還！いざ京へ

奴良組本家——

ド「オオオオオオオン

「！？なんじや～敵襲かーー！？」

「あれ！？」

「ありや・・・リクオ様！？」

「何！？」

「ホントだ・・・リクオ様が」

「帰ってきたあ！！」

すごい驚きだな・・・

少し心の中で唖然したがすぐに消えた。ついでにリクオの事を心配していたからな。

「とにかく奴良家到着だぜ！！」

「おいリクオ。てめーが遅れ気味だから」

「ふん。広いじゃないか」

イタク達がそれぞれリクオにタメ口を言つていると黒田坊が注意してきた。

「リクオ様、リュウガ様おかえりなさいませ……」の者達は！？奴良組以外の妖怪は本家に原則入れませんぞ！！」

「黒、お前もカタイ奴だな。眞面目すぎるや」

「しかし、リュウガ様！」

「そうそう、リュウガの言う通りだぜ。坊さんよ」

その後、黒と淡島の言い争いが始まつて他の連中も何かし始めた。
俺が呆れていふと二つの声がした。

「兄様……」

「リュウガさま……！」

振り返ると茜と力二坊主がやつて來た。近くまで來ると茜が勢いよく飛びついて來た。よく見ると茜は涙目になつていて、優しく頭を撫でてやつた。

「リュウガ様。あちらで炎獣殿が待つてます。すでに出入りの準備は整つてゐるで」

「そつか……分かつたすぐに行く」

リクオはぬらりひょんのところに行つちゃつたし……今回の出入りの数を考えないとな。

茜と力二坊主に案内されると裏の方で三馬獣や蛇帯、牙魏、鬼胡桃などの幹部とその配下の妖怪がいた。

「リュウガ様。勝手ながら決めてしまつたことをお許しください」

「別にいいよ。やつてくれてありがとう。……でどんな結果に

なつた？

むしろそのほうがよかつた感じだ。いまさら決めると時間が掛るしな。三馬獣が話し合つて幹部と一つ目狼20体、力二坊主一家から4体、クグツが70体の約100人が今回の出入りに出ることになつた。

ちなみに留守番の奴らはシマの手帳をすりとこになつてこるみたいだ。

「それじゃリュウガ様。俺たちに号令してくださいせ・・・」

「ああ」

雷獸に言われて俺は前に出た。出でくると先程まで騒いでいたのが
すぐに静かになつた。なんていうか考えて、それが思いついて声を
出した。

「今回の出入りはかなり危険な出入りだが、みんな・・・・・俺についてきな！全力でたつぷりと暴れまくろうぜ！！」

「……………」

全員が大声を上げた。よほど待っていたのかすぐに暴れそうな奴もいた。途中から来たりクオは驚いていた。

「・・・すげえなお前の部下はよ」

「 そうだよ、最高な仲間ですよ。そろそろ行きますか主」

「おつーあれに乗ってな・・・」(ヤシヤー)

何故らかリクオが笑つてゐるのか分からなかつたが空を見上げると
すぐに分かつた。

巨大な船と小型な船があつたからだ。どうやらぬらりひょんが呼んだらしい。獣型は嫌な声で言つた。

『乗り物は嫌いだ！』

「・・・・・しばらくは寝ていな」

そういうて船に乗り込んだ。羽衣狐のいる京へむかつて進んだ。

羽衣狐 side

妾は百鬼夜行を率いて相剋寺を攻め込んでる。だが、今日の前に四百年前に妾を封じた憎つき陰陽師がいる。

「その顔・・・忘れはせんぞ。四百年間、片時も忘れはしなかつた・・・」

「羽衣狐か。これはお久しう。えらいカワイらしい依代やなあ・・・」

小娘が出した術から骸骨陰陽師と花開院秀元が現れおつた。

「どうや？ 人と妖の四百年ぶりの再会を祝つて、盃でも酌み交わしたりは・・・」

秀元の誘いに、妾は無言で返す。誰でも予想の結果と云つのに愚かな奴じや。

「・・・しないか、やつぱり？」

「どういう小細工だ？ 人の寿命などせいぜい八十年。四百年後の未来で再会など、ありはしないのだ」

あの陰陽師は四百年前に死んだ人間のはずだ。それがどうして?しかし奴の体を見て気がついた。

「…? そうか。これはお前らの術か…・・四百年前の妾をとらえたのも…・・」

「そりや。」これが召喚式神・破軍…! キミを破滅に導いた陰陽術や破軍…・・・それが妾をとらえた術か。

「妖の領分を越えて…・・・なにがしたいんや羽衣狐」
その時、辺りが突如白い煙が覆った。また小娘の術か。

「君とやつても勝てん。」こは退かせてもらひで? 狐ちゃん
まったく掴みどころがないやつだ。まあいい、こまま封印を解き
に行こうとすると一人の女が妾の前に出てきた。

「なんじや お前は?」

「私は花開院林。けいかいいんりんあなたが何しようか知つているわ」

「ほう、ならば聞こう。知つてどうするつもつだ?」

この女は中々強い感じがする。すぐに殺そうとしたが少し聞いて
みたくなった。

「残念だけど、あなたが会いたかつた妖怪・影犬は私の弟が滅した
わ」

「…? なんじやつ・・・・と」

影犬が死んだ? あんなにも強かつた影犬が…・・死んだとは。林
とか言う陰陽師は妾を倒すと言つて逃げていった。そんなことより

影犬が死んだことが妾の頭から離れなかつた。

また会えると思っていたのに・・・。いつしか妾は泣いていた。

「フヨツフヨツフヨツ。陰陽師のやつら、またあつさりとあけ渡しましたなあ・・・。まあ、ちやつちやと抜いてしまいましょう」

「廬地蔵、生きていたのか。気持ちの悪い奴だな。お前は・・・」

「

「貴女が死ぬまで、死ねませぬ」

一つの建物に入ると、土が剥き出しの地面に杭のような物が刺さつてゐるを見つけた。妾は悲しい気持ちだったが、それを抜きとる。

「これで・・・封印は残りあと一つ。（影犬、お前に会いたかった）

その時、杭を抜いた地面がモゴモゴと揺れ出した。揺れが大きくなつていき、穴から手足が出てきた。

妾は以外の奴の注目も穴から出てきた手足に集まる。

「ゴボッゴボッゴボッ・・・

「誰か封じられておつたか！」

一体の妖怪が言葉を発した直後、ソイツは出てきた。

穴から出てきたのは、巨大な化け物だつた。筋肉質な極太で左右に2本ずつの計4本もあり、そして般若のような顔、歌舞伎役者のような長い毛を垂らし、恐ろしさを表現したような妖怪だつた。穴から出てきた妖怪に物怖じもせず、妾は近づいた。

「久し振りだな。土蜘蛛」
つちぐも

「あん？ 羽衣狐か？ あいつはいないのか、影犬」
影犬という言葉に思わず反応してしまった。周りの妖怪たちは妾の様子に怯えている。そんなことも気にせず、土蜘蛛は話しかけた。

「いつもいたくせにどこに行つたんだよ。・・・・まさか、捨てたのか？」

妾の心の底から怒りがわいてきた。こんな時に何故こいつはそれを言つのじや。強いやつだけ戦うことしか頭にないくせに！－！

「情けね～なお前。あんなにも側に置いていたくせによ」

「黙れ！！！」

思わず大声を上げて妾の全妖力を解放してしまった。今の妾の顔は何とも言えないだろうな。

しばらく沈黙が続くと鬼童丸がやつて來た。土蜘蛛に強いやつが来ると伝えると妾に近づいた。

「どうか静まりください羽衣狐様。私は遠野で影犬の子に会いました」

「何？」

あの影犬に子供が・・・？ 妾は信じられなかつたが鬼童丸が言つからには本当である。

その瞬間妾はいつもと同じように笑つた。

「やうか、早く会いたい。早く来ておくれ、影犬の子よ」

そして、じりえきれなくなつた妾の笑い声が響いた。

第三十八話 帰還！いざ京へ（後書き）

次からは戦闘シーンが多くなります。
その分遅くなりそう。

第三十九話 京上空の戦い（前書き）

中間テストのせいでだいぶ遅れてしまいました。
申し訳ありません。これからはまた早く書きます。
あと羽衣狐の会話も元の「」に戻します。

第三十九話 京上空の戦い

本家から出発してからだいぶ時間が経つた。ついてきた妖怪たちはみんな酒を飲んだり、寝ていたりしていた。以外にも雨造と納豆小僧達、力二坊主が仲良く話をしているみたいだ。

ちなみに俺は外でのんびりと笛を吹いている。（吹いている曲はAST FORWARDと思つてください）

「兄様～～どこですか？」

笛を吹き終わると茜の声がした。笛を懐に入れて看板から下りた。

「何か用か？」

「あつ兄様！会議を行うからとリクオ様が呼んでいます」

茜に言われて会議を行う部屋に向かった。

部屋につくと黒が奴良組の組織について話し出した。

「達磨会や牛鬼組といった、本家のほかに最高幹部と呼ばれる二十の貸元がいる。今回の出入りには貸元から狛々組の猩影様と影犬組のリュウガ様が参加している。どちらともまだ間がないため、参謀役にはこの黒田坊がつきます」

まだ間がない・・・確かにまだ半年くらいしかなってないから仕方ないか。その後、イタク達となんか重い空気になつて部屋から追い出された。

「なんだ首無の奴？」

「仕方ない。主、この酒でも飲んでいましょうか」

リュウガ様がいなくなつた後、首無さんが別人のよつに変わつて遠野妖怪に説教しました。

だけど鎌を持つている遠野妖怪がさらに重くするよつなことを言つてしまつた。そのせいで首無さんがさらに機嫌悪い顔のなつてゐるし……。

「妖怪ヤクザの若頭とその影つとかなる者が鬼發も鬼憑もわからねえ！なぜ誰も教えない？答えは・・・『誰も使えねえ』そんな組に上に立たれるなんて我慢ならん！…」

「おい！」

遠野妖怪の発言に雷獸さんが殺氣を出しながら声を上げた。一体どうしたんだらう？

「今何て言つた！？リュウガ様の事をバカにしたるー！？」

先程の発言に苛立つたみたいだつた。炎獸さんと氷獸さんが止めようとしても聞かなかつた。それどころか首無さんも紐を手にしてしまつた。

「鎌を背にした男、礼儀を教えてやる。おもてへ出るよー！」

「おもてに行く必要もねえー！」の場で教えてやるよー！」

といつといづ喧嘩が始まつてしまつた。外に出た後、遠野妖怪が鎌で攻撃して首無さんが紐を使い、雷獸さんが肩の車輪を両手に持つて戦つてゐる。皆が止めようとしてもできなかつたので私は急いでリュ

ウガ様の元へ走つた。

リュウガSide

「…………何が起つてんだ……？」

「まさか、あいつら……」

オレがいやな方に考えていたら茜が勢いよく部屋に入つて來た。そして外で何が起きているのか全て話した後、リクオと共に呆れた声を出して、外に向かつた。

外に出るとイタクの姿が獣の姿になつていて、首無と雷獸がそれぞれの武器で防いでいた。

「おい！…首無、イタク・…・…てめえら」「くるあああー…何しとんじやあああああー…！」「…?え」

リクオが止めようとした時、突然聞き覚えのある声がしてきた。まさかと思いながら上を見るとそこには・・・鳩がいた。

「京につく前にいい――!?船がぶつこわれちまうだろ――――
――がああ、ボケエエ――!」

そのまま首無とイタクに薬をつけた鳩に俺とリクオの拳が待つてい
た。

「…………何しに来た鳩」

「大方、置いて行かれるのが嫌だつたんだろうな」

「そうだ！本家ではつてたんだぞ」「ラーハー――

体が弱いくせによくいうぜ。鳩には驚かせれるよ・・・。

「血へドはいて倒れたつてしらねーぞ」

「バカ言え！むしろ本望だな！てめーが三代目になんの見届けられんならよーー！」

そう言つている間に俺は雷獸の所に行き、叱りはしたが期待の言葉をかけてその力を俺のために使えと言つて許した。そこにいい感じが出来た瞬間だった。

バサバサバサバサ！！！

突然空を飛ぶ妖怪集団に囲まれた。ビーやら京妖怪みたいだな。

「どこの船だ！？月も沈んだ夜明け前、命知らずがまよいこんだか？」

皆が驚いている中一人の京妖怪が名乗り出してきた。

「きけ！其処の船。我こそは京妖怪・白蔵主はくざうすー！」こは鞍馬山上空より東に約四里の地点である

なるほど~喧嘩しているうちに京にたどりついたというわけか。そう思つてゐるうちに京妖怪らが攻撃しようとしたので黒の指示とともに態勢を整えた。

だけど京妖怪達は攻撃してこなかつた。名乗るまで手を出さないと白蔵主が言つたからだ。

「おぬしらは敵か？それとも味方か？はたまた羽衣狐様の配下に
りに来た者か？」

「バー力！だれがそんなためにくるかよ！…」

自慢げに納豆小僧が畏の代紋を見せたら四百年間の怨みと叫びながら京妖怪どもが襲ってきた。全く嫌なことをしてくれたな。だが、白蔵主がそれを止めさせた。槍を振り下ろした部分は味方の武器もろとも破壊していた。かなりの正々堂々とした妖怪だな。

「奴良組総大将ぬらりひょん！なにゆえ名乗り出でこんのか？出でこぬならいたしかたない。総力を上げてこの船を落とすことになるぞ」

白蔵主が言つても誰も出す気がないみたいだな。だけど、リクオは黙つている奴じやないんだな。

案の定リクオが出て行こうとして首無が止めようとした。それをリクオは鏡花水月で再び歩き出して名乗り出た。

「奴良組若頭ぬらりひょんの孫。奴良リクオ！」

「成程、よからう！…この白蔵主が相手になろう。坂東妖怪の心意氣・・・見せてみよ！…」

リクオと白蔵主が戦うとした時、一体の京妖怪が出てきた。武器を船の向けながら名乗りだした。

「俺は鎧鴉！影犬の子よ俺と戦いな。貴様の父親に怨みがあるんだ！…出てきな！…それとも怖いのか！？」

鎧鴉は大声で俺を呼んでいる。ちようどいい、遠野での成果を試して見るかと思いながら近づいてみると獣型が俺を止めた。

「（待テ人型、今度こそ俺が最初二殺ル！）」

「（・・・・・はあ、分かつたよ）」

獣の姿が変わつて、俺は改めて鎧鴉の方を向いた。

「（こ、こいつ・・・同じだ。影犬にそっくりだ！）行くぞ影犬の子！！」

「ククツ、雑魚ガ！」

間抜けな奴だ。ただ真正面から武器を構えて向かってきただけだった。素早く影の中に入り、奴が止まつた瞬間に影から出て体ごと噛み千切つた。

「マズイ。ヤハリ食ウノハ妖怪デハナク人間ダナ」

リクオの方は白蔵主の畏を断ち切つて、槍を破壊していた。
最初の戦いは俺たちの勝利だな。

第四十話 それぞれの思い

「バカな、ワシの茶枳尼だきにが……それが噂に聞く祢々切丸か」
自分の武器を壊されたから落ち込んだかなと思つていたが、白蔵主
は突然笑い出した。

そして首を斬れと言いだした。リクオや下僕達が呆れた顔していた。

「ぬ……しばし待て……最後に聞きたい事を思い出した!!」

そう言って俺の元に近づいてきた。父上の対する怨みだな……

「影犬の子よ、羽衣狐様と結婚すると言つてくれ!!」

『・・・・・ハア?』

こいつ何言つてるんだ?リクオは口をポツカリあけているし、それ
に敵の大将、羽衣狐は父上に、俺に怨みを感じているのに結婚しろ
なんて……。
その時、配下の京妖怪が船に攻撃しだした。

『オイオイ、大将ガイルンダゼ?』

「何が大将だ!!そいつはもうワレラの大将ではない!!」

一気に京妖怪は攻め込んできた。白蔵主が止めようとしても聞かな
かつた。

「耐えろ!!もうすぐ夜明けだ!!」

「残念だな……明けても何も変わらんぞ」

そうしているうちに太陽が昇った。しかし、リクオ達の姿は変わら
なかつた。また京の都を見るとおぞましい柱が空に向かって流れて

いた。

『・・・・・ナンデダ?トテモ氣持チガイイ』
「(もしかして父上の血が反応しているから……)」

考えようとしたが周りが大変なことに気付きやめた。
宝船が山沿いにして首無が紐で船の分解を防ぎ、イタクが鎌で船を壊そうとした京妖怪を切り裂いた。

『死ネ! 暴風竜激破!!』

今の技で半数くらいの京妖怪が落ちたな。他の連中は慌てて撤退した。

だが船は山を越えてしまつたな……。

「川だ!! 川があるぞ!!」

リクオが川に気付いて首無とイタクが其処に落としたが、川から出るなこりや。

『行クゾ猩影。俺達ガ止メル』

「はい!!」

二人で船の前に立つて猩影が手で押さえ、俺は体で押さえた。冷麗が氷技で船を凍らせて止めた。その後、本家の妖怪たちが歓喜した。

「さすが影犬の子だな」

『白藏主・・・』

「そしてぬらりひょんの孫よ、行くとしたらまず伏田稻荷に向かえ。らせんの封印の一一番目の場所だ!!」

らせんの封印？なんだかすうじやつなものだな。

「それでは影犬の子よーワシに宣言を、『ダマレ』ぐおおおおおー！」

白蔵主の頭を掴み、おもいつきり強く投げ飛ばした。それにしても羽衣狐か。

どんな奴か会つてみよつかな（一ニヤツ）

羽衣狐 side

妾は狂骨と一緒にティータイムをとつていた。狂骨と色々話をした後、狂骨が質問してきた。

「お姉さまはいつ影犬に会つたのですか？」

「ふむ、影犬に会つた事か・・・」

思つてゐるうちに妾はいつの間にか涙を流していた。

「あの、お姉様・・・私はお姉様に辛いことをしたのでしょうか？」

狂骨が、恐る恐ると言った風に妾に尋ねてくる。余計な気遣いをさせてしまつとは・・・。

「ふふ。心配ないぞ」

「でも、涙を流していましたよ」

「構わん。それより影犬についてじやつたな。あれは・・・妾がま

だ淀殿とか言つ者に転生していた間もない時の、ある夜の散歩をしたときじや

いつ思い出してもあれほどよいものはないなかつたの。

「その夜に影犬と会つたのじや」

「どんな感じでしたか?」

「その時の影犬はまだ妾に従つておらず、妾に牙をむいてきた。妾は戦つたが負けてしまったのじや」

紅茶を飲んで前を向くと、狂骨が真剣な表情をしてゐる。

「勝つたのに、影犬は……お姉さまを殺さなかつたのですか?」

「うむ。何故殺さないと聞いたのじや。そしたら『なかなかのと強さだな。俺はあんたに惚れた』と妾に言つたのじや」「妾をそう言つと狂骨が顔を赤くしながら見ていた。どうしたのじや?」

「い、告白したのですか!」

「やうじや、まるで生娘の初恋みたいな想いになつたわ。ふふつ、今思つとその瞬間が幸せの始まりじやつた。それから妾は影犬に恋をしたのじや」

「それなのに……お姉様は、何故影犬を捨てたのですか?」

狂骨はついに聞いてきた。妾が一番嫌いなことを……。

「その事はまた次でじや」

無理やり話しが終わらせて妾は階段を下りた。

「皆、いるか・・・？」

周りを見渡して静かに問いかけた。そして妾の下僕たちが次々現れた。

「いよいよ最後の封印を解きに行くぞ」
下僕たちが騒ぎ出している中を歩いた。

「早く会おうぞ！影犬の子よ・・・」

魔都のなかで妾は小さくつぶやいた。

第四十話 それぞれの思い（後書き）

次ではかなり激しい戦いになるかも。
あと花開院林を出したいと思います！！

第四十一話 鳥居の森で大乱闘（前書き）

ものすごく時間がかかってしまってスミマセン…！
その代わりに今まで一番長く書きました。
あとオリキャラ登場です。

第四十一話 鳥居の森で大乱闘

現在、鴨川から白蔵主に言われた通り伏目稻荷神社に向かって歩いていた。

だが目の前に大量の鳥居にゼ僕たちが騒ぎ出している。

こつちも重々しい妖気の柱のせいで体中で血が騒いでいる。

「アニキ～何で大将はアイツの言つたことを信じてるんだ？」
鬼胡桃が疑わしい目でリクオを見つめていた。それに続いて黒も話しかけてきた。

「私もですリュウガ様。何を信用してリクオ様は？」

「・・・あの男は何か嘘をつくような奴じゃねえと思うぜ」

「つと言つわけさ。それが嘘でも俺は主について行くだけさー」
そう言つてリクオの後をついて行つた。その後を下僕達が慌てて追いかけてきた。

しばらく歩くとそこらに数人の人が觀光していた。

『（・・・アマリオイシクナサソウナ人間ダナ）』

「主の前であまり言うなよ。聞こえたら怒られるんだから・・・」

「リュウガ」

「！？は、はい。何でしょうか？」

獣型と話していたせいか、リクオが目の前に突っ立っていることに気がつかなかつた。

「お前は向こうの道から行つてくれ。いざとなつたら頼むぞ」
リクオとは反対の道であるが異変があればすぐに行ける距離であつた。

「分かりました！」

『（ククツ、コレナラ人ヲヤレルカモナ）』

その後、リクオに言われた通りに反対の道から下僕を連れて進んだ。
しばらく歩いたからもうすぐで出口につくな。
うん？この匂い・・・妖怪とか？

「全員止まれ！！」

急に止めたから後ろからいろいろな声が上がつた。力一坊主に乗つたままの茜と炎獣が近づいてきた。

「どうかしましたか兄様？」

「リュウガ様？」

みんなから質問されているが今は無視して、匂いがする方は・・・
・あっちの草むらだな。

「おい、出できな」

声をかけても出てこなかつた。

「仕方ないここは『（待テ、人型）』な、なんだよ
『（俺様ニイイ考エガアル。耳ヲカセ）』

獣型の考えを聞いてその手にいくことにした。

「蛇帯、ちょっと来てくれ

俺が呼ぶとすぐに蛇帯はやって来た。

「何か用ですか？」

「あの草むらにお前の刀を一本一本刺せ

「了解しました！」

蛇帯は言われたとおりに刀を差していった。そして一本の刀がある草むらに刺さった時に悲鳴がした。

「ヒィ～～～～痛い！！！」（泣

草むらから牛の頭をして龍の身体をした結構強そうな妖怪ができ

た。

「やつと出たか・・・お前は京妖怪だよな

「は、はい！僕は龍鬼とあります！」

「何故ここにいる？」

「そ、それが・・・・迷子になってしまった・・・・（泣

「――――ハア～～～～！？」「――――

「こいつ……京出身なのにか!? 呆れた妖怪だな。
あと、前言撤回! 弱そうな妖怪だ!

「どうしていいのか分からなかつた所で奴良組がやつて來たので急
いで隠れたんです」

涙目になりながら説明している龍鬼に少しかわいそうに思つてきた。

『ドウスル人型? 僕ハドウテモイイガナ』

「(ほつとく)こともできないからな。) それじゃ、お前もついてき
な」

「ほ、本当ですか! ? ありがと! ジゼこますー! 」

シユンツ! !

突然どこからか矢が向かつてきた。
けどそんなものは大鎌で素早く斬り落とした。

「なかなかよい動きをするな影犬の子よ」

30人くらいの陰陽師が現れた。一番先頭にいる女が気迫のこもつた声で名乗り出た。

「私の名は花開院林！貴様に殺された弟、星斗の姉だ！！！」

何！？星斗の姉だと！？同じように全員が騒ぎ出した。

「今ここで、弟の仇を討つ。全員行くぞ！！」

林のかけ声と共に他の陰陽師達が懐から妖刀や札を出して戦闘態勢になつた。

「林つて言つたな。ここで討たれるのは俺ではない。貴様らの方だ！かかれ～～～！」

ここにおいて、影犬組と陰陽師の戦いが始まった。

其処ら中で刀が切り合い、獣同士が噛みつき合つていた。けど、戦いはこちらの方が有利になつて来たな。いくら陰陽師でも戦いなれているこちらの方が早い動きで陰陽師を倒している。

「もうあきらめたらどうだ？これ以上は食えないよ」

殺した陰陽師の生き肝をかじり、大鎌を林に向けながら呟いた。俺とともに戦いを挑んで来たせいが林は体中傷らだけで片手で傷の酷い方を押さえていた。

「だまれ！私は、私は・・・」

林があきらめないと言つ前に氷獸と牙魏が話しかけた。

「リュウガ様。陰陽師は全て殺しました。後はそこにいる者だけです」

「それと・・・ここにあるのが殺した陰陽師の生き肝です」

「そうか、みんな」苦勞さん。後は・・・アレ、いない」
いつの間にか林の姿はなかつた。しかし逃げた後には血痕の跡が残
つていた。

「追いますか？」

「別にいいよ。それよりも主の元へ行くぞ」
そう言って再び歩こうとした時、突然大きな音がした。
それと同時に嫌な予感がしてすぐに出口に向かつた。

第四十一話 鳥居の森で大乱闘（後書き）

次回はこれよりも早く書くようにします。
いよいよ土蜘蛛との対決です！ぜひ、読んでください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6760s/>

ぬらりひょんの孫～魑魅魍魎の主の影

2011年12月1日17時49分発行